

北方町文化財報告書第一集

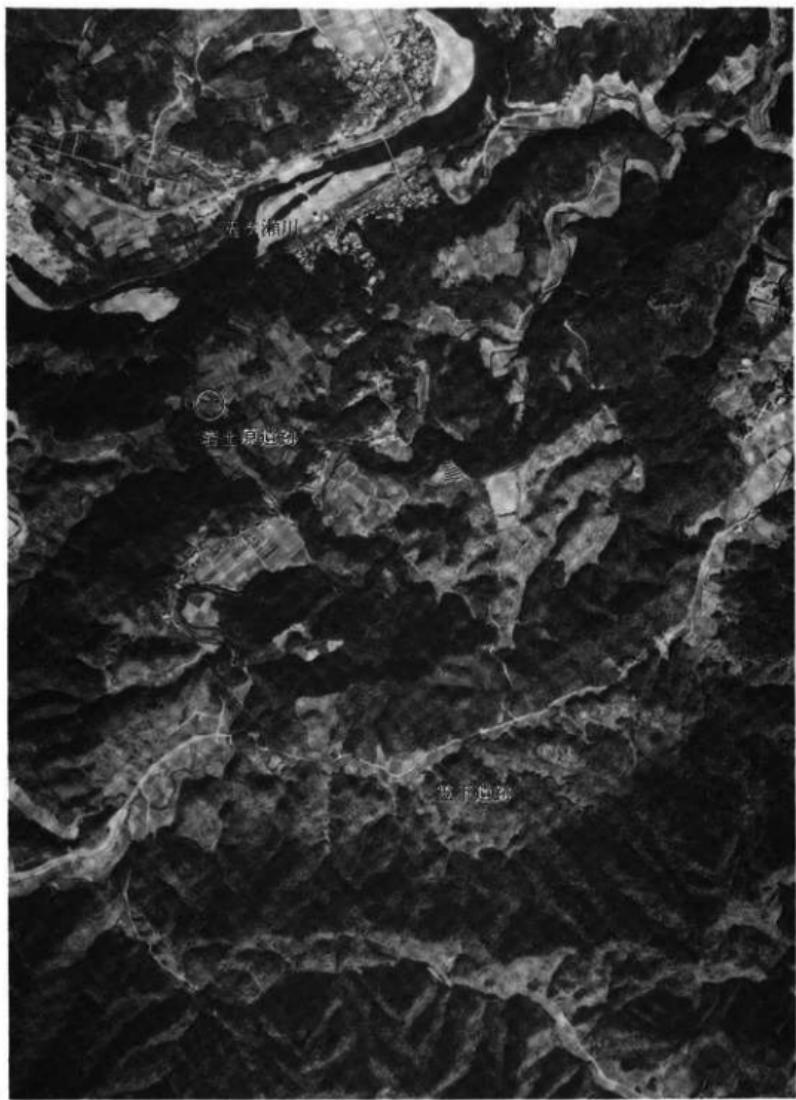
笠下遺跡

ゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年3月

北方町教育委員会

卷頭図版 1



PL 1 航空写真（調査前）



P L 2 航空写真（調査後）

かさ した

笠下遺跡

序

この報告書は、合鐵商事株式会社の委託を受けて昭和62年12月7日より昭和63年10月31日まで、北方ゴルフ俱楽部建設用地内に所在する笠下遺跡の発掘調査を行った記録であります。この遺跡の調査によつて、縄文時代の集石遺構・弥生時代の住居跡・中世の五輪塔や祭祀遺構・建物群・土塁をはじめ各時代の土器や石器・鉄器・陶磁器・明鏡等が多数発見されました。これらは、町内はもちろん宮崎県内における貴重な研究資料になることでしょう。

調査に関しましては、地元の方々をはじめ、関係各位の御協力をいただき、多大な成果を上げることができました。心から厚く感謝申し上げます。

本書が、文化財愛護思想の普及、学術研究等広く活用されれば幸いります。

平成2年3月31日

北方町教育委員会

教育長 河井行雄

例　　言

1. 本書は、北方ゴルフ俱楽部建設に伴い、昭和62年12月7日より昭和63年10月31日まで、実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、合鐵商事株式会社の委託を受けて北方町教育委員会が実施した。
3. 現地の実測図は、小野の他に、岩永哲夫・面高哲郎・北郷泰道・近藤協・谷口武範（県文化課）、緒方博文（日向市教育委員会）、寺師雄二（山田町教育委員会）、藤本啓二（現大分県国東町教育委員会）甲斐博宣（延岡市）の各氏と佐藤貴久美・佐藤きみえ・佐藤八栄子・加行安子（北方町）が行った。
4. 掲載の写真のうち、遺物は主に小野がを行い、水田信義・甲斐博宣・山田聰（延岡市教育委員会）の協力を得た。遺構は甲斐博宣と、小野が撮影した。
5. 遺物の実測図は小野の他、山田聰、島岡武（川南町教育委員会）、大塚徳子（延岡市）、吉田純子・佐藤きみえ・黒木小夜子（北方町）が行った。
6. 遺構・遺物のトレースは、大塚徳子・佐藤きみえ・佐藤八栄子が行った。拓本は、大塚徳子・吉田純子が行った。また、富高津子・柳田祝子・甲斐佳代・中尾彩子の協力を得た。
7. 遺物写真は主に小野がを行い、甲斐博宣の協力を得た。
8. 獣骨に関しては那須哲夫氏（宮崎大学農学部獣医学科助教授）の御教示を得た。
9. 石材の鑑定に関しては、足立富男氏（門川町）・宍戸章氏（県文化課）・松田正利氏（延岡市）の御教示を得た。
10. 五輪塔の墨書きに関しては秋山栄雄氏（夕刊デイリー新聞社）および桑井弘準氏（延岡市天福寺住職）の御教示を得た。
11. 陶磁器に関しては、大橋康二氏（佐賀県立陶磁文化館）の御教示を得た。
12. 本書に使用したレベルは、全て海拔高で表示した。また、本書の方位は全て磁北である。
13. 本書「II 調査の経緯」を県文化課面高哲郎氏が担当した。それ以外の文責は小野にある。
14. 遺物等は北方町教育委員会で保管している。
15. 題字は甲斐晃氏（北方町教育委員会）の揮毫による。
16. 本書を作成するにあたり、下記の方々に多大な御教示・御協力をいただいた。記して感謝致します。（順不同）
別府大学教授賀川光夫氏、別府大学教授橋昌信氏、九州大学助手西健一郎氏、宮崎県文化課埋蔵文化財担当者各位、石川悦雄氏（県総合博物館）、日高孝治氏（県史編纂室）、永友良典氏・戸高真知子氏（埋蔵文化財センター）、宮崎県市町村埋蔵文化財担当者各位、沢泉臣氏（北川町）、合鐵商事株式会社・大林組及び地元関係各位

本文目次

第一章 はじめに	1
第二章 遺跡の立地と環境	3
第三章 調査の内容	
(1) I区の調査	
1. 調査の概要	9
2. 層序	10
3. 遺構と遺物	
a. 旧石器時代	13
b. 繩文時代	14
c. 弥生・古墳時代	21
(2) II区の調査	
1. 調査の概要	40
2. 層序	40
3. 遺構と遺物	43
(3) III区の調査	
1. 調査の概要	48
2. III-1区の調査	48
3. III-2区の調査	69
(4) IV区の調査	
1. 調査の概要	72
2. 層序	79
3. 遺構と遺物	
a. 旧石器時代	80
b. 繩文時代	80
c. 弥生・古墳時代	116
d. 中・近世	118

(5) V区の調査	
1. 調査の概要	142
2. 層序	157
3. 遺構と遺物	
a. 旧石器時代	158
b. 繩文時代	158
c. 弥生・古墳時代	177
d. 中・近世	186
(6) VI区の調査	
1. 調査の概要	192
2. 層序	196
3. 遺構と遺物	
a. 旧石器時代	198
b. 繩文時代	198
c. 弥生・古墳時代	202
d. 近世	203

第四章 まとめ	
(1) 発掘調査の成果と問題点	204
(2) 旧石器時代の遺物について	205
(3) 繩文時代遺構と遺物について	205
(4) 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物について	206
(5) 中・近世の遺構と遺物について	207

挿 図 目 次

Fig 1	笠下遺構の位置及び周辺遺跡（1 / 20,000）	4
Fig 2	笠下遺跡調査区位置図（1 / 5,000）	5・6
Fig 3	笠下遺跡周辺遺跡分布図（1 / 75,000）	7・8
Fig 4	I区トレント設定図（1 / 2,000）	9
Fig 5	I区土層図（1 / 30）	10
Fig 6	I区遺構配置図（1 / 200）	11・12
Fig 7	I区出土石器実測図①（1/3・2/3）	13
Fig 8	I区集石遺構実測図（1 / 60）	14
Fig 9	I区出土石器実測図②（1/2・1/3）	16
Fig 10	I区出土石器実測図③（1 / 3）	17
Fig 11	I区出土石器実測図④（1 / 3）	18
Fig 12	I区出土繩文土器実測図①（1 / 3）	19
Fig 13	I区出土繩文土器実測図②（1 / 3）	20
Fig 14	I区1号住居跡実測図（1 / 40）	22
Fig 15	I区1号住居跡出土遺物実測図（1 / 3）	23
Fig 16	I区2号住居跡実測図（1 / 40）	24
Fig 17	I区2号住居跡出土遺物実測図（1 / 3）	25
Fig 18	I区3号住居跡実測図（1 / 40）	26
Fig 19	I区3号住居跡出土遺物実測図（1 / 3）	27
Fig 20	I区4号住居跡土層図（1 / 20・1 / 60）	27
Fig 21	I区4号住居跡実測図（1 / 60）	28
Fig 22	I区4号住居跡出土遺物実測図①（1 / 3）	29
Fig 23	I区4号住居跡出土遺物実測図②（1 / 3・1 / 4）	30
Fig 24	I区4号住居跡出土鉄器実測図（2 / 3）	31
Fig 25	I区5号住居跡実測図（1 / 40）	31
Fig 26	I区6号住居跡実測図（1 / 40）	32
Fig 27	I区6号住居跡出土遺物実測図（1 / 3）	32
Fig 28	II区トレント設定図（1 / 2,000）	40
Fig 29	II区土層図（1 / 20）	40
Fig 30	II区遺構配置図（1 / 400）	41・42
Fig 31	II区集石遺構実測図（1 / 60）	44
Fig 32	II区出土遺物実測図①（1 / 2・1 / 3）	45
Fig 33	II区出土遺物実測図②（1 / 2）	46

Fig 34	III区調査区位置図（1 / 2,000）	48
Fig 35	III-1区遺構配置図（1 / 100）	49
Fig 36	III-1区地輪下実測図（1 / 40）	57
Fig 37	III-1区空風輪（墨書き）実測図（1 / 10）	58
Fig 38	III-1区空風輪実測図（1 / 20）	58
Fig 39	III-1区火輪実測図①（1 / 20）	60
Fig 40	III-1区火輪実測図②（1 / 20）	61
Fig 41	III-1区水輪実測図（1 / 20）	63
Fig 42	III-1区地輪実測図①（1 / 20）	64
Fig 43	III-1区地輪実測図②（1 / 20）	65
Fig 44	III-1区その他の石塔実測図（1 / 12）	66
Fig 45	III-1区一字一石「悲」実測図（1 / 2）	66
Fig 46	III-1区一字一石遺構実測図（1 / 25）	67
Fig 47	III-1区祭祀遺構出土遺物実測図（1 / 3）	67
Fig 48	III-1区祭祀遺構実測図（1 / 30）	68
Fig 49	III-1区出土遺物実測図（1 / 3）	68
Fig 50	III-2区遺構配置図（1 / 300）	69
Fig 51	III-2区出土遺物実測図（1 / 2）	69
Fig 52	III-2区集石遺構実測図（1 / 60）	70
Fig 53	IV区トレンチ及び調査区位置図（1 / 2,000）	72
Fig 54	IV区主要遺構配置図（1 / 600）	75-76
Fig 55	IV区上層図（1 / 80）	77-78
Fig 56	IV区出土石器①剝片尖頭器・スクレイパー（1 / 2）	80
Fig 57	IV区集石遺構実測図①（1 / 60）	83
Fig 58	IV区集石遺構実測図②（1 / 60）	84
Fig 59	IV区集石遺構内出土遺物実測図（1 / 3・2 / 3）	85
Fig 60	IV区出土土器①山形押型文（1 / 3）	87
Fig 61	IV区出土土器②脩円押型文（1 / 3・1 / 4）	88
Fig 62	IV区出土土器③格子目押型文・貝殻文円筒土器（1 / 3）	89
Fig 63	IV区出土器④無文・撲糸・その他（1 / 3）	90
Fig 64	IV区出土石器②石鎌（2 / 3）	92
Fig 65	IV区出土石器③石鎌・尖頭状石器（2 / 3）	93
Fig 66	IV区出土石器④石錐・スクレイパー等（2 / 3）	94
Fig 67	IV区出土石器⑤石錐・石槍・スクレイパー等（2 / 3）	95
Fig 68	IV区出土石器⑥使用痕を有する剝片（2 / 3）	96
Fig 69	IV区出土石器⑦使用痕を有する剝片（2 / 3）	97

Fig 70	IV区出土石器⑧使用痕を有する剝片・スクレイバー（1/3）	98
Fig 71	IV区出土石器⑨スクレイバー（1/3）	99
Fig 72	IV区出土石器⑩石斧・二次加工を有する石器（1/3）	100
Fig 73	IV区出土石器⑪石核（1/3）	102
Fig 74	IV区出土石器⑫石核（1/3）	103
Fig 75	IV区出土石器⑬石核・礫器（1/3）	104
Fig 76	IV区出土石器⑭礫器（1/3・1/5→172）	105
Fig 77	IV区出土石器⑮礫器（1/4）	106
Fig 78	IV区出土石器⑯礫器（1/4・1/6→188）	107
Fig 79	IV区出土石器⑰磨石・敲石・凹石（1/3）	108
Fig 80	IV区出土石器⑱磨石・敲石・凹石（1/4）	109
Fig 81	IV区出土石器⑲磨石・敲石・凹石・石皿（1/4・1/8→223）	110
Fig 82	IV区出土石器⑳凹石（1/4）	116
Fig 83	IV区5号土塙実測図（1/40）	116
Fig 84	IV区5号土塙内出土遺物実測図（1/4）	117
Fig 85	IV区1号住居跡実測図（1/80）	117
Fig 86	IV区1号祭祀造構出土備前焼鉢（1/4）	118
Fig 87	IV区1号祭祀造構（1/15）	119
Fig 88	IV区2号祭祀造構（1/15）	121
Fig 89	IV区3号祭祀造構（1/15）	121
Fig 90	IV区1号・2号土塙実測図（1/60）	123
Fig 91	IV区3号・4号土塙実測図（1/60）	123
Fig 92	IV区6号土塙実測図（1/60）	124
Fig 93	IV区7号土塙断面図（1/40）	124
Fig 94	IV区8号土塙実測図（1/60）	124
Fig 95	IV区8号土塙出土遺物実測図（1/60）	124
Fig 96	IV区10号土塙実測図（1/60）	124
Fig 97	IV区12・13号土塙実測図（1/60）	126
Fig 98	IV区12・13号土塙出土遺物（1/2・1/3・1/10）	127
Fig 99	IV区14号土塙実測図（1/60）	127
Fig 100	IV区18号土塙実測図（1/60）	128
Fig 101	IV区19号土塙実測図（1/60）	128
Fig 102	IV区20号土塙実測図（1/60）	128
Fig 103	IV区21号土塙実測図（1/60）	129
Fig 104	IV区22号土塙実測図（1/60）	130
Fig 105	IV区23号土塙出土遺物（1/4）	130

Fig 106	IV区 1号溝状造構土層図（1 / 60）	130
Fig 107	IV区 1号溝状造構出土遺物（1 / 2・1 / 4・1 / 8）	130
Fig 108	IV区掘立柱建物実測図（1 / 200）	136
Fig 109	IV区柱穴内出土遺物（1 / 3）	136
Fig 110	IV区出土鉄器・陶器（1 / 2・1 / 8）	139
Fig 111	IV区出土土錐・砾石等（1 / 3）	140
Fig 112	V区トレンチ設定図（1 / 2,000）	142
Fig 113	V区造構配置図（1 / 400）	143・144
Fig 114	V区遺物①ナイフ形石器（2 / 3）	158
Fig 115	V区集石造構実測図①（1 / 60）	159
Fig 116	V区集石造構実測図②（1 / 60）	160
Fig 117	V区集石造構出土遺物（1 / 3・2 / 5→1・2）	161
Fig 118	V区出土遺物②石鏃・尖頭状石器他（2 / 3）	165
Fig 119	V区出土遺物③石匙・石斧他（1 / 2・1 / 3・2 / 3）	166
Fig 120	V区出土遺物④使用痕を有する剝片・スクレイパー（1 / 3）	167
Fig 121	V区出土遺物⑤石核・礫器（1 / 3）	168
Fig 122	V区出土遺物⑥礫器（1 / 4）	169
Fig 123	V区出土遺物⑦磨石・敲石・凹石・石皿（1 / 3・1 / 6）	170
Fig 124	V区出土遺物⑧押型文土器（1 / 3）	172
Fig 125	V区出土遺物⑨無文土器（1 / 3）	173
Fig 126	V区出土遺物⑩貝殻文円筒土器（1 / ）	174
Fig 127	V区出土遺物⑪貝殻文・撚糸文・平柄系土器等（1 / 3）	175
Fig 128	V区出土遺物⑫その他の繩文土器（1 / 3）	176
Fig 129	V区 1号住居跡実測図（1 / 60）	177
Fig 130	V区 1号住居跡出土遺物（1 / 3）	178
Fig 131	V区 2号住居跡実測図（1 / 60）	179
Fig 132	V区 2号住居跡出土遺物（1 / 3）	180
Fig 133	V区 3号住居跡実測図（1 / 60）	181
Fig 134	V区 3号住居跡出土遺物①（1 / 3）	182
Fig 135	V区 3号住居跡出土遺物②（1 / 3）	183
Fig 136	V区 4号住居跡実測図（1 / 60）	184
Fig 137	V区 5号住居跡出土遺物（1 / 3）	184
Fig 138	V区 5号住居跡実測図（1 / 60）	185
Fig 139	V区その他の土器（1 / 3）	185
Fig 140	V区祭祀造構実測図（1 / 30）	186
Fig 141	V区祭祀造構・組石造構出土遺物（1 / 2・1 / 3）	186

Fig 142	V区組石造構実測図（1 / 100）	187
Fig 143	V区上塙実測図①（1 / 40）	188
Fig 144	V区土塙実測図②（1 / 40）	189
Fig 145	V区建物実測図（1 / 100）	190
Fig 146	V区3～7号建物実測図（1 / 200）	191
Fig 147	VII区トレンチ及び調査区位置図（1 / 2,000）	192
Fig 148	VII区造構配置図（1 / 400）	193
Fig 149	VII区土層図①（1 / 40・1 / 80）	196
Fig 150	VII区土層図②（1 / 80）	197
Fig 151	VII区出土石器①（1 / 3・2 / 3）	198
Fig 152	VII区集石造構実測図（1 / 60）	198
Fig 153	VII区出土土器①縄文土器（1 / 3）	199
Fig 154	VII区出土石器②スクレイバー・石核等（1 / 3）	200
Fig 155	IV区出土石器③磨石・敲石・表採資料等（1 / 3）	201
Fig 156	VII区1号住居跡上層図（1 / 60）	202
Fig 157	VII区出土土器②土師器（1 / 3）	203
Fig 158	VII区近世祭祀造構出土土師皿（1 / 2）	203

図 版 目 次

PL. 1	航空写真（調査前）	卷頭図版 1
PL. 2	航空写真（調査後）	卷頭図版 2
PL. 3	笠下遺跡遠景（西より）	2
PL. 4	I 区遠景・近景	33
PL. 4	I 区集石遺構及び I 区出土石器	34
PL. 4	I 区住居跡	35
PL. 7	I 区出土縄文土器及び住居跡出土遺物①	36
PL. 8	I 区住居跡出土遺物②	37
PL. 9	II 区遠景・近景等	38
PL. 10	II 区集石遺構	39
PL. 11	II 区出土遺物	47
PL. 12	III 区遠景・近景等	50
PL. 13	III 区祭祀遺構等	51
PL. 14	III-1 区出土五輪塔（空風輪）	52
PL. 15	III-1 区出土五輪塔（火輪）	53
PL. 16	III-1 区出土五輪塔（火・水輪）	54
PL. 17	III-1 区出土五輪塔（水・地輪）	55
PL. 18	III-1 区出土その他の石塔及び遺物	56
PL. 19	III-1 区出土「悲」(135)	66
PL. 20	III-1 区 D-D' 断面	67
PL. 21	III-1 区出土「元豊通寶」	67
PL. 22	III-2 区検出状況・集石遺構・出土遺物等	71
PL. 23	IV 区遠景及び IV-1 ~ IV-7 区検出状況	73
PL. 24	IV-8 ~ IV-15 区検出状況	74
PL. 25	IV 区層序	79
PL. 26	IV 区出土旧石器時代遺物	80
PL. 27	IV 区集石遺構	81
PL. 28	IV 層遺物出土状況	91
PL. 29	IV 区集石遺構内出土遺物・IV 区出土縄文土器	111
PL. 30	IV 区出土石器（石鏃・尖頭状石器・石槍等）	112
PL. 31	IV 区出土石器（スクレイバー・石斧）	113
PL. 32	IV 区出土石器（石核・礫器等）	114
PL. 33	IV 区出土石器（礫器・磨石・敲石・凹石・石皿）及び IV 区 5 号土塙出土甕(226)	115

PL. 34	IV区5号土塙（南より）	116
PL. 35	IV区1号住居跡（西より）	117
PL. 36	IV区1分祭祀遺構出土備前焼擂鉢（227）	118
PL. 37	IV区1号祭祀遺構及び出土遺物	120
PL. 38	IV区2・3号祭祀遺構及び出土遺物、1～4号土塙	122
PL. 39	IV区6～14号土塙	125
PL. 40	IV区8・10・11号土塙出土遺物	126
PL. 41	IV区12～14号七塙出土遺物	127
PL. 42	IV区15～24号土塙出土遺物	129
PL. 43	IV区19～22号土塙及び1号溝状遺構	131
PL. 44	IV区溝状遺構	132
PL. 45	IV区溝状遺構等	133
PL. 46	IV区1号溝状遺構出土遺物	134
PL. 47	IV区溝状遺構出土遺物（1号溝以外）	135
PL. 48	IV区柱穴内出土遺物	137
PL. 49	IV区出土銚器・古錢等	139
PL. 50	IV区出土砥石・土錘・陶磁器	141
PL. 51	V区遠・近景及びV-1～V-5区調査区近景	145
PL. 52	V-6～V-13区調査区近景	146
PL. 53	V区集石遺構①	147
PL. 54	V区集石遺構②	148
PL. 55	V区住居跡・祭祀遺構・組石遺構	149
PL. 56	V区土塙・祭祀遺構	150
PL. 57	V区土塙及び1～6号建物	151
PL. 58	V区7号建物・集石遺構出土遺物・V区出土石器①（石鏟・石匙等）	152
PL. 59	V区出土石器（石斧・スクレイパー・敲打器等）	153
PL. 60	V区出土七石皿及び縄文土器（押型文・無文・貝殻文円筒土器）	154
PL. 61	V区出土縄文土器（貝殻文円筒土器・平柄・船元等）	155
PL. 62	V区住居跡出土遺物	156
PL. 63	V区出土赤生土器・古錢・陶磁器等	157
PL. 64	V区層序	157
PL. 65	VI区集石遺構（分布調査時確認）等	192
PL. 66	VI区遠・近景VI-1～VI-5区調査区近景	194
PL. 67	VI-5区調査区近景・集石遺構・層序等	195
PL. 68	VI区出土石器①（ナイフ形石器・石斧状石器等）	196
PL. 69	VI区出土土器①（縄文土器）	199

PL. 70	VII区出土石器②（石核・石斧・礫器・磨石・石皿等）	202
PL. 71	VII区出土土器②（土師器）	203
PL. 72	VII区近世遺構検出状況（西より）	203
PL. 73	VII区近世遺構完掘状況	203
PL. 74	VII区近世遺構出土遺物	203
PL. 75	造成開始	207

表 目 次

Tab. 1	III-1区五輪塔 空風輪法量表	59
Tab. 2	III-1区五輪塔 火輪法量表	60
Tab. 3	III-1区五輪塔 水輪法量表	62
Tab. 4	III-1区五輪塔 地輪法量表	64
Tab. 5	IV区出土集石遺構計測表	82
Tab. 6	IV区掘立柱建物柱間計測表	137
Tab. 7	IV区柱穴出土遺物	138
Tab. 8	IV区出土陶磁器類	139
Tab. 9	V区出土集石遺構計測表①	162
Tab. 10	V区出土集石遺構計測表②	163
Tab. 11	笠下遺跡編年案（弥生・古墳時代）	207

第一章 はじめに

1. 調査に至る経緯

北方町では、地域の活性化及び雇用機会の確保のため、ゴルフ場誘致を企画し、その場所として北方町笠下及び延岡市上三輪町伊原地区の一帯を選定した。予定地内の県道南側には、北へ延びる丘陵性台地が発達しており、埋蔵文化財等の文化財の所在が予想された。そのため、北方町長から町教育長へ文化財の所在の有無の照会があり、町教育委員会では分布調査の実施を計画した。当時、町には埋蔵文化財の専門職がいなかったため、県教育委員会へ対して専門職の派遣を依頼した。

分布調査は、昭和62年5月6日・7日の両日、県文化課主任主事永友良典・同長津宗重の担当で実施し、調査対象敷地内の丘陵性台地5ヶ所より遺物等の散布を確認した。

第1区の東斜面では縄文早期の土器を伴う磐座状遺構、第3地区では15m×22mの範囲に約20基の五輪塔、第4区の東斜面の道路で使用痕のある剝片、第5区北では石組遺構、第6区の西斜面の道路のり面で焼石等が採集された。調査対象地内の丘陵性台地上は、植物等の繁茂により地表面の観察が困難であったが、縄文時代から中世の遺跡が所在する可能性が考えられた。

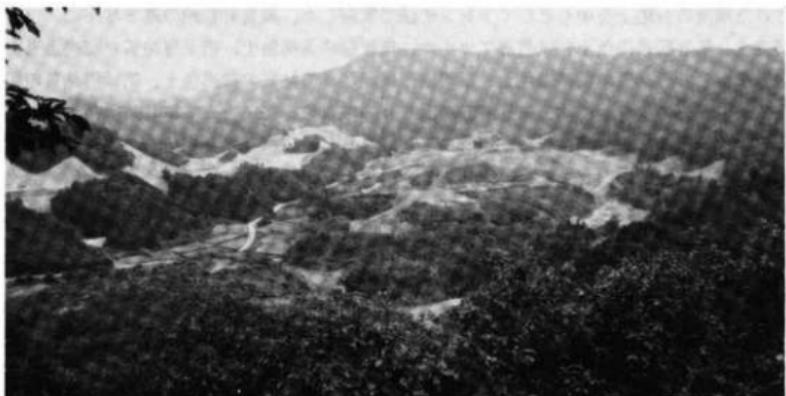
町教育委員会では、分布調査の結果を受けて遺跡確認のための試掘調査を昭和62年6月15日から18日までの間、県文化課主任主事高哲郎の担当で実施した。調査は、遺物等の散布が確認された場所の台地上を中心としてトレンチ法で実施した。調査対象地の基本層序は、(…第I層表土、第II層茶褐色土、第III層アカホヤ、第IV層暗茶褐色土、第V層粘質の暗褐色土、第VI層砂礫混じりの粘質の黄茶褐色土、第VII層砂礫混じりの粘質の黄褐色土、第VIII層粘質の黒褐色土で3~5cmのブロック状、第IX層砂礫混じりの粘質の赤褐色土)で第II層茶褐色土、第III層アカホヤは、擾乱により残存状態が場所により異なり、特に第II層茶褐色土の残存状態は悪い。

第1区は2か所のトレンチを設定し、1か所のトレンチの第V層茶褐色土層上面で無文の縄文土器、集石遺構、焼石が出土した。第2区では4か所のトレンチを設定し、うち3トレンチで第1区と同様の遺構・遺物が検出された。第4区は調査対象地内では最大の平坦部を持つ台地で、6か所のトレンチを設定した。西緩斜面のアカホヤ上で水平に置かれた長径25cmほどの河原石の下から皇宋通寶(1039)・元豐通寶(1078)ほかの古錢が50枚程が出土した。他のトレンチでは焼土を伴う土括等が検出された外、第V層茶褐色土層上面で山形押型文土器、焼石等が出土した。第5区北ではトレンチを3か所設定し、第V層茶褐色土層上面で剝片、焼石が出土した。第5区南北ではトレンチを2か所設定し、第V層茶褐色土層上面で焼石が出土した。第6区ではトレンチを3か所設定し、第V層茶褐色土層上面でチャート片、焼石等が出土した。第5区と第6区の間の北へ伸びる平坦部にもトレンチを設定したが、遺物等は出土していない。また、第1区の東斜面の縄文早期の土器を伴う磐座状遺構について調査を実施したが、その他の遺物が出土せず遺跡とは認められなかった。以上の調査結果から第1・2・4~6区には縄文早期の遺跡、第3・4区及び第5区北には中世を中心とする遺跡が所在することが確認された。

町教育委員会では試掘調査の結果にもとづき、ゴルフ場建設事業者合鐵商事株式会社と遺跡の保護について協議を重ねたが、事業施工上、遺跡の大半が現状で保存することは困難であった。そのため、遺跡に影響を与える部分については、工事着手前に発掘調査を町教育委員会が合鐵商事株式会社からの委託により実施することとし、その旨の協定書を昭和62年10月1日付けで締結した。

発掘調査は下記調査体制で昭和62年12月7日から昭和63年10月31日まで実施した。

調査主体	北方町教育委員会
	教育長 河井行雄
	社会教育課長 三浦 弘
事務担当	社会教育課長補佐 永田信義
調査担当	社会教育課主事 小野信彦
調査指導	宮崎県教育庁文化課
	主任主事 面高哲郎
	同 北郷泰道
	主事 谷口武範



P L 3 箕下遺跡遠景(西より)

第二章 位置と環境

笠下遺跡は、県道延岡～山口原線黒原付近の南側、標高80～90m 程の緩やかな丘陵上に位置する。地名でいえば北方町字笠下塩田・神ノ下・東田となる。(Fig 1～3)

笠下遺跡の所在する北方町は、宮崎県の北部に位置し、東は延岡市、南は門川町・北郷村、西は西臼杵郡口之影町、北は北川町の1市4町村と境を接する。町の南部を東西15km、南北23km余りの町域を占めて五ヶ瀬川が流れる。町域面積のほぼ89%が山林で占められ、北は1,000m～1,600m級の大崩山・鬼の目山・国見山・黒岩山などの山々が、東は400m～800m級の行藤山・霧子山などが、南西は速日峰(二子山)が、西は比叡山などの山々が連なり、平地は、わずかに南部の五ヶ瀬川流域や中部でその支流である曾木川流域にみられる。

北方町の遺跡は、五ヶ瀬川流域の阿蘇溶結凝灰岩上の台地や曾木川流域に展開しており、分布状況については数名の先達による精力的な表探査によってある程度知られている。

しかし、岩土原遺跡・菅原洞穴をのぞきその多くは、本格的な発掘調査が行われていない。従て詳細については、不明な遺跡が多いのが現状であるが、知見している範囲で概略する。

まず、笠下遺跡の北西、尾根一つ越えた所に位置する岩土原遺跡は、五ヶ瀬川の南岸、標高120m前後の台地上に開けた緩やかな起伏の畠地に立地する。昭和44年の南九州大学が行った発掘調査によって縄文早期層の下層から半船底形細石核が出土した。さらに小型細石刃などの石器にまじって、幅広陰帯文の文の上に爪形の連続文をつけた土器片が発見され、旧石器時代から縄文時代早創期にかけての遺跡であることが確認された。

縄文時代の遺跡は、そのほとんどが表探査によって確認されているものばかりである。早期の遺跡として駄小屋遺跡・東原遺跡・曾木原遺跡などが知られている。後期の遺跡では昭和41年に鈴木重治氏によって菅原洞穴が調査され、鐘崎式土器が出土した。また、仲畑遺跡より磨消縄文系の土器が、足鍋遺跡では、西平系の縄文土器が採集されている。

弥生時代の遺跡は、縄文時代に比べてその数が限られてくる。昭和28年に北方町から板付Ⅱ式と思われる土器片が採集され、宮崎大学教育学部に保管されている。後期初頭になると表探品であるが、瀬戸内系の土器の流入が見られる。角田上原遺跡では後期の甕が出土している。また、川水流・打届・東原から石庵の出土例もある。その他、比叡山から石劍が出土したとの記録がある。

古墳時代になると、後期の箱式石棺が矢野原・藏田奥畠・駄小屋・川水流・後曾木及び板野の各地から発見されている。後曾木3号石棺からは、鉄斧・鉄鎌・直刀残欠等が出土しており、同3号石棺には、鉄斧・鎌先・鎌・刀子・鎌・短剣が副葬されていた。

古代の遺跡は不明である。

中世では、上中尾より明鏡と一緒に6枚の和鏡が発見されている。そのうち的一面は、「秦王鏡」と呼ばれるもので径9cm、縁厚0.75cm、重さ195gを計る。鏡背の図文や銘辞の写り方から、何回かの踏み返し鋳造による鏡を、さらに踏み返したものと思われる。四獸および銘文

は、そのほとんどが判読不能である。中世の宮崎は、まず伊東氏と土持氏が霸權を争い、大友氏、島津氏の支配のあと豊臣秀吉の九州仕置を迎える。北方においても同様な展開であったと思われる。

江戸時代は全期を通じて延岡藩領となり、内藤時代に、本炭生産や鉱山開発が盛んに行われ明治新政府へと引き継がれる。

〈参考文献〉

- (1) 鈴木重治「本邦における土器起源に関する問題—岩土原遺跡の調査を中心に—」『南九州大学園芸学部研究報告』(1963)
- (2) 鈴木重治『日本の古代遺跡 25 宮崎』(1985)
- (3) 橋 昌信「九州地方の細石器文化」『駿台史学』47 (1979)
- (4) 橋 昌信「日本の細石器文化の地域性」『駿台史学』60 (1984)
- (5) 延岡市教育委員会「赤木遺跡発掘調査概要報告」『延岡市文化財調査報告書Ⅲ』(1987)
- (6) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 (1986)
- (7) 角川書店『角川日本地名辞典』45 (1986)
- (8) 北方町編集委員会『北方町史』(1972)
- (9) 田中 茂『東臼杵郡北方村の古墳』北方村教育委員会 (1962)
- (10) 横山邦繼「石庵丁出土地名表(宮崎県)」『速見考古』第4号 九州先史研究会 (1973)
- (11) 沢 皇臣「東臼杵郡北方町出土の弥生式土器」『宮崎考古』第1号 宮崎考古学会 (1975)



Fig 1 笠下遺跡及び周辺地形図 ($S = 1 / 20,000$)

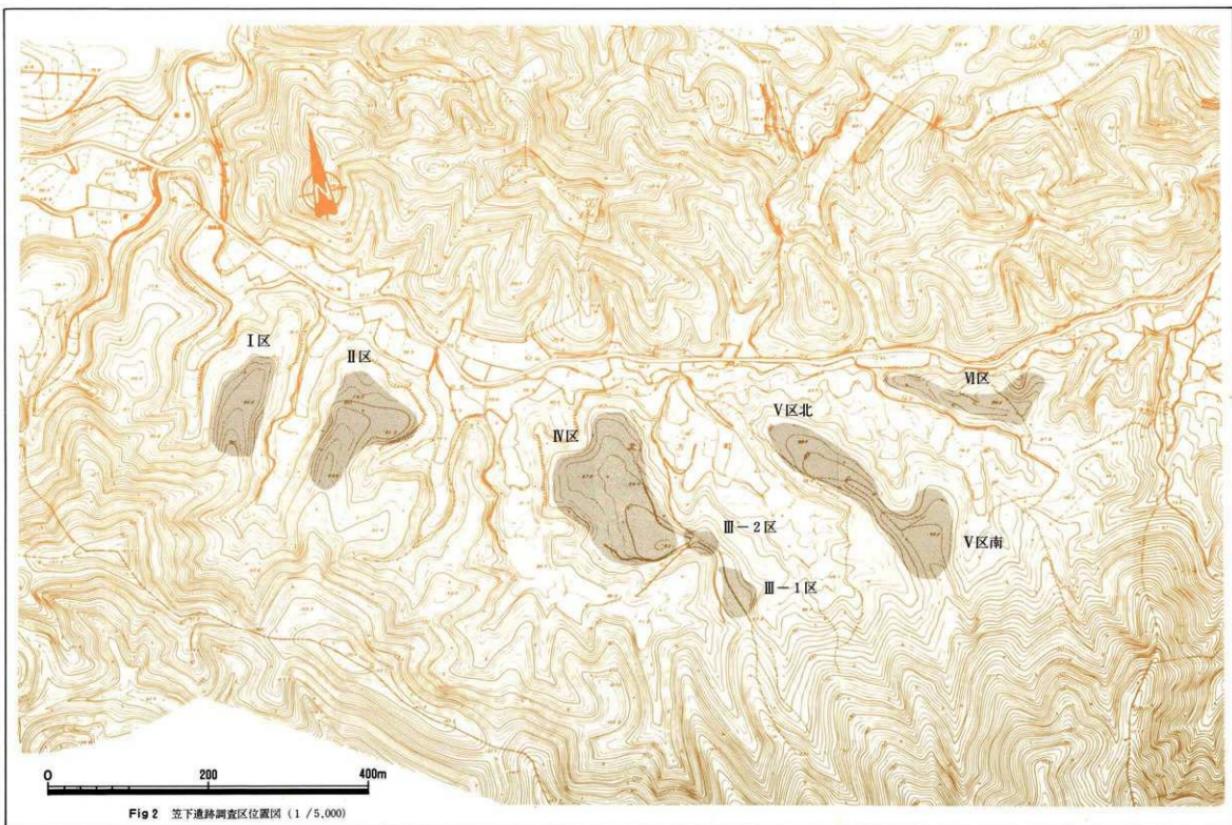
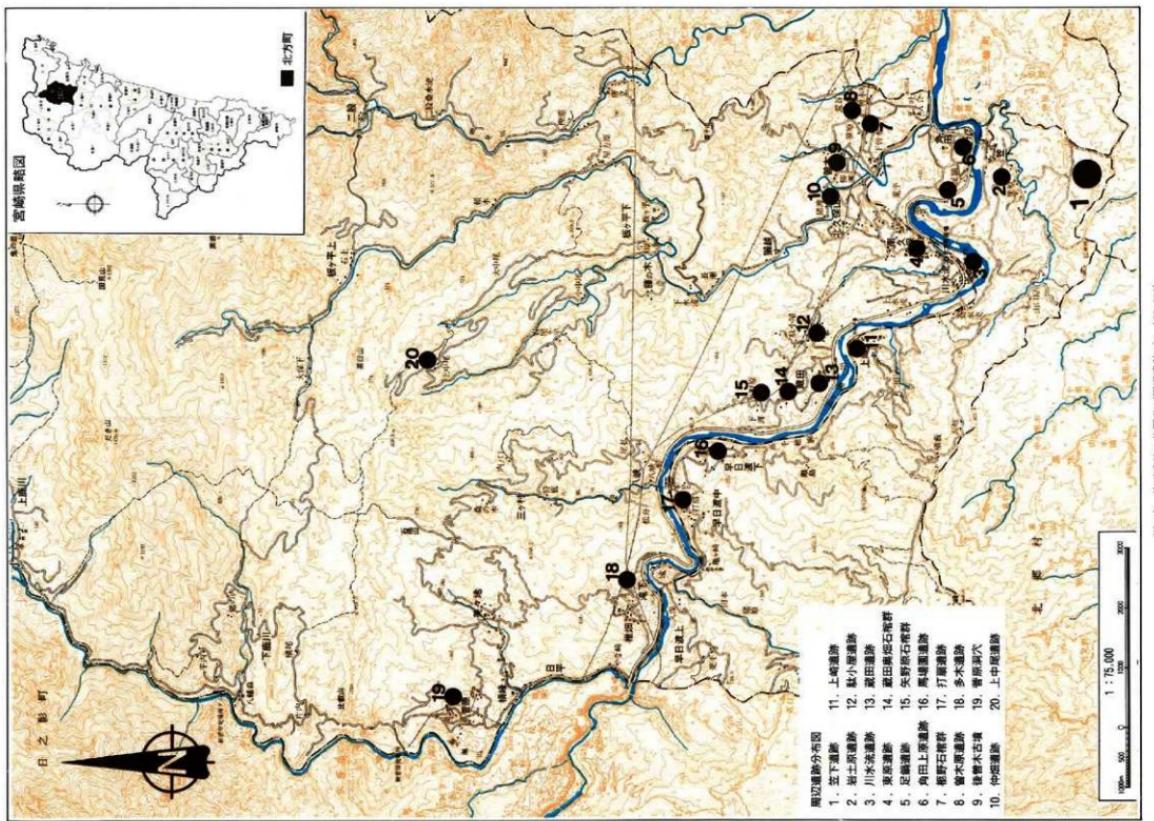


Fig 2 垂下道路调查区位置图 (1 / 5,000)



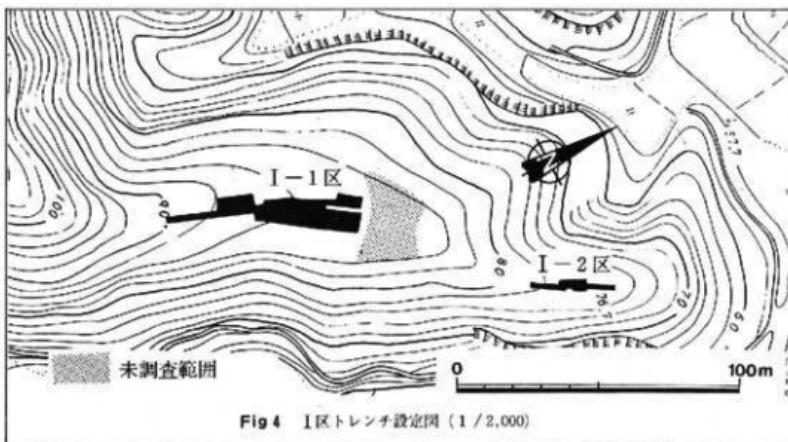
第三章 調査の内容

(1) I区の調査

1. 調査の概要

I区は笠下字塩田に所在する。調査区は、60~80m程度の幅の平坦面が南から北へ舌状にわずかに伸びる丘陵上に位置する。分布調査の際、数点の土器片が採集された。また文化層の試掘の結果、アカホヤ層の下に数点の焼石と土器片が確認された。平地が少ないため、尾根に沿ってアカホヤ層の下まで数本のトレンチを入れた。その際、壁面に数ヶ所の住居跡の落ち込みを確認したので、住居跡の周囲を拡張して調査を行った。I-2区では、表土の下にすぐ四万十帯の礫層が出たため調査を行わなかった。No.9杭からI-2区の間は現地形の変更がないため調査を行わなかった。(Fig 4)

検出遺構は縄文早期の集石5基および弥生時代後期~古墳時代初頭の竪穴住居跡6軒である。遺物は主に縄文早期の押形文土器、石鏃、敲石、磨石、礫器等が出土した。また、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代晚期後半の深鉢等が住居跡内より出土した。



2. 層序

I区の層序は、4ヶ所とも基本的に相違は認められない。

I層(表上層)：黒色を呈する腐蝕土と火山灰で形成された表土層であり、約10cm程度堆積している。I層内には、若干の縄文遺物を包含するが、他区の状況からみて、弥生時代以降の堆積層と推察される。

II層：色調は赤みのある茶褐色を呈する。10～20cm。

IIIa層：明茶褐色土層。II層とアカホヤの混じった層である。場所によっては堆積が認められない。5～10cm。

IIIb層：明褐色土層(アカホヤ層)。10～20cm。II層より住居跡が掘り込まれる。

IV層：暗茶褐色土層。約10cm。縄文時代早期の遺物・焼け石などが出土している。

V層：層暗褐色土層。約10cm。旧石器時代の包含層と思われるが、文化層として把握できなかった。粘質を帯びる。

VI層：砂礫混じりの粘質の黄茶褐色土。20～40cm。

VII層：砂礫混じりの粘質の黄褐色土。約20cm。

VIII層：黒褐色土層。3～5cmのブロック状。

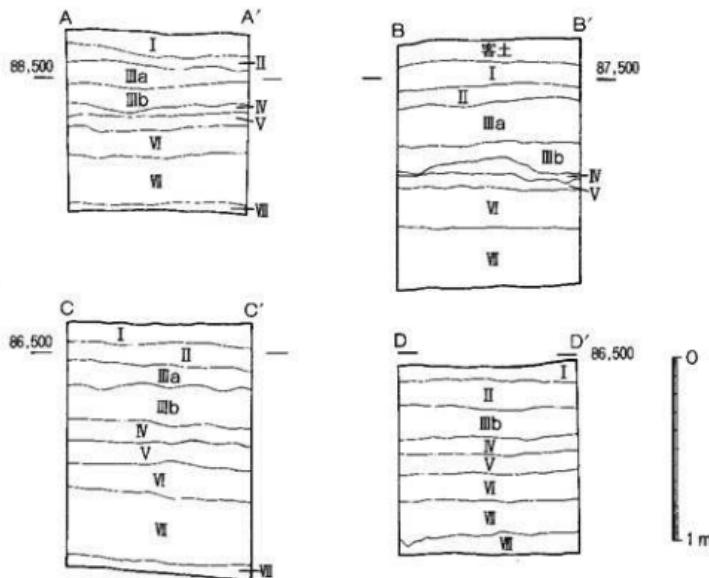


Fig 5 T区土層図 (1 / 30)

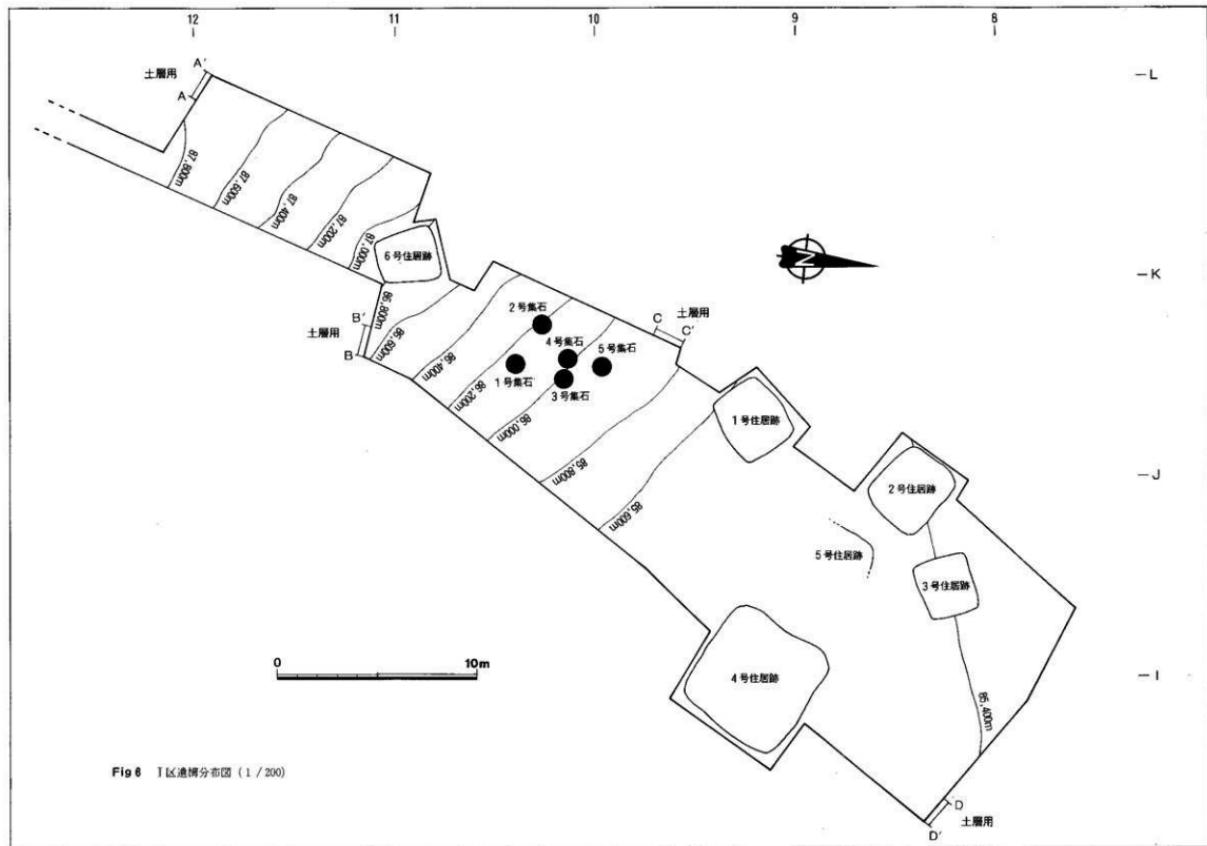


Fig. 6 T区遺構分布図 (1 / 200)

3. 遺構と遺物

a. 旧石器時代

I区では旧石器時代の遺構は検出できなかった。

I区で出土した旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器1点および石核1点(Fig. 7)である。1は分厚い横長の剥片の二側縁をプランティング加工によってバチ状に造り出したナイフ形石器である。刃部は切り出し状を呈する。全長5cm、最大厚1cm、刃部長3cmを計る。流紋岩製。

2の石核は、7～8回の打撃によつて打面を作成し、そこから桶状に剥片を剥ぎとっている。一部自然面が残る。流紋岩製。

ナイフ形石器は、形態が宮崎市堂地西遺跡出土の遺物に酷似している。ほぼ同じ時期(A.T堆積以後)の所産と考えられる。石核も同様であろう。

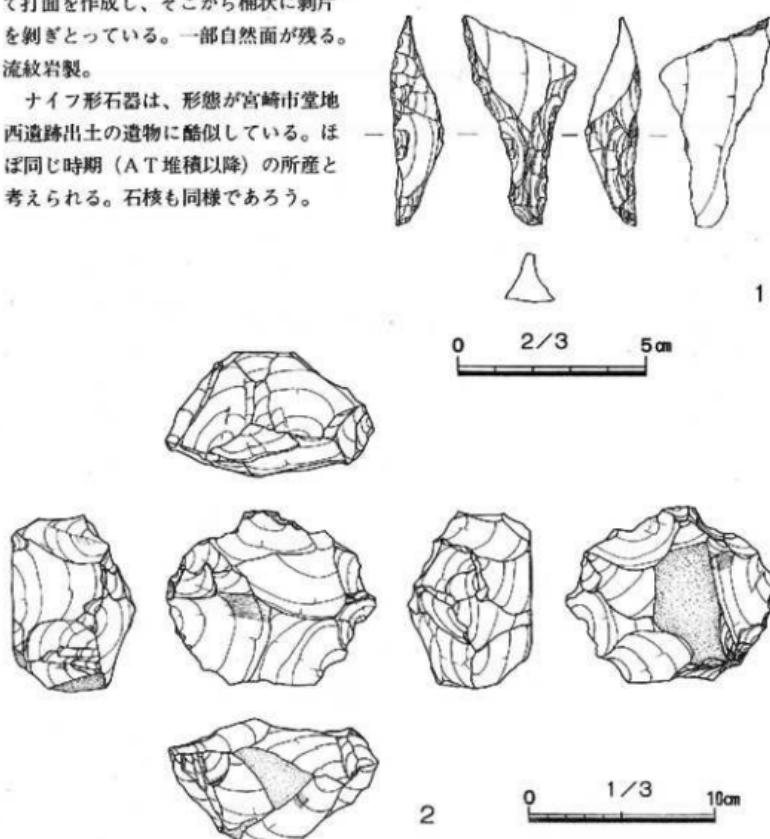


Fig. 7 I区出土石器実測図① (1/3・2/3)

b. 縄文時代

集石遺構

I区では、アカホヤ層下より集石遺構を5基検出した。5基ともまとまっているが、3号と4号は近接している。いずれも拳大の角礫を配す。礫は火を受けて赤く変色し、脆弱化している。5基とも掘り込みをもつ。2号は敷石を有する。また、1号は掘り込み面上場の径が1.5mを超える大形の集石遺構である。全てIV層内に位置し、掘り込み面の下部はV層となる。出土遺物は無いが、他区の状況からみて、早期の集石遺構と判断される。

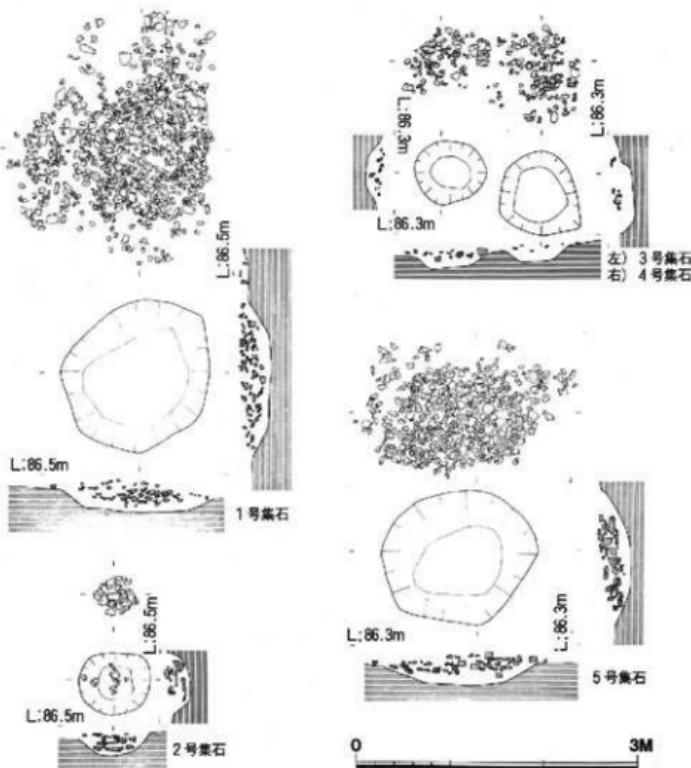


Fig 8 集石遺構実測図 (1 / 60)

出土石器

I区で出土した石器は、石鎌・スクレイパー・使用痕のある剝片・二次加工を有する剝片・礫器・敲石および磨石である。(Fig 9~11)

3・4はチャート製の小型の石鎌である。抉りが深く鍔形鎌の範囲に入る。5は比較的大型の石鎌で二刃が鋸歯状を呈し、断面は薄いレンズ状で抉りはそう深くない。6はチャート製のスクレイパーである。横長の剝片の周囲を細かく加工して丸く仕上げている。全長1.8cm、全幅1.6cm、最大厚0.2cmを計る。7は自然を残す薄い剝片の周囲を荒く加工した石器である。梢円形を呈する。全長5cm、全幅6.5cm、最大厚0.8cmを計る。石材は結晶片岩と思われる。8は打面に自然を有する不定形の剝片である。使用痕を有する。全長4.6cm、全幅6.4cm、最大厚0.8cmを計る。凝灰岩と思われる。9は交互剥離によって剝片を取った石核でチョッパー状を呈する。両面に自然面を残す。全長7.5cm、全幅9.5cm、最大厚3.3cmを計る。流紋岩製。

10は敲石である。側部の全面にわたって敲打痕が見られる。打撃の際の貝殻状裂痕が両面に残る。径4.2~4.5cm、最大厚2.8cm、重量80gを計る。11・12は磨石である。使用等で欠損し、それぞれ主・次を残す。最大厚それぞれ4・4.5cm、現重量120g・300gを計る。両方とも砂岩製。13は敲石である。西洋梨型で両端に敲打痕が残る。打撃の際の貝殻状裂痕が広い方の端部両面に残る。片面に磨面を有す。全長10cm、全幅9.5cm、最大厚5.5cm、重量720gを計る。砂岩製。14は両面を磨石として利用し、側辺の一部を敲打器として利用した石器である。全長10cm、全幅8.8cm、最大厚4.4cm、重量440gを計る。砂岩製。15は13と同じタイプの石斧である。両端に細かい敲打痕が、片面に磨面が残る。全長10.8cm、全幅9.8cm、最大厚5.6cm、重量770gを計る。砂岩製。16は両面を磨石として利用し、端部と側辺を敲石として利用した石器である。反対側の端部と側辺の破損部は加工か使用時のものかは不明。端部に敲打の際の貝殻状裂痕が残る。現全長10.5cm、現全幅9cm、重量690gを計る。

17~19は砂岩製の礫器である。17は断面が台形を呈する剝片を利用し、周囲を荒く加工して造り出している。一端に自然面が残る。全長11.3cm、全幅10.2cm、最大厚2.8cm、重量430gを計る。18と19は石核より得られた最初の自然面の残る剝片を自然面側より全周を荒く加工して造り出している。18は全長13.8cm、全幅10.7cm、最大厚2.7cm、重量480gを計る。19は全長15.6cm、全幅10.2cm、最大厚2.5cm、重量430gを計る。

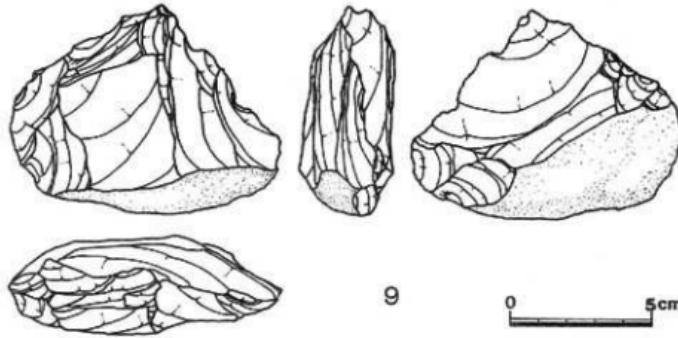
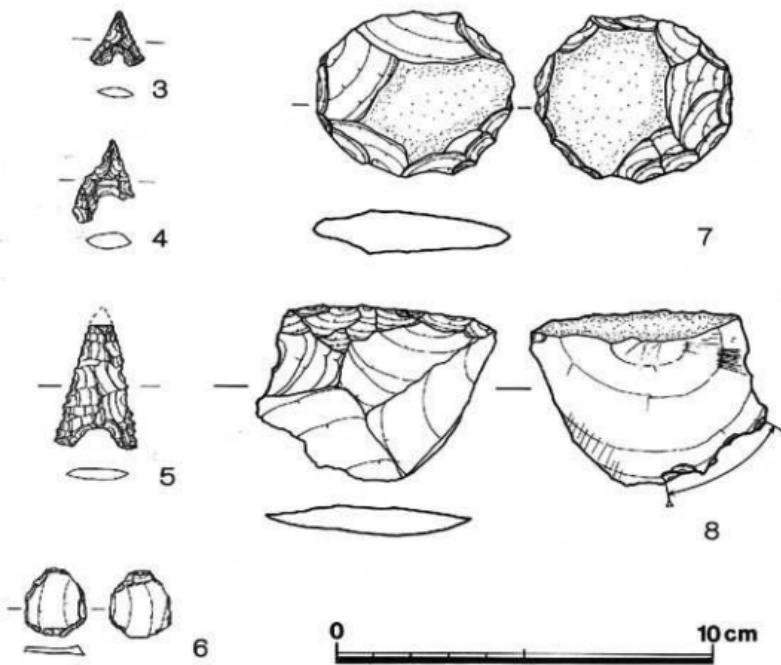


Fig 9 I区出土石器実測図② (3~8は2/3・9は1/2)

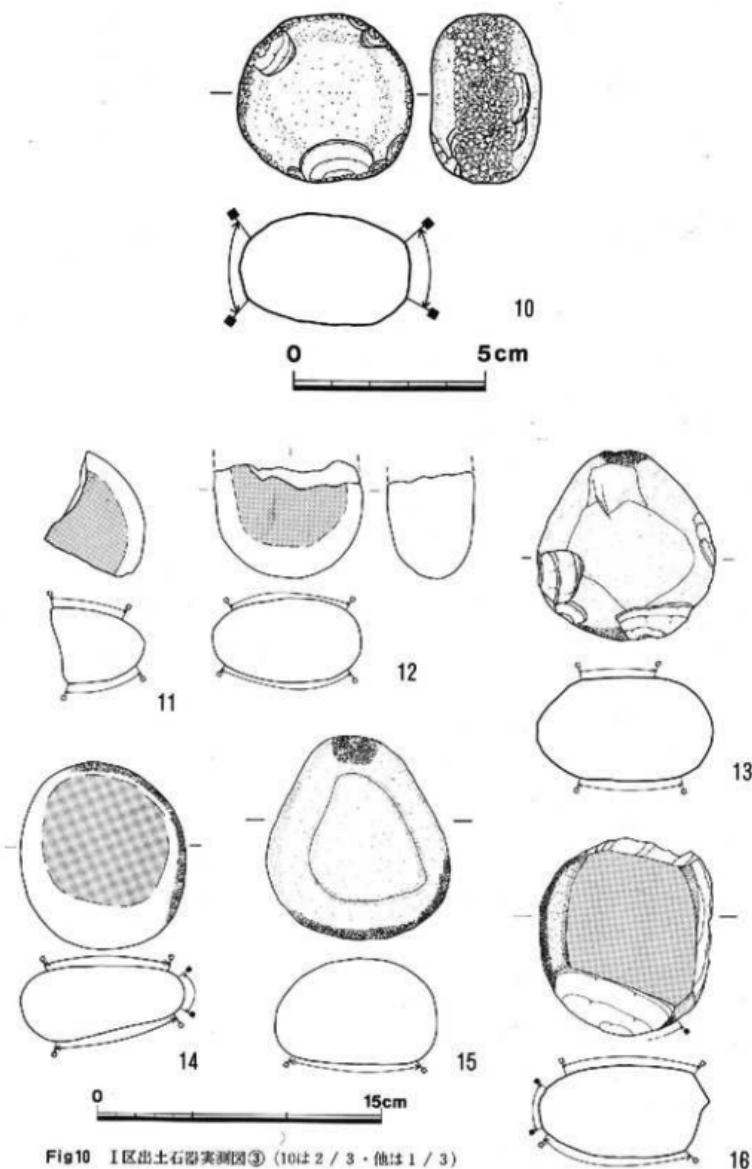
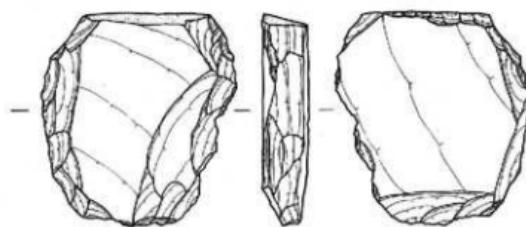
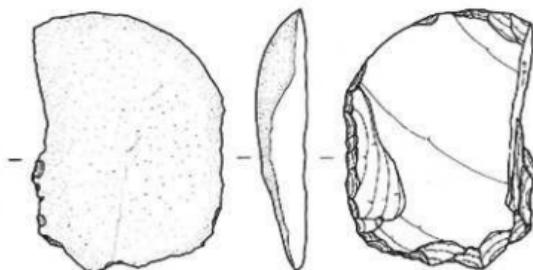


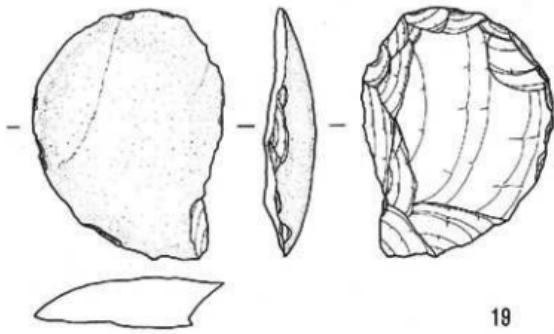
Fig10 I区出土石器実測図③ (10は2/3・他は1/3)



17



18



19



Fig11 I区出土石器实测图④ (1 / 3)

縄文土器

I区では主に、アカホヤ層下より押型文土器（山形・梢円）が出土した。

山型押型文は文様を横方向の施すタイプ（25~25）と縦方向に施すタイプ（26~27）がある。20・21は口縁が直行し内面口唇部に原体条痕を施す。21は内面に1条原体を横に転がす。

梢円押型文では表の施文の方向は一定でなく40や43のように2方向認められるものがある。30のような横方向の施文は少なく、大部分が縦あるいは斜方向である。口縁部は直行するもの（29・30？）と、小さく外反するもの（28・31・32）、そしてゆるやかに外反するもの（33

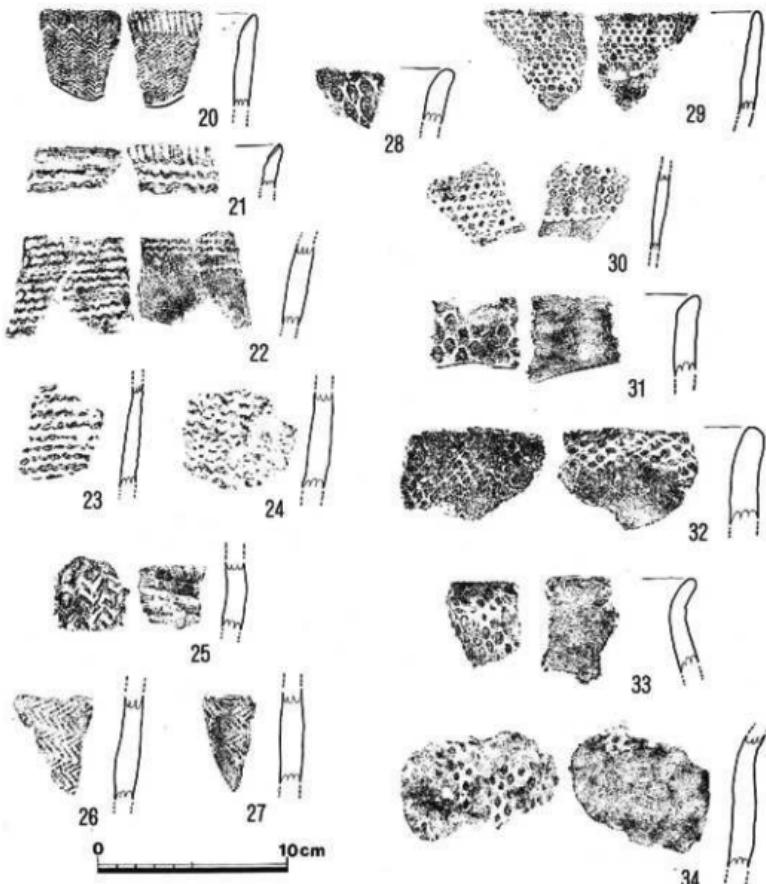


Fig12 I区出土縄文土器実測図① (1 / 3)

～35) の 3 タイプがある。口縁内部の施文方法は原体を横方向に転がすもの (30・32) と竹串状のもので斜方向に沈線を施すもの (35)、そして無文のもの (28・31・33) がある。原体も、穀粒の小さいもの (29・33) や細長いもの (41・43) など様々である。

その他、撫系文土器 (45) と吉田・前平系土器 (46) がわずかであるが出土した。

また、押型文土器の中でも色調・胎土の状況や土器の厚さ等が貝殻文円筒土器に似ているもの (32) もあり興味深い。

35は推定口径35cmである。

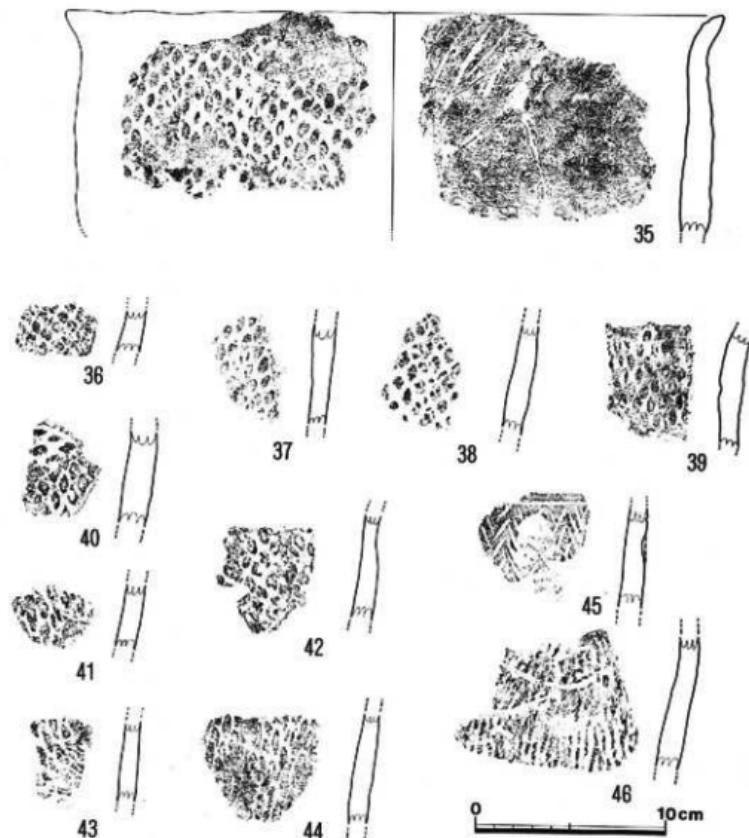


Fig 13 I区出土繩文土器実測図② (1 / 3)

C. 弥生・古墳時代

弥生時代～古墳時代の遺構として、竪穴住居跡を6基検出した。そのうち6号住居跡は集中部から離れている。切り合いはなく、単独で検出した。遺物としては、4号が圧倒的に量が多く、種類も豊富である。

1号住居跡 (Fig14)

やや長方形に近いプランを呈し長辺3.9m、短辺3.2m、深さ0.75mを測る。床面はほぼフラットで浅い柱穴を4本、中央部に炉址を1基検出した。炉址はほぼ円形の浅い皿状で、径0.45mを測る。中に炭と焼土が認められた。

出土遺物には、壺・椀・高杯がある。(Fig15) 1-01～1-04は壺である。1-01と1-02は口縁がほぼ直立し、内外面ともハケ目調整が見られる。1-03は刷がかなり張る壺の頸部から胴部にかけての破片である。ちょうど粘土帶の一単位分と思われる。1-04は口縁がやや内湾し、内面にハケ目が見られる。外面に粘土紐縫目が見られる。1-05は高杯脚部である。やや内湾する。内外ともハケ目が見られる。1-06は楕円形土器である。調整は不明。1-07～1-11は壺底部である。1-07は外面にタタキが残る。内面は剝落がひどく調整は不明。1-08はかなり厚手で丸底状を呈する。内側に調整の際の板止痕が残る。外側底部に指圧痕が残る。1-09は底部が浅くラッパ状に胴部に向かって開く。外側はタテ方向のハケ目、底部にはタタキが残る。内側は1-08と同様な板止痕(ヘラ工具による調整の際の圧痕)がある。外面一部に縫目が残る。1-10は若干平底状を呈する。内側を入念に研磨している。1-11は1-09と同様な底部である。

2号住居跡 (Fig16)

2号住居跡は1号住居跡北約5mの所に位置する。ほぼ正方形に近いプランを呈し、長辺3.7m、短辺3.5m、深さ0.46mを測る。床面はほぼフラットで深さ10～20cmの柱穴を4本、真中よりやや東側に炉址を1基検出した。振り込みの土は熱変によりブロック化している。また、4本の柱穴に囲まれる個所は固く踏みしめられており床と思われる。(Fig16アミ部)

出土遺物には、砥石・椀・壺・甕・ミニチュア土器がある。(Fig17) 2-01は砂岩製の砥石である。全長18.7cm、全幅7.6cm、最大厚2.6cmを測り、三方に使用痕が認められる。2-02は口縁が外反し、胴部がやや扁球形をなし、下部がふくれる鉢である。調整は、外面はヘラ麻き、口縁部内外面とともにヨコハケ、内面はナデを施し、一部ハケ目が残る。口径17cm、器高11.8cmを計る。2-03は口縁がやや内湾ぎみに聞く壺破片である。内外面ともにヨコハケを施す。2-04は頸部から口縁が直行し、端部は平坦で一部を若干外側へつまみ出す壺破片である。端部に近い部分は横方向のナデ、半分から頸部にかけて斜方向のハケ目が残る。2-05はゆるやかに口縁が外反する壺破片である。調整は内外面ともにヨコナデである。2-06は高杯の口縁部である。稜はにぶく、外側へゆるやかに広がる。内外面ともにハケ目が残る。2-07はミニチュアの手づくね土器である。口径3.8cm、器高2cmを測る。内外面とも指ナデを施す。2-08は壺口縁である。頸部のくびれはシャープでない。内側に稜がつく。口縁はやや内湾ぎみに聞く。端部をつまみ出すが、2-04に比べ丸みをおびる。内外

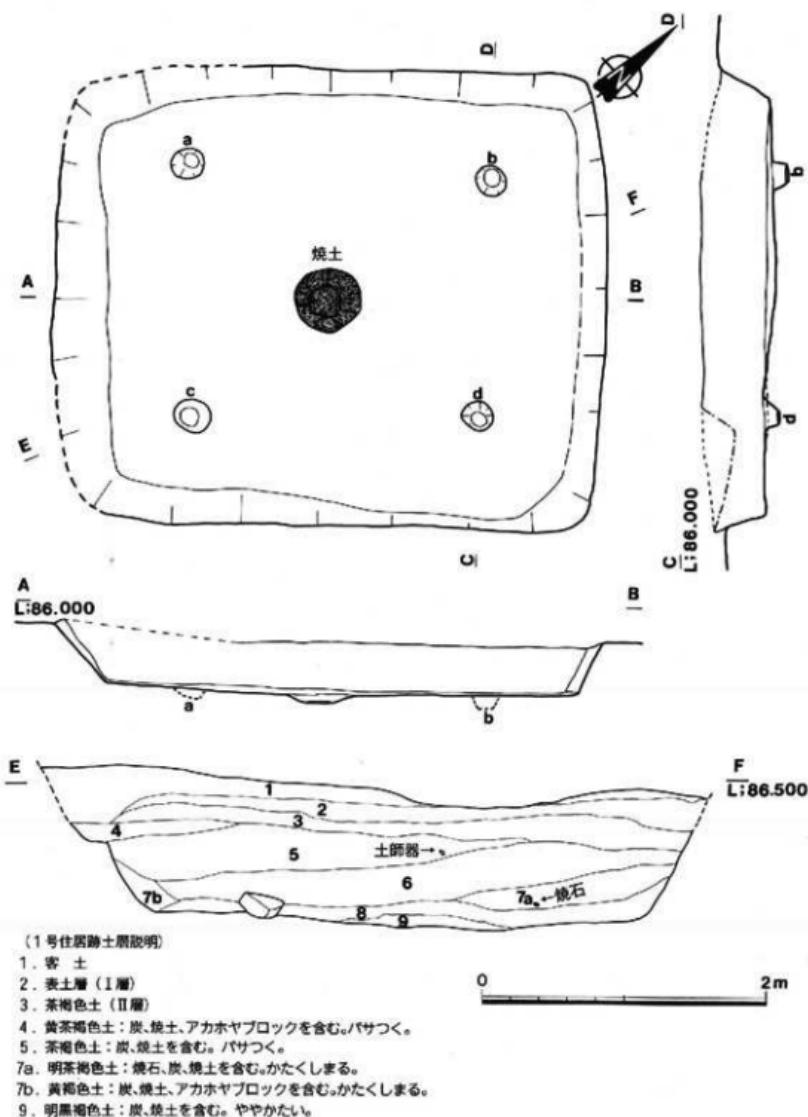


Fig14 1区1号住居跡実測図 (1 / 40)

面ともハケ目のあとナデを行なう。2-09は甕口縁である。口縁部はゆるやかに外反し、頸部にしまりがない。体部は上半部が聞くものと思われる。内外面ともナデで頸部のくびれ部のみヘラ磨きを施す。2-10と2-11は壺底部である。2-10はやや尖底ぎみの丸底で、内面に指圧痕が見られる。調整は外面はヘラ磨き、内面はナデである。2-11は底部がややこぶ状の丸底を呈する壺底部である。形態的には1-09・1-11に似るものと思われる。外面はヘラ磨き、内面は調整不明、板止痕が残る。

3号住居跡 (Fig18)

2号住居跡の東側約3mの所に位置する。方形に近いプランを呈し、一辺は約3mを測る。

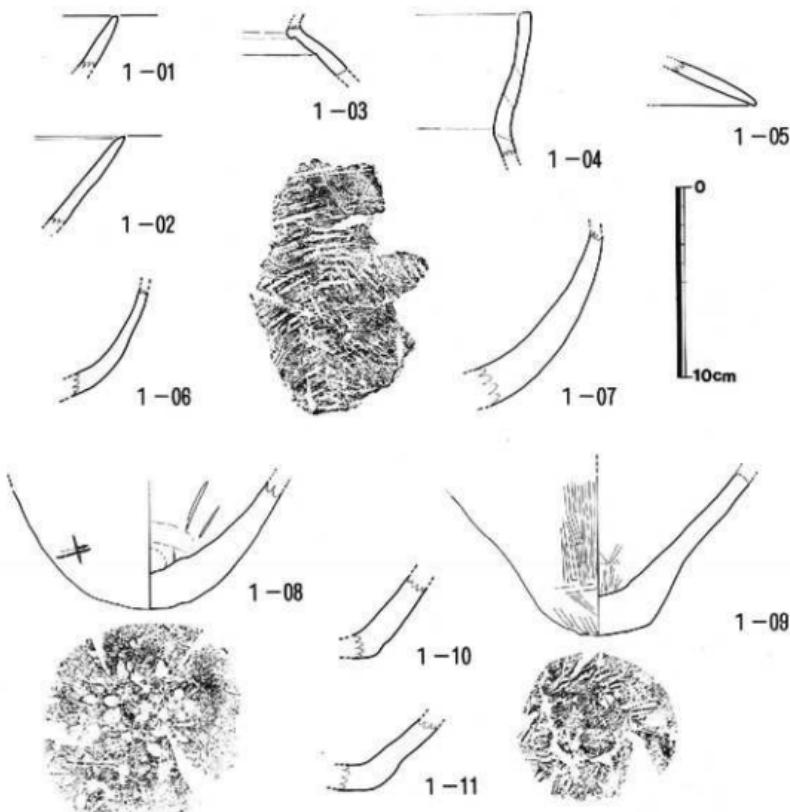


Fig15 I区1号住居跡出土遺物実測図 (1 / 3)

東壁中央付近に $0.7 \times 0.3\text{m}$ 程の不定形な土壙を有する。床面からの深さは約 0.22m を測る。柱穴は4本で深さは 0.2m 前後である。住居跡中央部に浅いが址を一基検出した。中に焼土・炭がつまる。また、炉周囲の床がかたくしまるが、熱によるものではなく、固めたものと思われる。

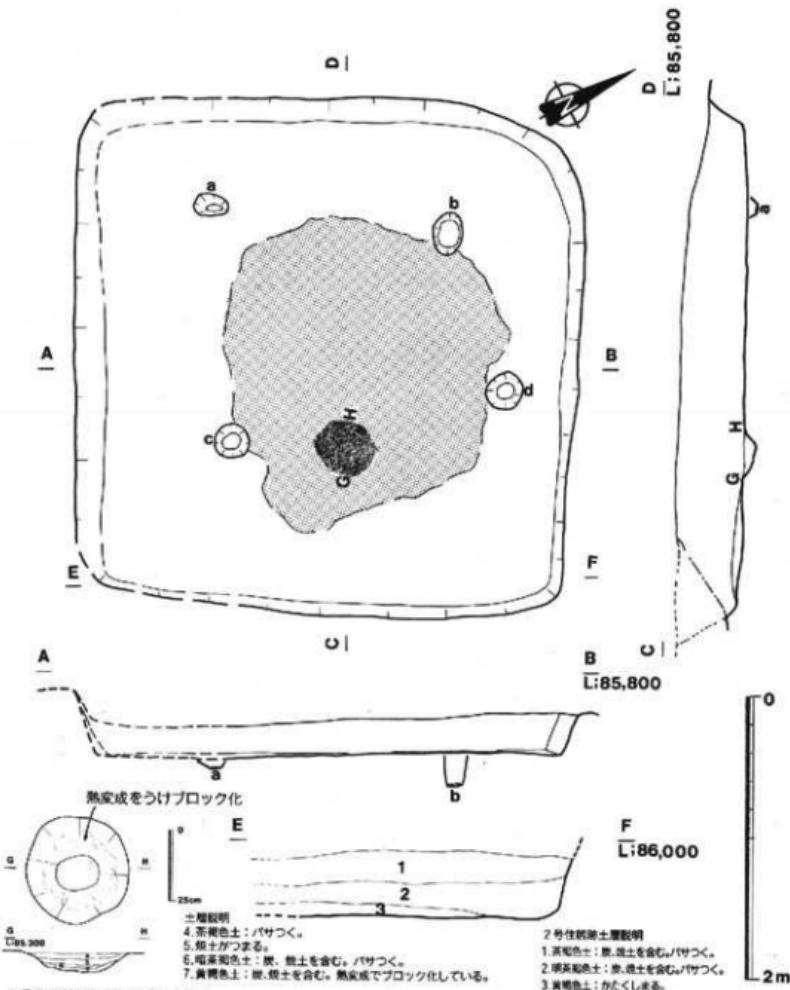


Fig16 1区 2号住居跡実測図 (1 / 40)

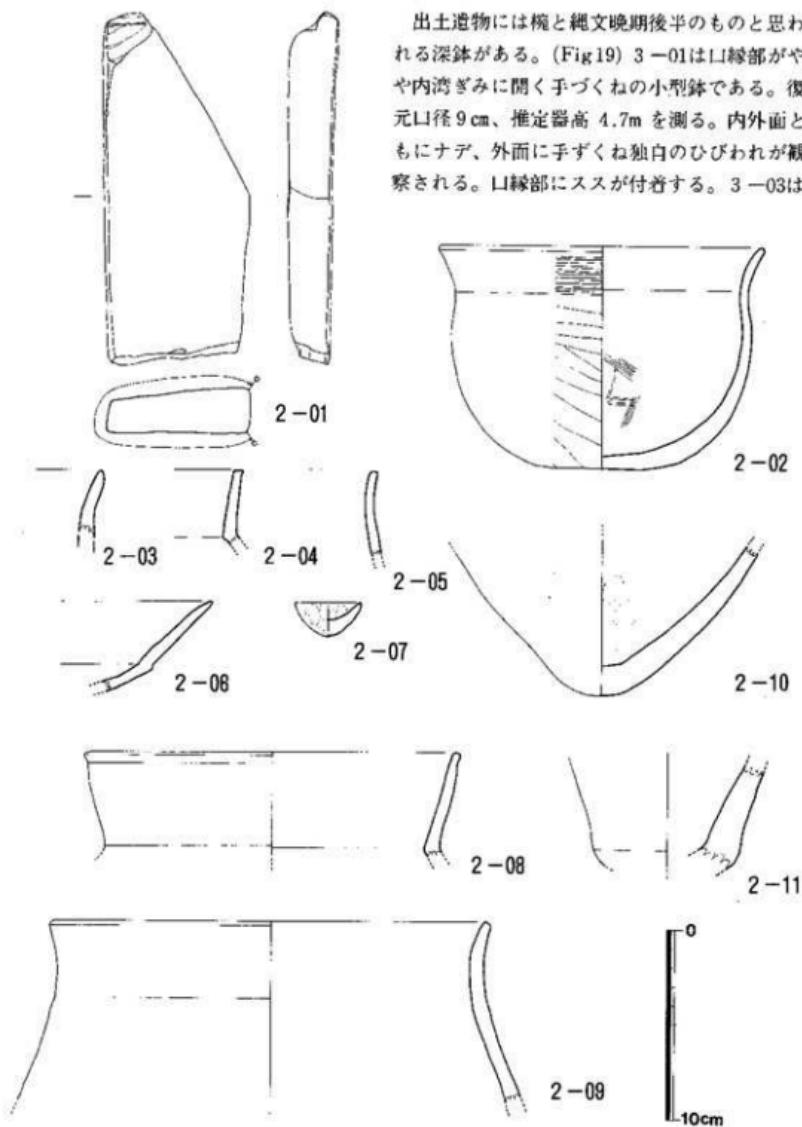


Fig17 2号住居跡出土遺物実測図 (1 / 3)

口縁がやや外傾し、胸部は斜め下方に丸くなる深鉢である。調整は、ヘラ状工具による横あるいは斜方向（外面胸部は縱方向）の磨きで、口縁部付近は内外面ともにナデが見られる。

4号住居跡 (Fig 20・21)

4号住居跡は2号住居跡のほぼ正面、7m程離れた所で検出された。長方形に近いプランを呈し、長辺 6.2m、短辺 5.7m、深さ 0.75m を計る大型住居である。床面はほぼフラットで、主柱穴は4本である。遺物は全層からまんべんなく出土し、床面に近いものは細片が多い。

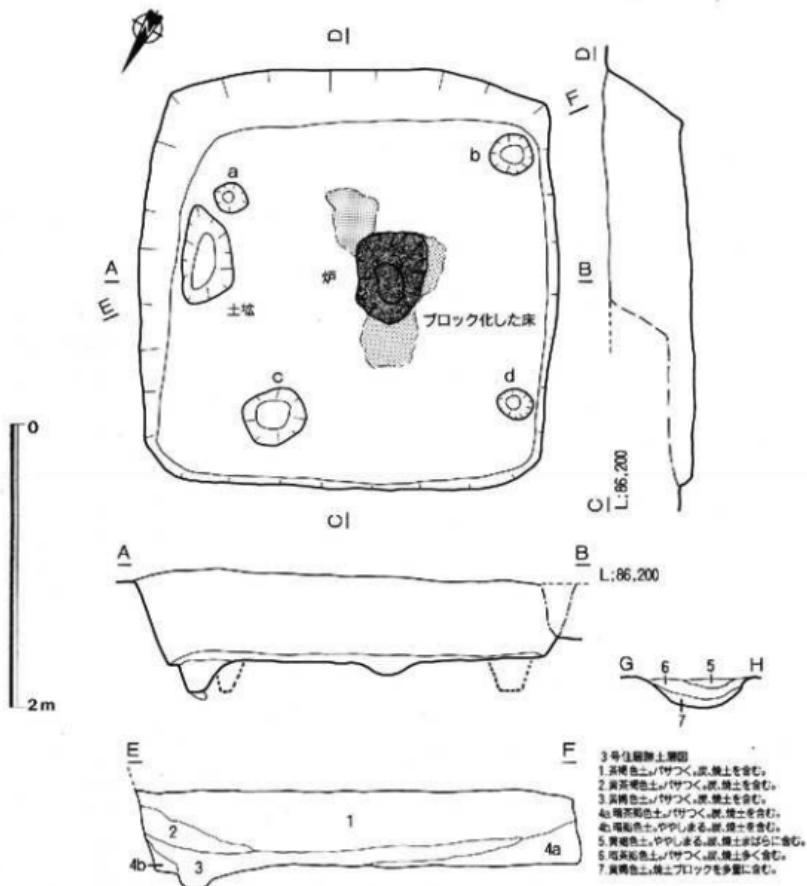


Fig 18 I区 3号住居跡実測図 (1 / 40)

- 3号住居跡上断面
- 1.赤褐色土／サツく、灰、焼土を含む。
 - 2.黄茶褐色土／サツく、灰、焼土を含む。
 - 3.黄褐色土／サツく、灰、焼土を含む。
 - 4.暗茶褐色土／サツく、灰、焼土を含む。
 - 5.褐褐色土／サツく、灰、焼土を含む。
 - 6.黄褐色土／サツく、灰、焼土多く含む。
 - 7.黄褐色土、焼土ブロックを多量に含む。

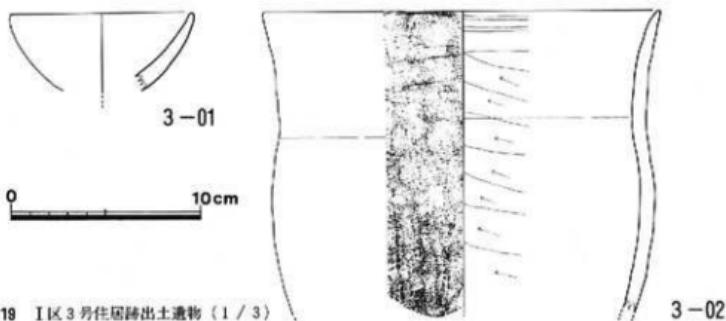


Fig. 19 I区 3号住居跡出土遺物 (1 / 3)

い。主柱穴は4本で他の住居跡と異なり、中央に寄っている。深さは20~40cm程である。ベット状造構、土塙等の施設は検出されなかった。

出土遺物には、刀子・壺・甕・高杯・ミニチュア土器等がある。(Fig. 22~24) 4-01の甕は口縁が外反し胴が張るもので、ナデを中心とし、ハケ目は粗い。4-02・4-03は口縁が外上方に開き、体部が丸くなり、口径が体部最大径をしのぐ壺である。4-02は内外面ともにハケ目を施すが、4-03は体部外面を磨く。4-04と4-05は、体部から口縁にかけてゆるやかに移行し、口縁部が直行する甕である。口縁端部は平たく、調整は体部外面は磨き、口縁は内外面ともナデ、体部と口縁の一部内面はハケ目である。4-07と4-08は高杯である。どちらも脚部のみの出土である。4-08はハケとヘラ磨きで丁寧に仕上げている。胎土も焼成も4-07に比べ良好である。4-09は手づくりのミニチュア土器で、つまみ出しにより口縁を作る。内面はナデ、外面は磨きによる調整を施す。4-10は壺口縁である。体部最大径と口縁径がほぼ同じ、口縁は外上方に真っすぐ伸びる。口縁尖端部を指圧により成形している。調整は内面及び口縁部がナデ、頸部及び体部は磨きである。4-12~14は底部である。4-12は甕の底部でもろく内側にススが多量に付着している。タタキ痕が残る。4

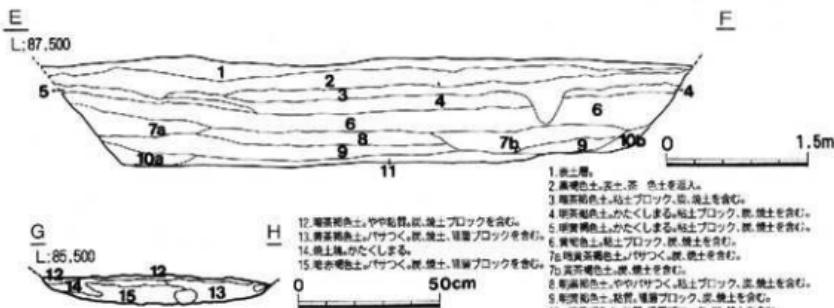


Fig. 20 I区 4号住居跡土層実測図 (1 / 20 · 1 / 60)

- 1. 黒褐色土、茶、色土を含む。
- 2. 黒褐色土、茶土、色土を含む。
- 3. 黑褐色土、粘土ブロック、泥、土上を含む。
- 4. 明灰褐色土、かたくしまる粘土ブロック、泥、地土を含む。
- 5. 明灰褐色土、かたくしまる粘土ブロック、泥、地土を含む。
- 6. 黄褐色土、粘土ブロック、泥、地土を含む。
- 7. 黄褐色土、粘土ブロック、泥、地土を含む。
- 8. 黄褐色土、粘土ブロック、泥、地土を含む。
- 9. 明灰褐色土、粘土、泥、地土を含む。
- 10a. 明灰褐色土、粘土、泥、地土を含む。
- 10b. 黄褐色土、粘土、泥、地土を含む。
- 11. 黑褐色土、かたくしまる粘土、泥、地土を含む。

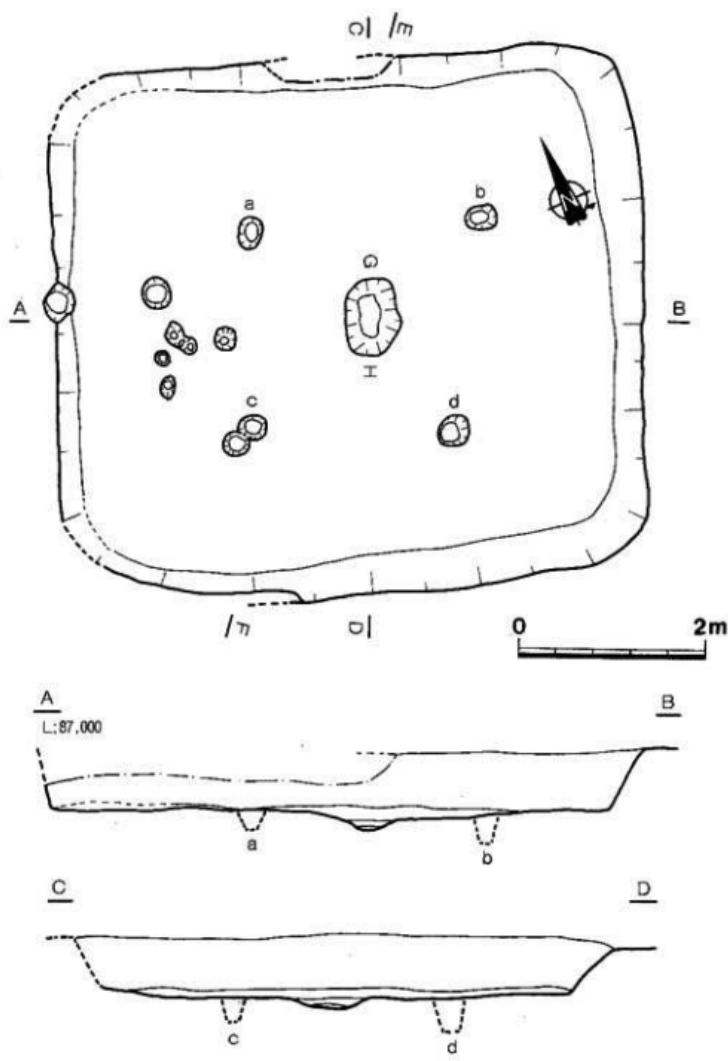


Fig21 I区4号井尾路实测图 (1 / 60)

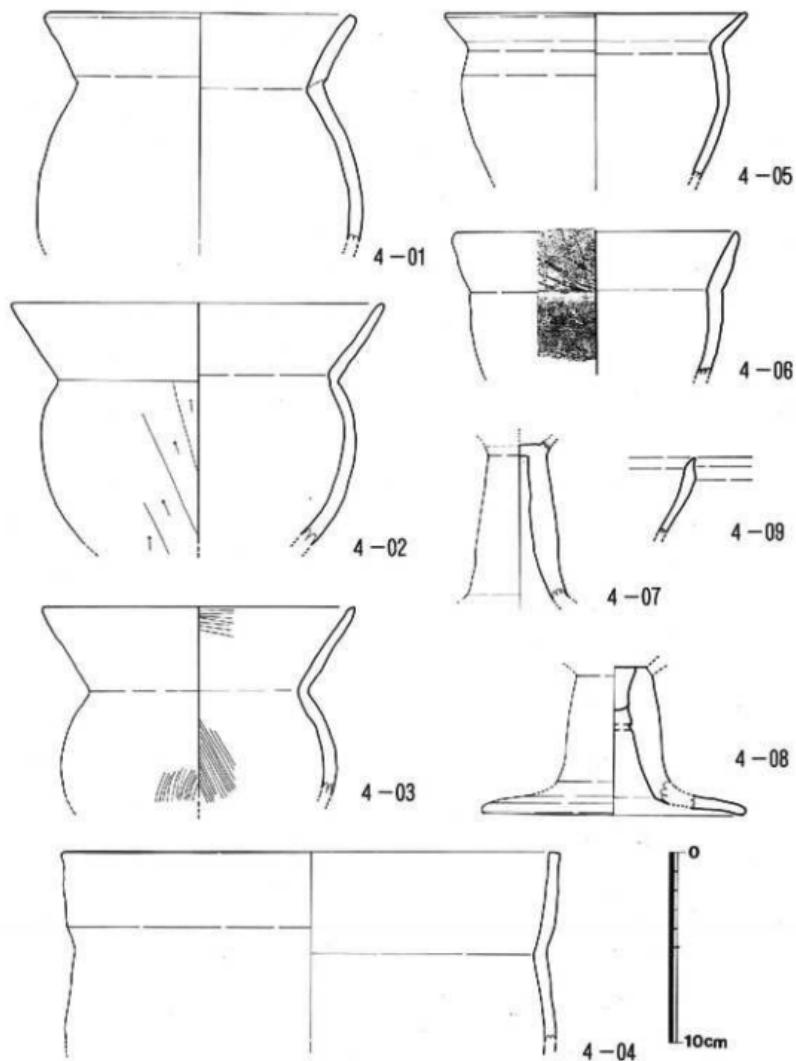


Fig22 I区4号住居跡出土遺物① (1 / 3)

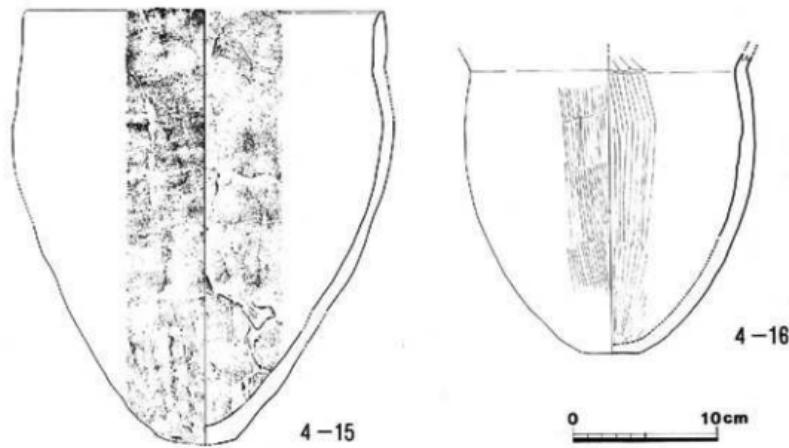
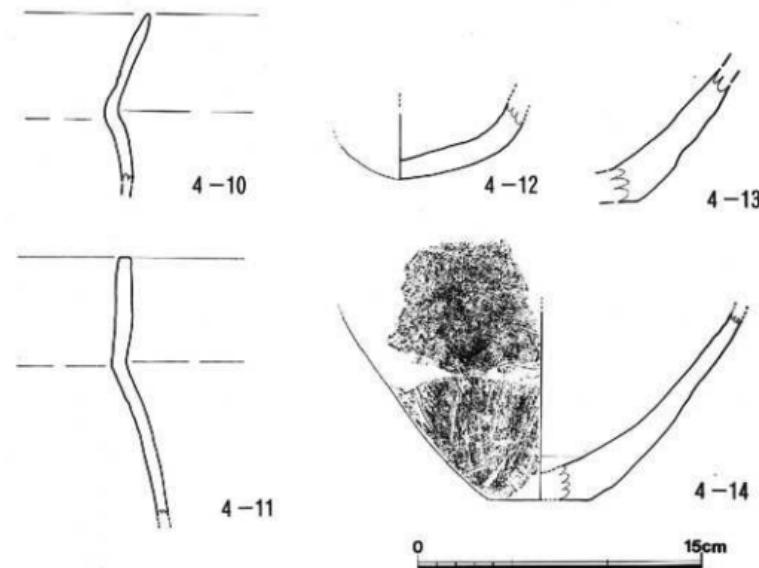


Fig23 IV区4号住居跡出土遺物実測図② (1 / 3・1 / 4)

—13はやや平底状を呈する壺底部である。内外面ともに磨きを施す。4—14はやや不安定な平底状を呈する壺底部である。内側はハケ目、外側は磨きで一部タタキが残る。4—15は口縁部がほぼ直立し、胴のあまり張らないやや丸底状を呈する甕で、調整は口縁部付近がハケ目、体部は縱方向の磨きが基本で、一部横方向のものもある。4—15は口縁部がやや外反し、胴部のあまり張らない壺である。調整は内外面ともにハケ目を施す。不安定な平底状を呈する。4—17は刀子先端である。東壁際に浮いた状態で見つかった。残存長 5.5cm、残存幅 0.9cm、最大厚 0.3cm を測る。

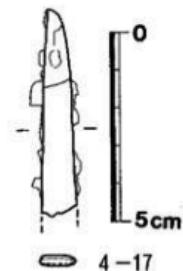


Fig. 24 I区 4号住居跡
出土鉄器実測図 (2 / 3)

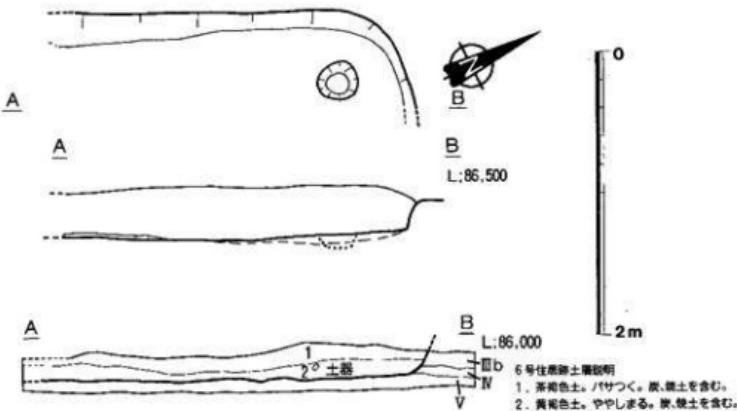


Fig. 25 I区 5号住居跡実測図 (1 / 10)

5号住居跡 (Fig. 25)

5号住居跡は2号住居跡と5号住居跡の間に位置する。コーナーのみの検出で、規模等は不明である。床面はフラットで、壁に近い所で浅いピットを一つ検出した。出土遺物は土師器細片の数点のみであった。

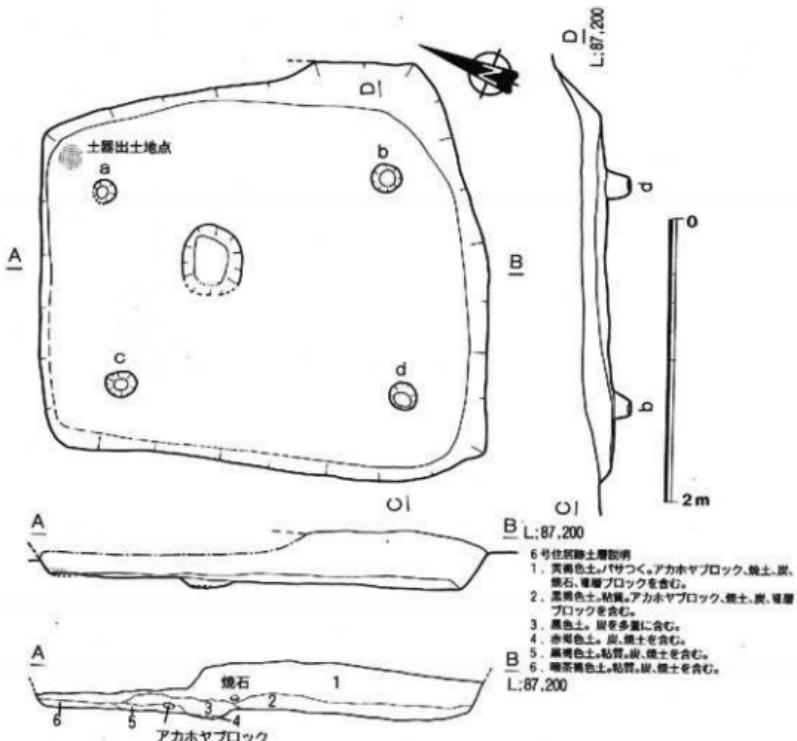
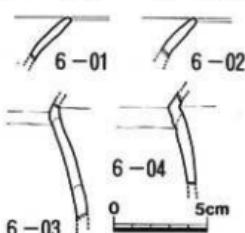


Fig26 I区 6号住居跡実測図 (1 / 40)

6号住居跡 (Fig26)

6号住居跡は住居跡の集中する場所からかなり離れ、1号住居跡の南約15mの所に位置する。長方形に近いプランを呈し、長辺3.2m、短辺3m、深さ0.3mを測る。炉は中央よりやや北側で検出した。床面はほぼフラットで主柱穴は4本、やや壁際に寄る。深さは10cm～15cm程度である。

出土遺物は、北側隅で土師器が若干まとまって出土した程度である。6-01・6-02は壺口縁である。やや外反し、内外面ともにハケ目が残る。6-03・6-04は頸部から胸部にかけての壺で体部は張らない。調整は内外面ともにハケ目である。

Fig27 I区 6号住居跡出土土器実測図
(1 / 3)

I区遠景
(北より)



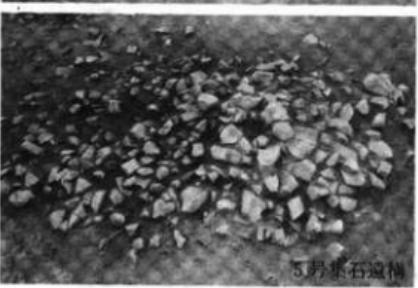
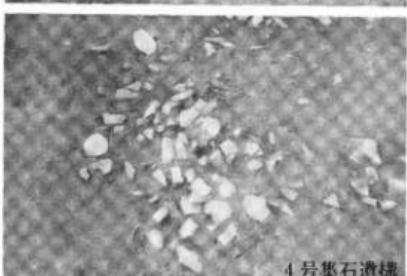
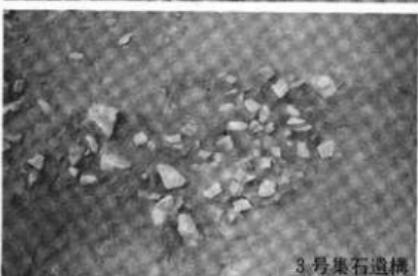
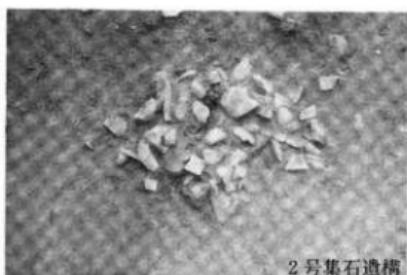
I区近景
(南より)



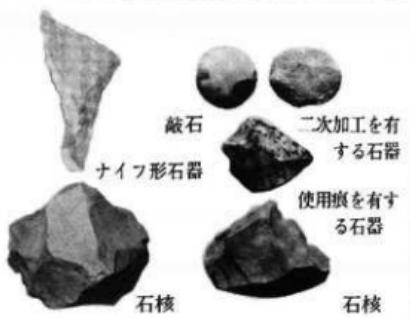
I区近景
(北より)



PL5

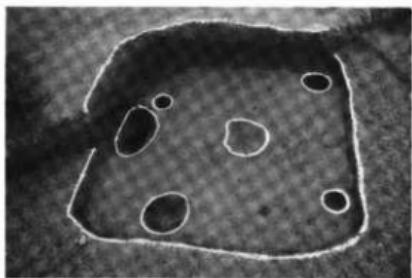
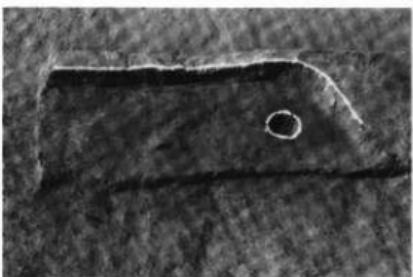
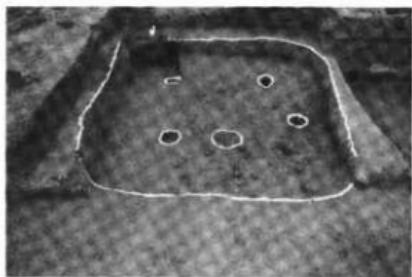
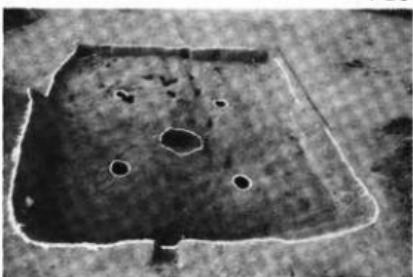
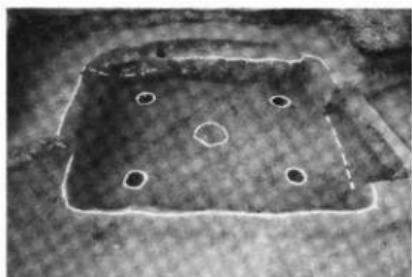


磨石・敲石



研器

PL 6



1号住居跡(東より)

2号住居跡(東より)

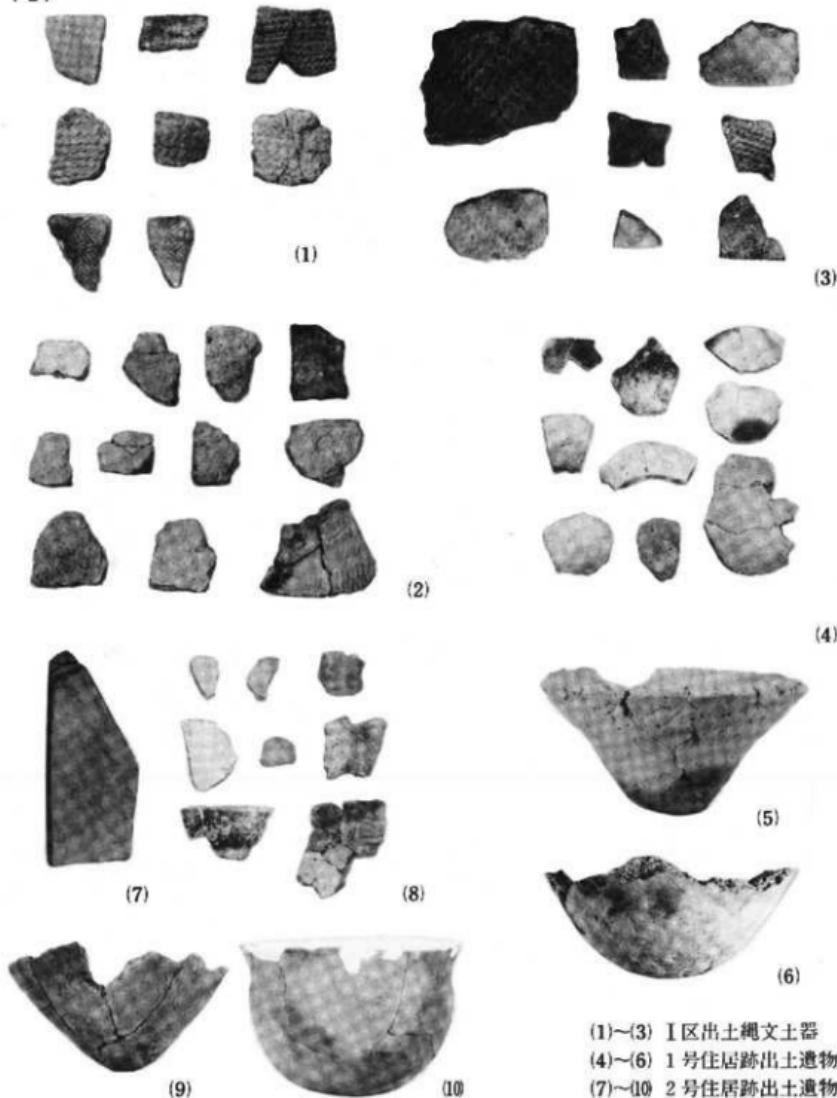
3号住居跡(西より)

4号住居跡(東より)

5号住居跡(東より)

6号住居跡(東より)

PL 7



(1)～(3) I区出土縄文土器
 (4)～(6) 1号住居跡出土遺物
 (7)～(10) 2号住居跡出土遺物



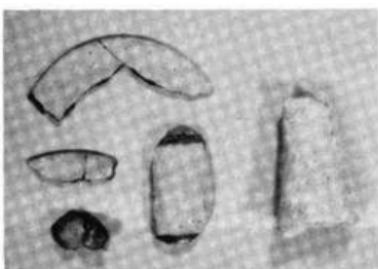
(1) 3号住居出土遗物



(2) 4号住居出土土器(壺・甌)



(3) 4号住居出土土器(壺・甌)



(4) 4号住居出土高杯



(5) 4号住居出土鐵器



(6) 4号住居出土甌



(7) 4号住居出土壺

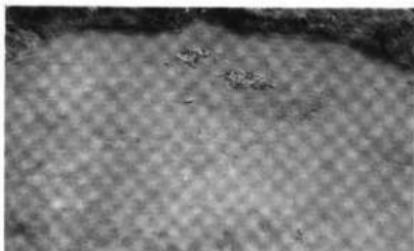


(8) 6号住居出土遗物

PL 9



① II区遠景(東より)



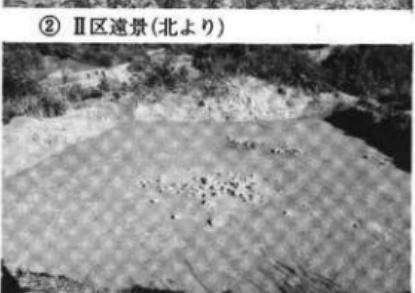
⑤ II-3区検出状況(西より)



② II区遠景(北より)



⑥ II-4区検出状況(西より)



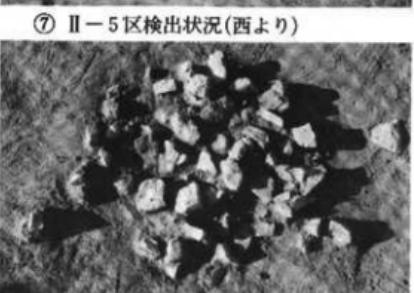
③ II-1区検出状況(西より)



⑦ II-5区検出状況(西より)



④ II-2区検出状況(西より)

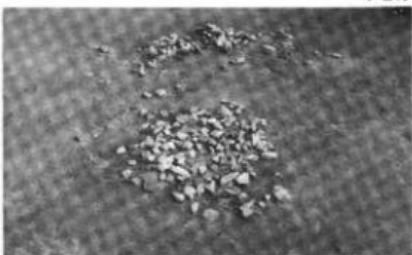


⑧ 2号集石・検出(西より)

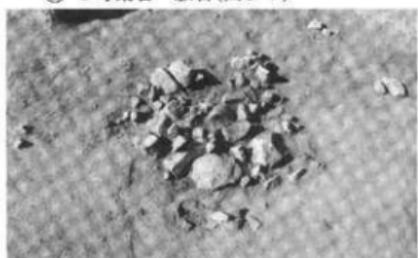
PL10



⑨ 3号集石・敷石(西より)



⑩ 7号集石・検出(西より)



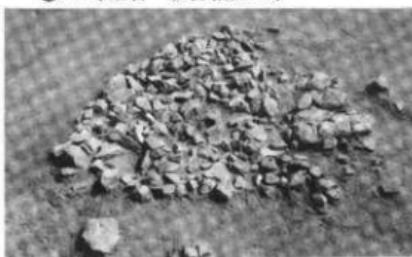
⑪ 4号集石・検出(南より)



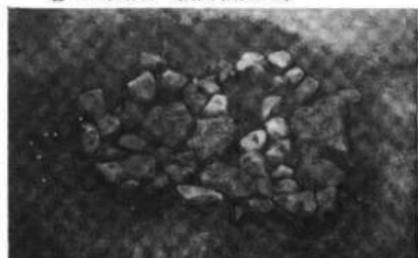
⑫ 7号集石・敷石(南より)



⑬ 6号集石・検出(南より)



⑭ 8号集石・検出(南より)



⑮ 6号集石・敷石(南より)



⑯ 8号集石・敷石(南より)

(2) II区の調査

1. 調査の概要

II区は笠下字塙田に所在する。分布調査では、樹木が覆い茂り調査が困難であった。試堀では、アカホヤ層の下に焼石が確認されている。伐開後、地形に沿ってアカホヤ層の下まで放射状に數本のトレンチを入れた。その際、集石構造が確認されたトレンチを拡張して調査を行った。(Fig28) 検出遺構は集石8基である。そのうち2基に遺物を伴う。遺物はアカホヤ層の下より、押型文土器、石鏃、磨石等が出土した。

2. 層序 (Fig29)

II区の層序は、I区と基本的に相違は認められない。

I層：表土層。10cm～20cm。

II層：色調は赤みのある茶褐色を呈する。10～20cm。

IIIa層：明茶褐色土層。II層とアカホヤの混じった層である。5～10cm。

IIIb層：明褐色土層（アカホヤ層）。10～20cm。

IV層：暗茶褐色土層。約10cm。縄文時代早期の遺物・焼け石などが出土している。

V層：暗褐色土層。約10cm。粘質を帯びる。

VI層：砂礫混じりの粘質の黄

茶褐色土。20～40cm。

VII層：砂礫混じりの粘質の黄

褐色土。約20cm。

VIII層：黒褐色土層。3～5 cm

のブロック状。

IX層：赤褐色土層。砂礫を含

む。粘質。



Fig28 II区トレンチ設定図 (1 / 2,000)

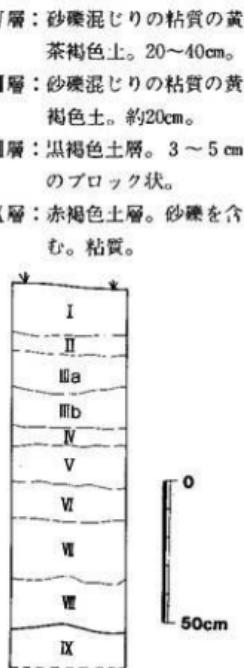


Fig29 II区土層図 (1 / 20)

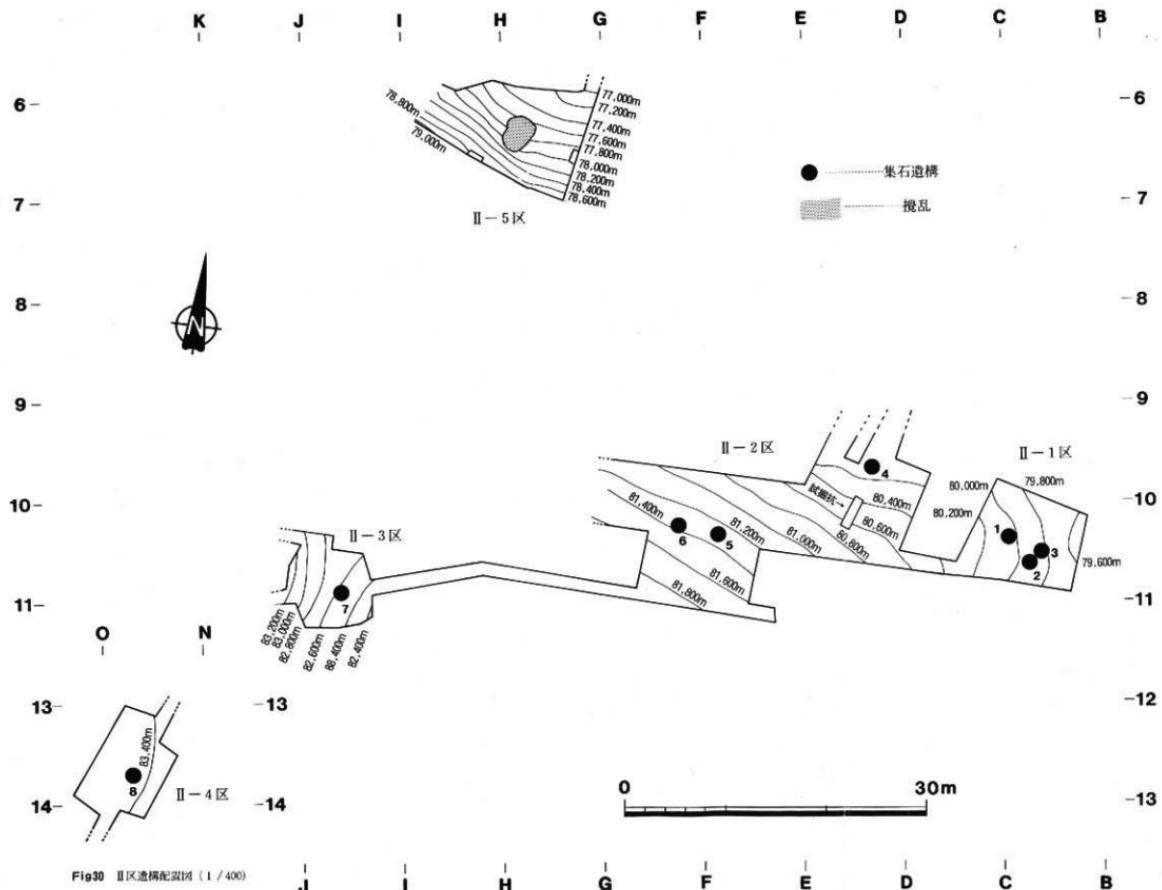


Fig30 Ⅱ区造構配図 (1 / 400)

3. 遺構と遺物

遺構 (Fig 29)

II区で検出した遺構は集石遺構8基である。全て、掘り込みを持つ。そのうち2・3号集石は近接し、1・2・3・5・7・8・9分集石には敷石を有する。6分集石は大型である。また、敷石の一部に阿蘇容結凝灰岩（丘陵東側に露頭がある）を利用しているところに特徴がある。

出土遺物は1号集石より土器 (Fig 32, 1・2) 6号集石より土器とスクレイバー (Fig 32, 3・4) が出土している。1は口縁が若干外反する。2はその胴部と思われる。1・2の文様は具沿条痕の一部が外面に若干観察される。3は山形押型文である。4は自然面を有する剝片に荒い加工を施すスクレイバーである。全長9cm、全幅7.5cm、最大厚1.5cmを計る。砂岩製。

遺物 (Fig 32・33)

II区の出土遺物には石鏃、小型石器、スクレイバー、磨石、押型文土器がある。量はわずかで、大半がII-2区より出土した。(6・10~19)

5はチャート型の石鏃で、脚が短く、抉りを持つ。鍼形鏃と思われる。全長1.9cm、全幅約2m、最大厚0.3cmを計る。6は部厚い剝片の周囲を丁寧に加工した小型の石器である。おそらくスクレイバーとして使用したものと思われる。全長2.5cm、全幅2.2cm、最大厚1cmを計る。チャート製。7は口縁部がやや外反する梢円押型文である。8・9は先端部尖がらない荒い棒状工具で条痕を施す。9は14と同様な器形と考えられる。10は自然面を有するほぼ方形の剝片の弧状部分に細かく加工を施したスクレイバーである。打面を残す。全長4.5cm、全幅4.3cm最大厚1.5cmを計る。流紋岩製。石質や風化の度合から見て旧石器時代の所産と思われる。11は花崗岩製の磨石である。両面使用のもので、端部は欠損して不明である。

12・13は山形押型文である。12は口唇内部に丸い棒状工具で斜方向に圧痕を施す。14~18は梢円押型文である。14は頸部から口縁へかけて直行ぎみに開き、口縁端部に近い部分さらに外反させ、口唇端部はやや内側につまみ出している。14と17は胎土・色調・焼成とともに似かよっており、同一個体と思われる。19は型式不明の土器である。外面は細かい板状工具あるいは一枚貝の端部をずらしながら施文したと思われる文様が、内面には丸い棒状工具の端部を押さえつけたと思われる文様がある。

20は土師器胴部片である。II-4区出土。II区ではこの1点のみの出土である。II-4区はちょうど尾根の鞍部にあたり、I区の状況から住居跡が予想されたが試掘の結果、それらしき遺構等は発見されなかった。

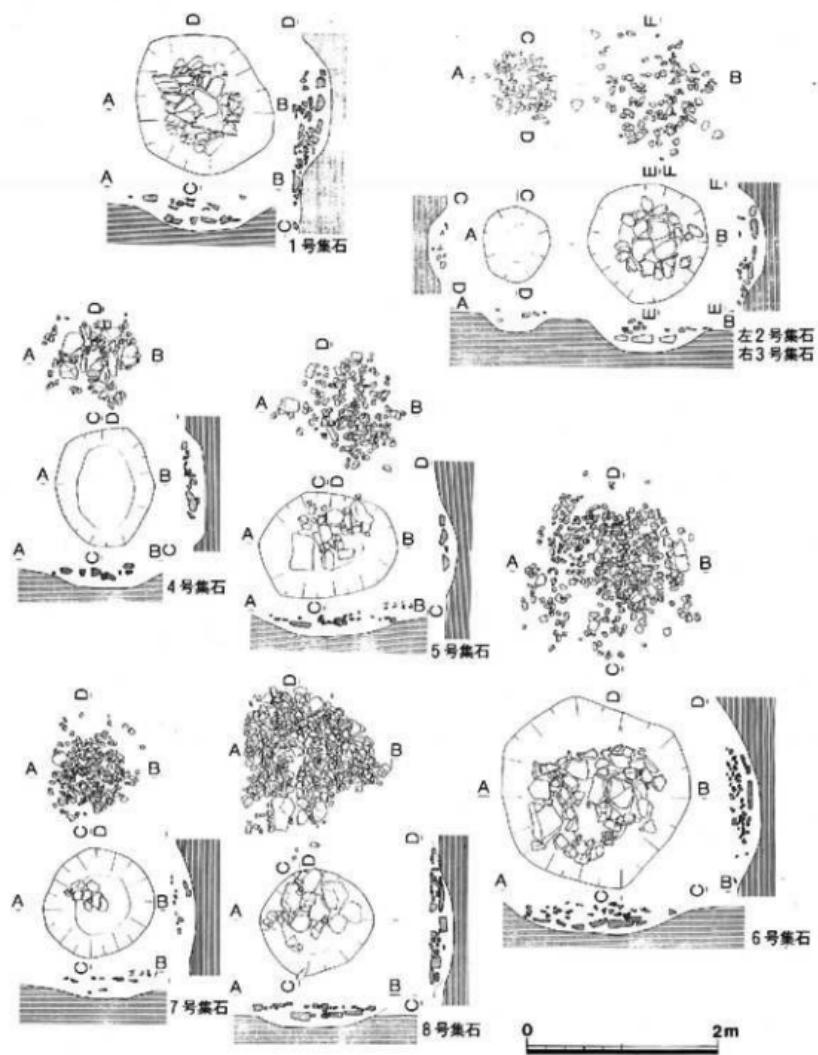


Fig31 II区集石透構実測図 (1 / 60)

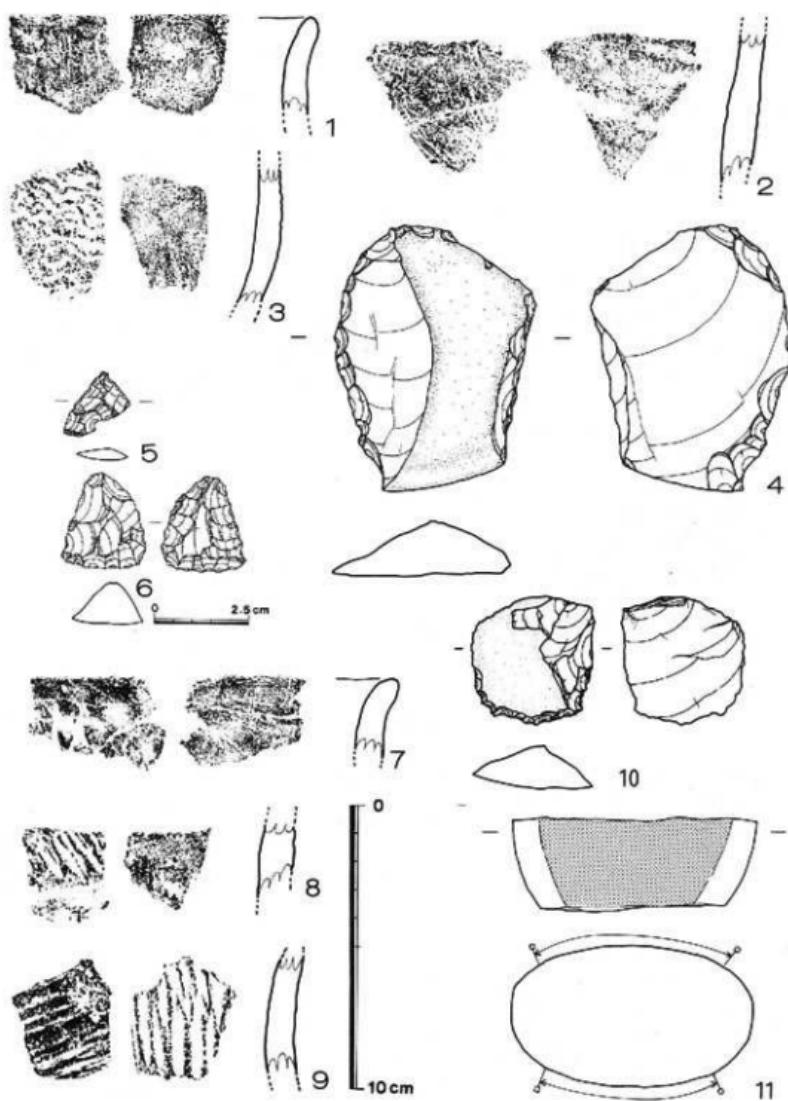


Fig32. II区出土遺物実測図① (5・6は2/3、他は1/2)

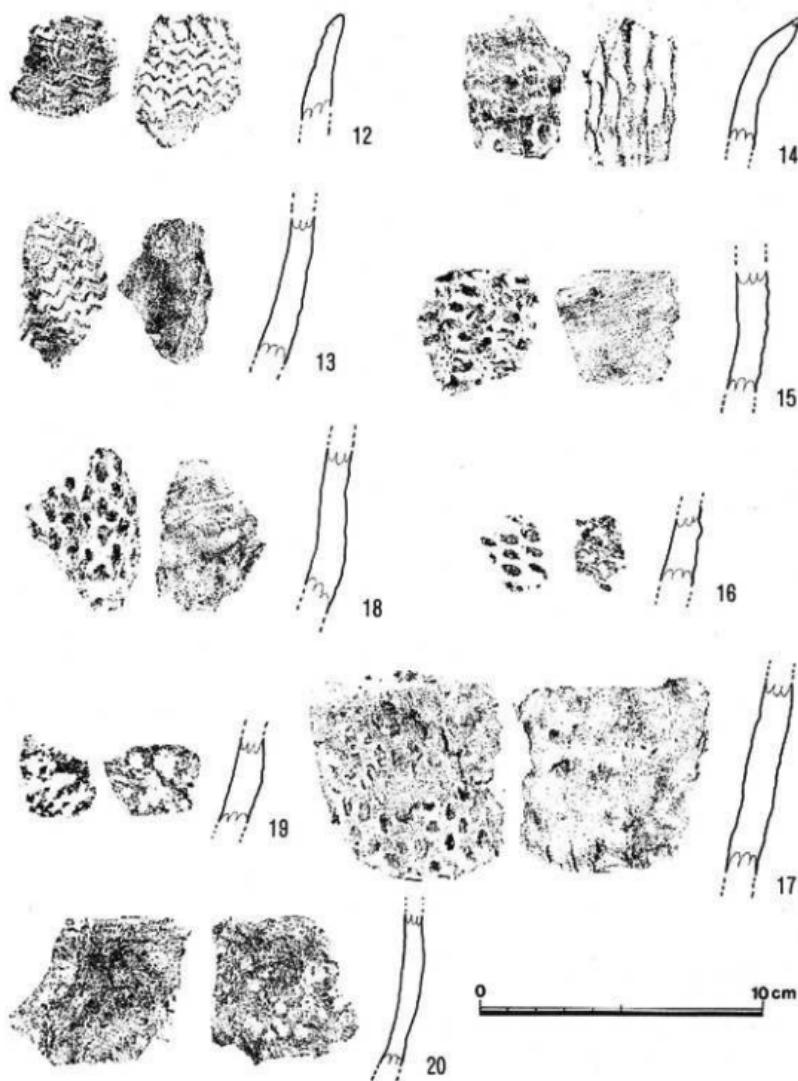
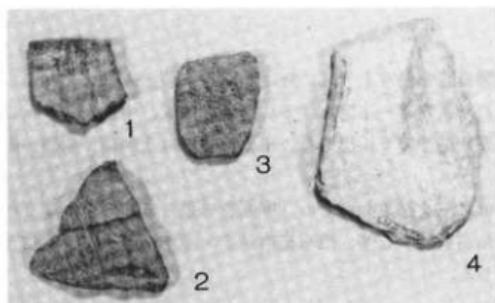
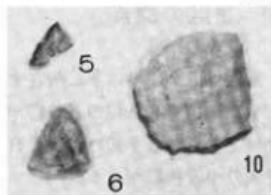
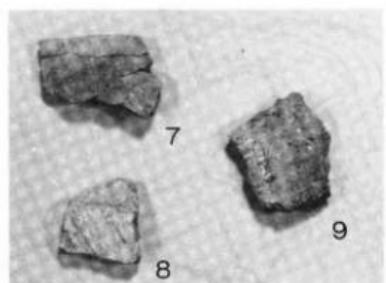


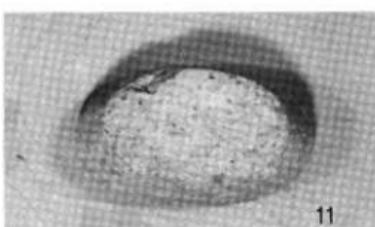
Fig33 Ⅱ区出土遺物実測図② (1 / 2)



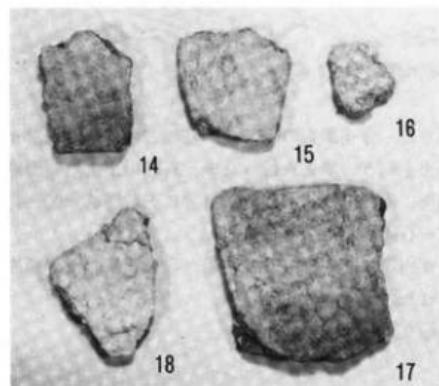
(1) 集石遺構内出土遺物

(2) 石鎌、小型石器
スクレイパー

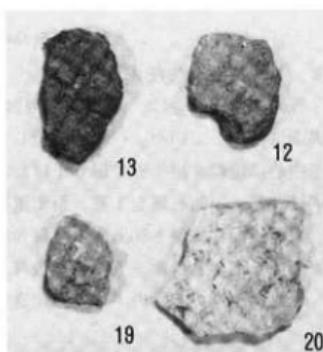
(3) II-1区出土遺物



(4) 磨石



(5) 淩円押型文土器



(6) 山形押型文、その他

(3) III区の調査

1. 調査の概要

III区は笠下字神の下に所在する。調査区を便宜上2区に分けた。(Fig34)

分布調査で20基程の五輪塔が確認された所をIII-1区とする。調査の結果、中世から近世にかけての五輪塔を初めとする石塔群、祭祀遺構等を検出した。出土遺物には土師皿、明鏡、墨書き入り小砂利等がある。

また、IV区との境・III区の登り口で焼け石を探集したため、周囲を拡張して調査を行なった。これをIII-2区とする。調査の結果、集石遺構を5基、焼石集中部2ヶ所を検出した。遺物として押型文土器が集石遺構等より出土した。

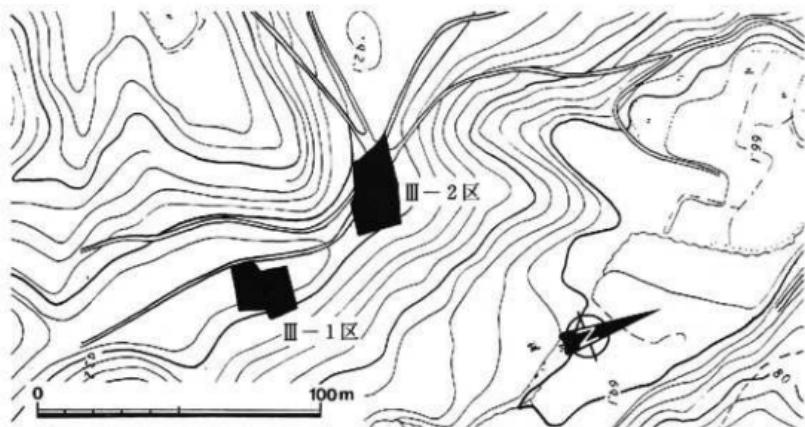


Fig34 III区調査区位置図 (1 / 2,000)

2. III-1区の調査 (Fig35)

笠下の発掘調査は、先ずIII区の伐間から始めた。分布調査の際、約20基ほどの石塔の一部が表面に露出していた。ベルトを残して一部表土を剥ぎ、供養を行った後、石塔の出土する範囲を中心に地輪を出すまで掘り下げた。その結果、約13m×10m程の平坦部に五輪塔約300、角塔婆3基、不明石塔を1基、祭祀遺構・一字一石造構を各1ヶ所検出した。

東側斜面には長さ50cm～1m程の柱状の石が円形に転がっており、中から糸切底の土師皿片が出土した。その他、五輪塔や板碑が検出された。

また、西端の火輪の下より祭祀遺構を検出した。

五輪塔

五輪塔は、各部がバラバラに点在している。数列、地輪が整然と並ぶ。地輪の周囲には、2ないし3cm～拳大の偏平な河原石・小砂利・焼け石等を敷きつめているが、その下には、一部を除き掘り込み等は検出されなかった。地輪下の掘り込みは3ヶ所検出した。掘り込みはやや不定形の円状を呈し、深さは1mを超えない。アカホヤ、炭、焼土、焼石、埴層ブロックが混入している。また、出土遺物はなかった。(Fig 36)

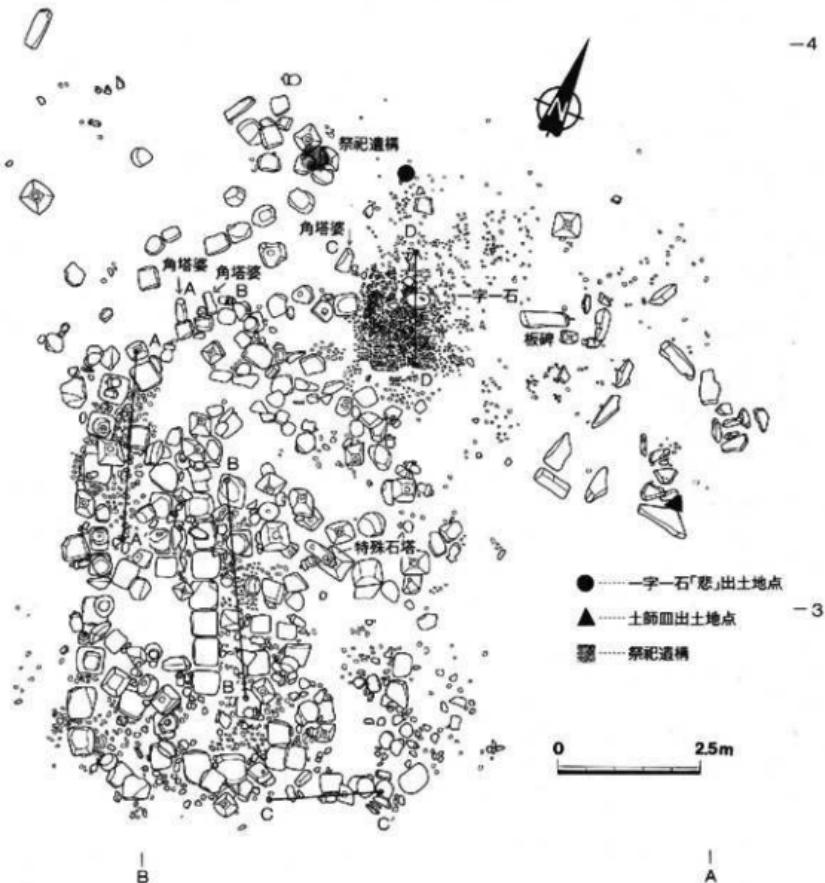


Fig 35 III-1区造構配置図 (1 / 100)

PL 12



(1) III区遠景（北より）



(5) 東側傾斜部（東より）



(2) III-1区近景（南より）



(6) 東側傾斜部上師皿出土状況（東より）



(3) III-1区検出状況（北より）



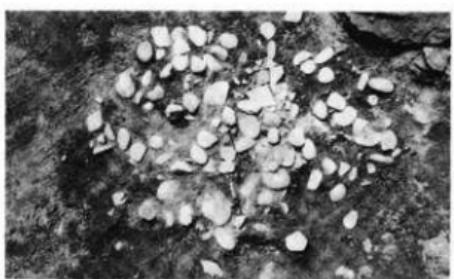
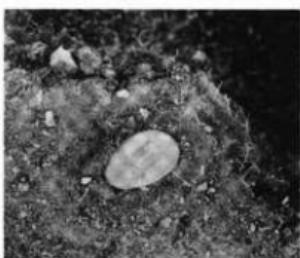
(7) 作業風景（南より）



(4) III-1区検出状況（南より）



(8) III-1区完掘状況（西より）



B-B' (南より)

C-C' (西より)

一字一石堆積状況(南より)

祭祀造構(東より)

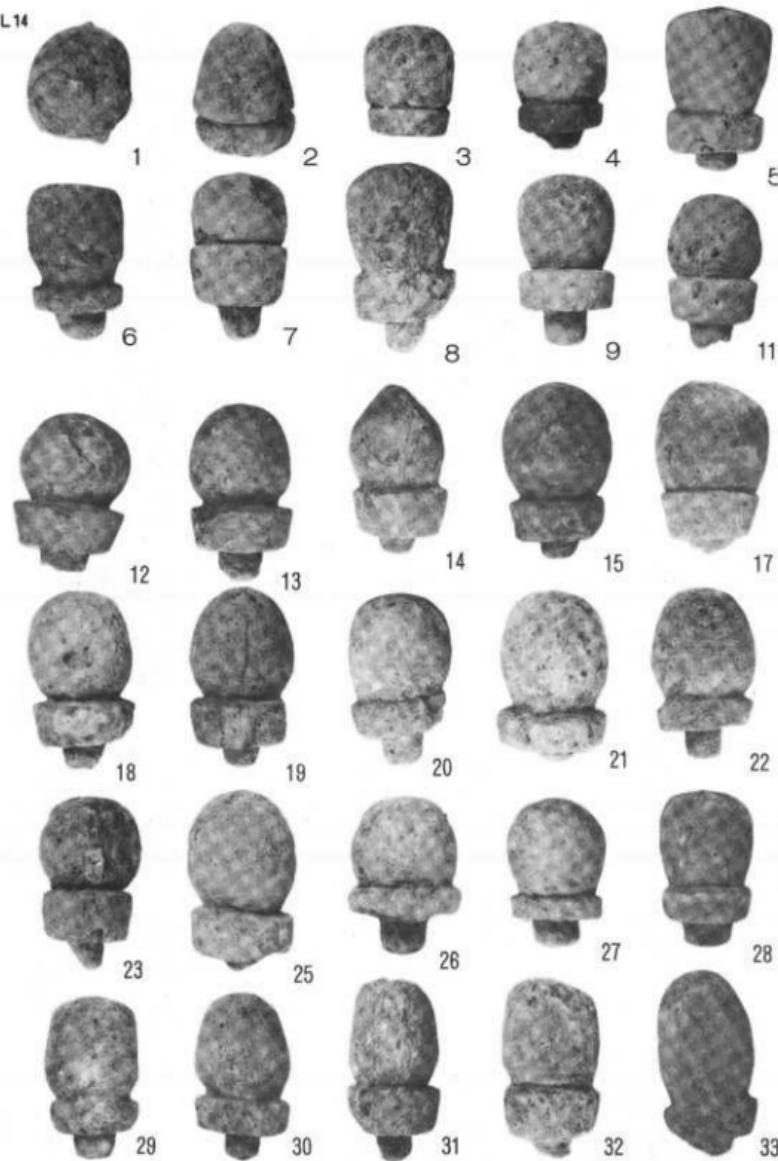
供養

A-A' (西より)

「悲」出土状況

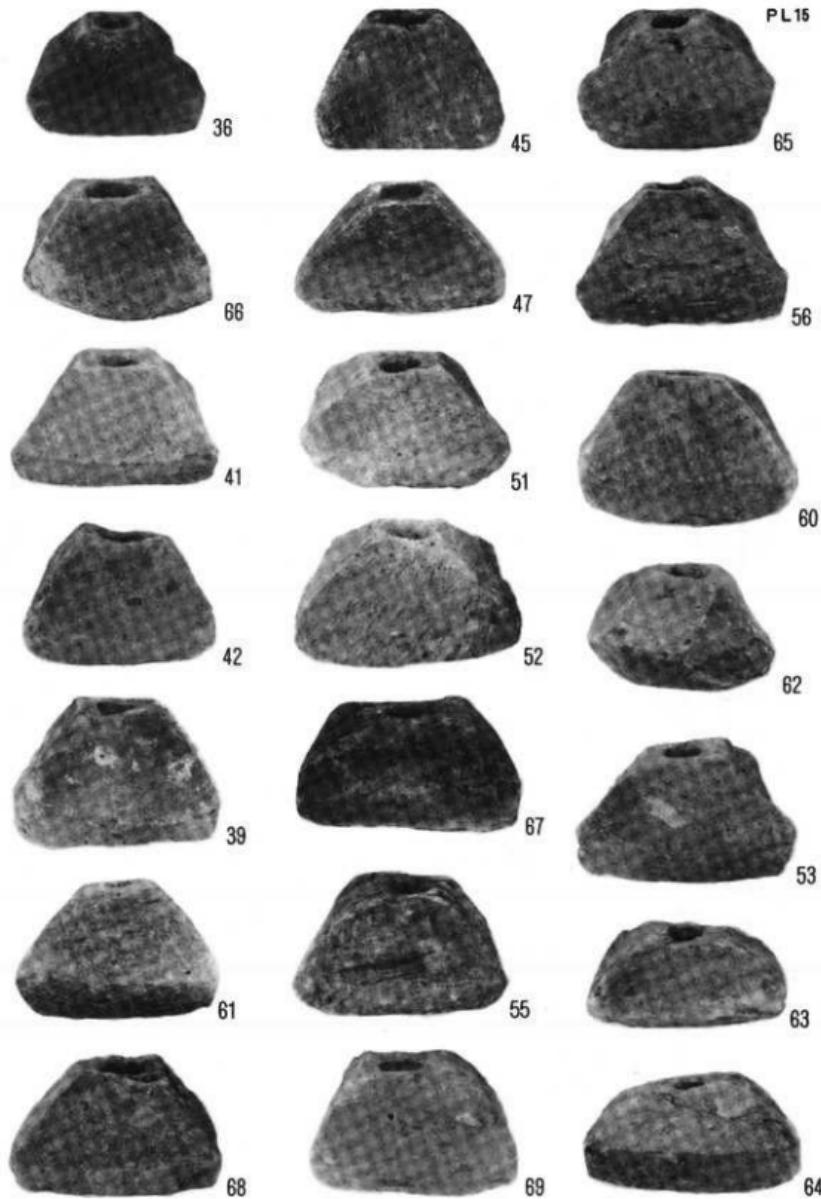
作業風景

PL 14



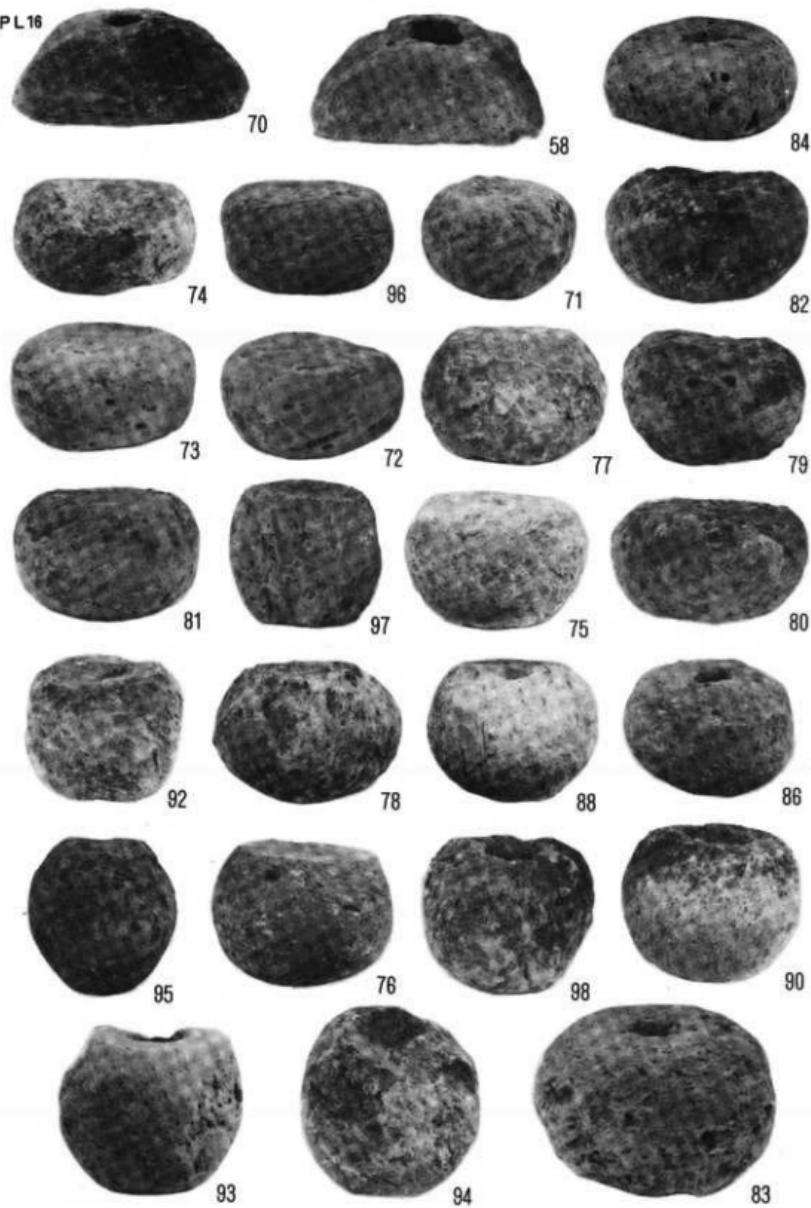
III—1区出土五輪塔（空風輪）

PL 15



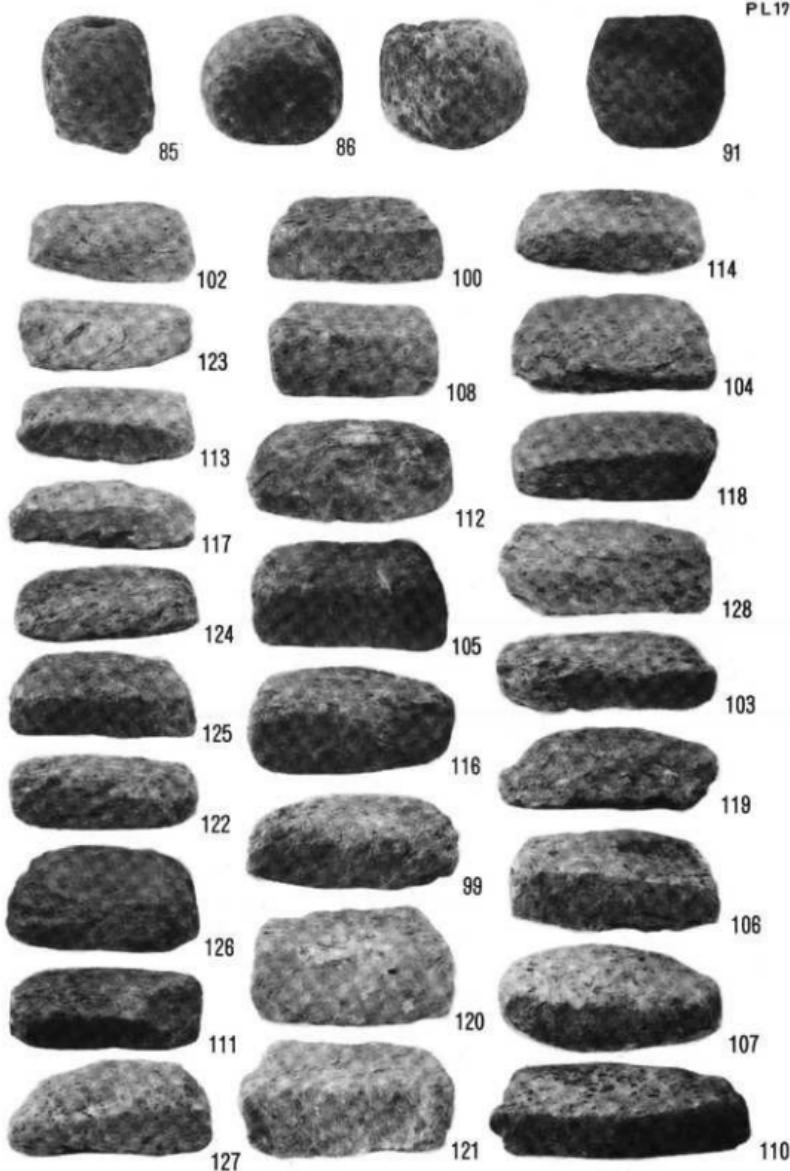
III-1区出土五塔 (火轮)

PL 16



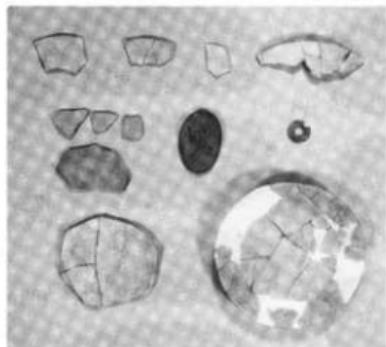
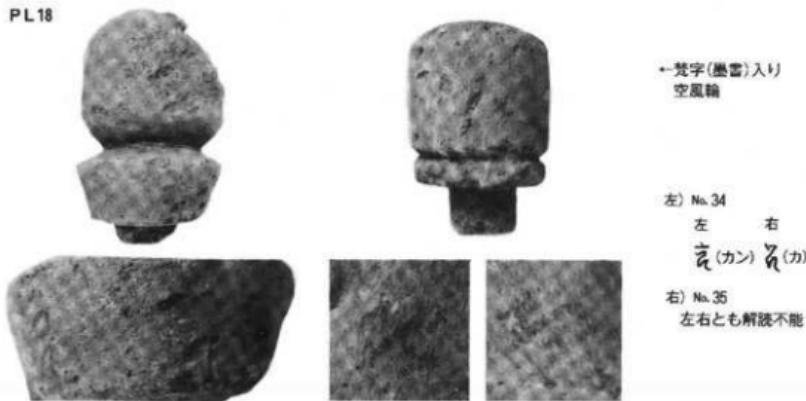
III—1区出土五轮塔（大·水轮）

PL 17



III-1区出土五輪塔（木・地輪）

PL 18



← III区五輪塔群出土遺物



129



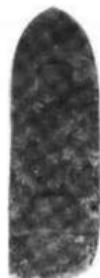
130



131



132



133

↑ III区その他の石塔

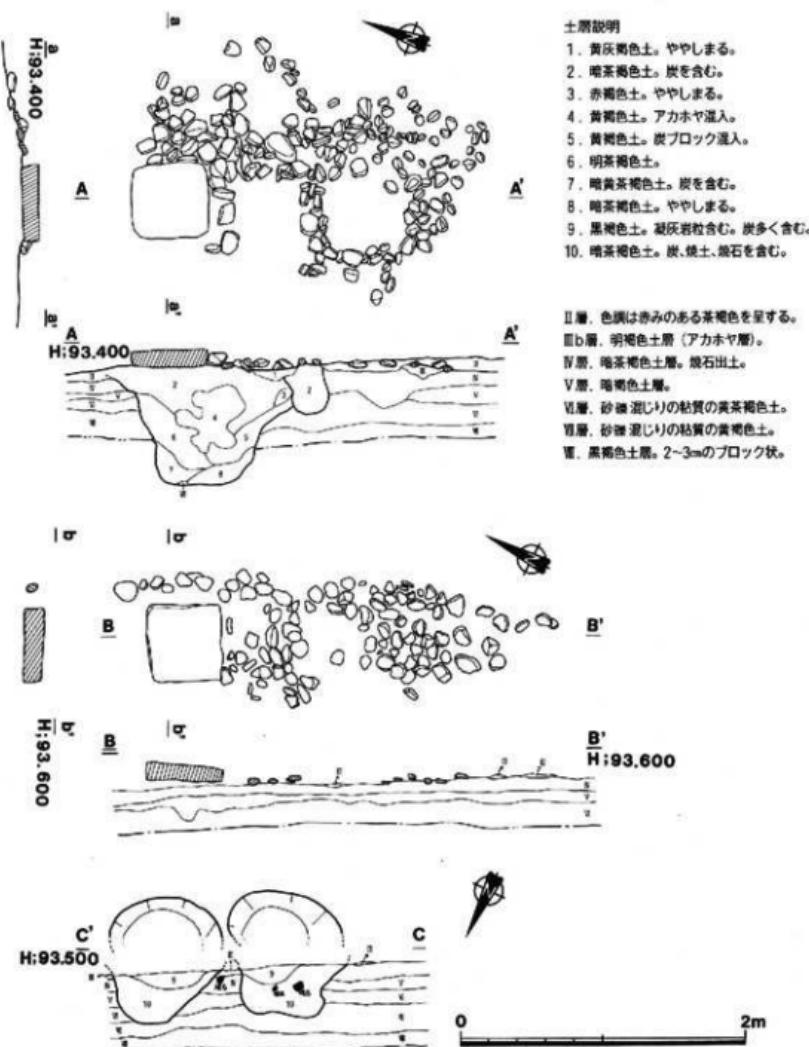


Fig36 地輪下実測図 (1 / 40)

空風輪 (Fig.37・38)

空風輪は計測可能なものが30余り出土している。そのうち4点には墨書が確認されたが、判読できたのは半分である。

頂部の形態からすると、円頭型・平頭型が多く、尖頭型・圭頭型は少ない。

まれに、2のような特殊なタイプが出土している。また、33のように空部が異様に長いも存在する。

墨書も、不動明王を表す梵字が書かれていたり、同部に2ヶ所入れるなど特異である。

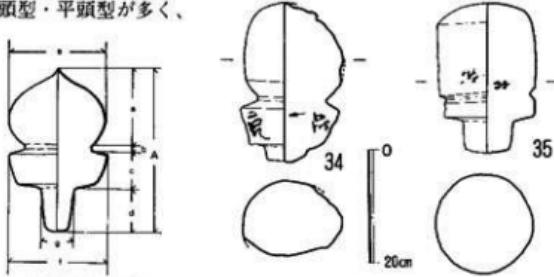


Fig.37 III-1区空風輪(墨書)実測図(1/10)

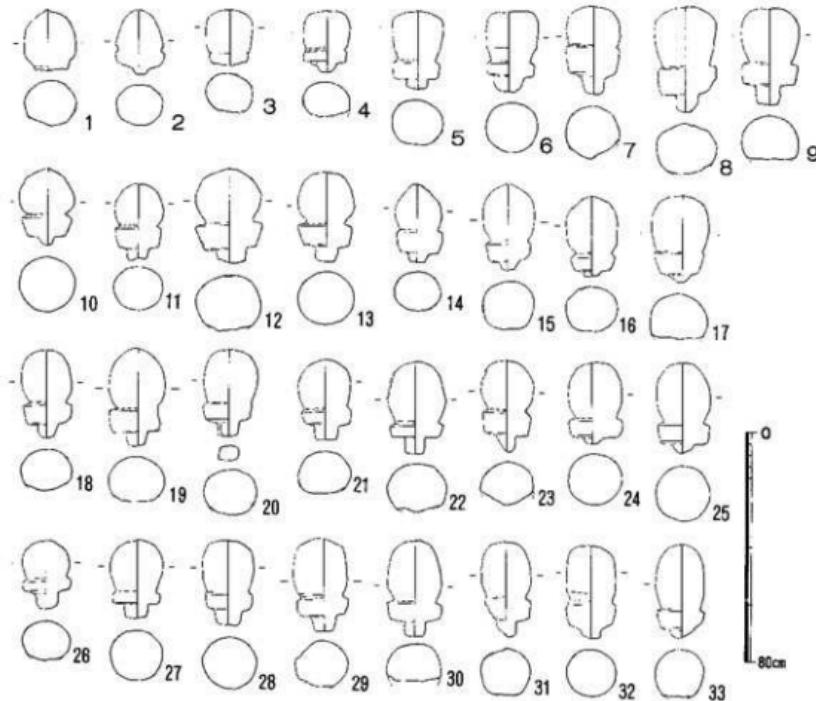


Fig.38 III-1区空風輪実測図(1/20)

Tab 1 Ⅲ-1区五輪塔 空風輪法量表

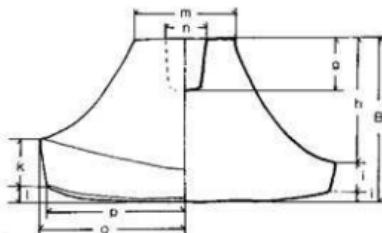
FigNo	PL No	A	a	b	c	d	e	f	g	g	備考
1	1	21.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
2	2	23.0	14.4	1.0	5.2	2.4	16.9	—	17.0	5.3	
3	3	19.8	15.5	0.2	4.1	—	168	—	13.7	—	
4	4	21.9	12.8	0.8	4.6	3.7	16.5	—	15.1	8.6	
5	5	27.9	17.3	0.7	6.2	3.7	17.0	18.2	16.2	14.4	7.2
6	6	28.3	15.2	4.0	4.2	4.0	17.0	—	16.2	—	9.9
7	7	30.6	13.8	0.2	9.9	6.7	20.0	—	20.2	—	10.2
8	8	37.0	21.4	1.2	8.8	5.6	21.7	—	20.7	—	8.6
9	9	35.1	18.9	0.4	8.1	7.7	20.0	—	19.3	—	8.7
10	10	27.3	17.0	0.4	7.1	2.8	19.8	15.8	17.4	—	6.2
11	11	27.2	14.9	1.0	7.1	4.2	18.5	—	12.1	11.1	8.4
12	12	33.7	20.3	0.2	8.5	4.7	23.2	—	23.2	—	10.6 愚書(?)
13	13	30.1	15.7	1.8	6.8	5.8	18.3	—	16.5	—	7.2
14	14	27.8	16.0	1.0	7.6	3.2	16.2	—	16.2	—	7.6
15	15	30.9	20.2	0.5	7.4	2.8	178	—	13.8	—	6.0
16	16	28.4	19.5	0.7	5.7	2.5	18.1	—	15.7	—	7.1
17	17	30.7	19.5	—	8.2	3.0	19.9	13.2	16.4	—	8.0
18	18	30.7	18.5	—	7.1	5.1	180	—	17.9	15.2	7.9
19	19	34.6	21.0	0.5	8.1	5.0	20.6	—	19.0	—	8.1
20	20	31.0	20.5	0.2	5.3	5.0	18.6	—	17.2	—	7.8 (脚四角)
21	21	28.1	19.0	1.0	5.9	2.2	18.9	—	18.7	—	6.9
22	22	32.9	20.7	1.5	5.2	5.5	21.2	—	18.7	—	7.0
23	23	31.4	15.7	1.5	9.0	5.2	19.1	—	16.1	—	7.0
24	24	23.6	13.5	0.3	4.8	5.0	16.4	—	16.9	—	7.8
25	25	32	20.3	0.7	7.8	3.2	19.7	—	17.6	—	8.1 愚書(?)
26	26	23.6	13.5	0.3	4.8	5.0	16.4	—	16.9	—	7.8
27	27	28.3	19.0	—	4.6	4.7	18.2	—	16.8	—	8.5
28	28	30.4	18.4	0.2	6.2	5.6	18.7	—	18.8	—	11.1
29	29	33.8	20.0	1.0	7.2	5.6	18.2	—	17.8	—	9.0
30	30	33.8	21.2	1.8	7.2	5.6	18.0	—	17.9	—	7.6
31	31	34.5	19.5	0.2	8.6	6.2	17.6	—	15.6	—	7.0
32	32	32.8	19.4	1.2	7.8	4.8	16.1	—	16.2	—	6.7
33	33	32.7	23.0	1.2	5.0	3.5	16.2	—	16.4	—	
34	34	28.4	16.2	1.1	7.1	2.6	17.6	—	17.1	—	8.0 愚書(梵字)
35	35	26.6	17.2	1.2	2.8	5.4	17.8	—	17.2	—	8.7 愚書(梵字?)

火輪 (Fig 39・40)

火輪は全て軒を持つ。軒には垂直に落ちるタイプ (41など)、引っ込むタイプ (37など) 開くタイプ (44など) がある。上面視は概ね正方形であるが、比較的変形しているものが多い。

また、屋根には外側にそるタイプ (37など) と内側にそるタイプ (57など) がある。

同様に底部にも真っ直ぐなタイプ (41など) あげ底様のタイプ (47など)、上方に開くタイプ (63など) がある。



火輪法量凡例

Tab 2 三一区五輪塔 大輪法量表

No	Field	PL.No	B	b	i	j	k	l	m	n	o	p	q	納	穴	備考
36	36	36	18.6	10.6	7.0	1.0	7.8	2.0	10.8	72	16	15	4.2	丸		
37	37	—	22.8	16.2	6.6	—	6.6	1.8	13.8	9.2	10.5	16.4	0.2	丸		
38	38	—	20.8	14.2	5.1	1.5	4.0	3.0	14.8	8.8	18.5	18	7.8	角		
39	39	39	23.3	16.7	6.6	—	—	—	14.0	7.3	19	17	6.0	角		
40	40	—	22.0	12.6	8.8	0.5	6.8	7.3	18.1	10.4	—	—	7.8	丸		
41	41	41	22.5	16.3	5.6	0.6	7.5	2.5	18.9	87	19.75	18.8	6.8	丸		
42	42	42	19.6	13.6	5.0	1.0	4.2	3.8	16.0	88	15.5	14.2	6.5	丸		
43	43	—	17.5	10.0	6.1	1.4	6.2	1.6	13.0	7.2	16	15.7	6.1	丸		
44	44	—	17.8	11.6	5.9	0.3	0.2	6.8	—	20	38	—	—	角		
45	45	45	22.6	17.5	4.5	0.6	6.2	2.3	17.8	9.2	18	17.1	6.6	角		
46	46	—	21.2	—	—	—	—	—	—	9.7	17.4	14.5	6.3	丸		
47	47	47	23.0	16.5	6.0	0.5	4.8	0.5	14.8	9.4	20.8	19.1	6.4	丸		
48	48	—	24.1	13.0	10.5	0.6	6.2	0.8	17.8	9.5	23.2	22.5	0.9	丸		
49	49	—	21.8	9	8.8	3	12.4	2.8	—	—	21	18.8	—	丸		
50	50	—	16.3	9.1	7.2	—	8.4	1.3	11.7	8.2	16.5	15.6	4.8	角(隅丸)		
51	51	51	20.8	12.4	7.9	0.5	8.5	6	15.3	9.3	17.5	15.8	7.6	丸		
52	52	52	20.2	10.5	8.0	2.2	4.8	4.2	13.0	8.2	10.3	205	6.2	丸		
53	53	53	22.6	12.8	6.9	2.9	9.6	2.4	15.8	8.0	19.9	18.1	7.4	丸		
54	54	—	27.8	17.7	9.0	1.1	12.6	4.8	15.1	8.2	22.5	22	5.9	丸		
55	55	55	18.5	14.8	32	0.6	—	—	—	8.6	18	64	5.1	丸		
56	56	—	18.2	10.6	5.9	1.7	—	—	123	8.4	—	—	4.3	丸		
57	57	—	19.4	10.8	6.8	1.8	6.7	1.2	19.7	8.4	18.6	15.8	4.2	角		
58	58	58	19.3	8.9	6.0	4.4	4.5	6.0	14.5	8.7	18.5	17.5	6.7	丸		
59	59	—	20.4	12.8	4.5	3.1	—	—	17.0	8.0	—	—	5.8	丸		
60	60	60	26.7	16.6	10.0	0.1	9.1	4.8	14.8	8.3	22.6	20.8	4.9	—		
61	61	61	26.7	17.0	7.8	1.9	11.0	6.5	16.7	7.0	20.8	18.3	5.2	丸		
62	62	62	17.0	11.9	6.8	0.3	—	—	11.4	8.0	18.25	11.5	3.1	角(隅丸)		
63	63	63	19.8	10.4	13	5.1	—	—	—	7.7	19	18.5	—	角		
64	64	64	21.2	11.7	6.0	3.5	—	—	—	—	—	—	—	丸		
65	65	—	21.7	12.8	8.0	0.9	10.0	3.9	15.2	7.6	17.8	13.9	5.8	丸		
66	66	—	23.1	14.8	5.6	2.7	7.5	3.0	16.8	9.8	195	16.5	5.9	丸		
67	67	—	16.5	8.8	7.4	0.3	—	—	—	10.7	175	17.1	6.6	丸		
68	68	—	20.7	13.9	6.8	—	7.8	0.2	18.7	10.0	17.8	16.2	6.8	丸		
69	69	—	19.3	8.9	6.0	4.4	45	6.0	14.5	8.7	18.5	17.5	6.7	丸		
70	70	—	19.7	9.3	1.8	8.6	2.7	5.3	—	8.4	22	21.5	5.1	丸		

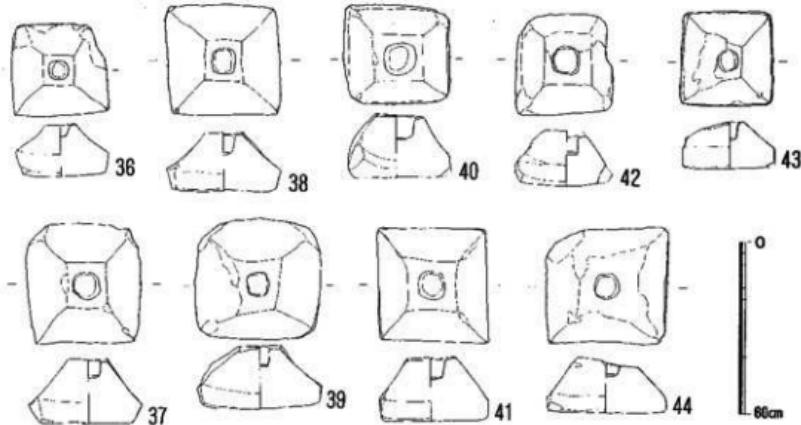


Fig39 三一区火輪実測図① (1 / 20)

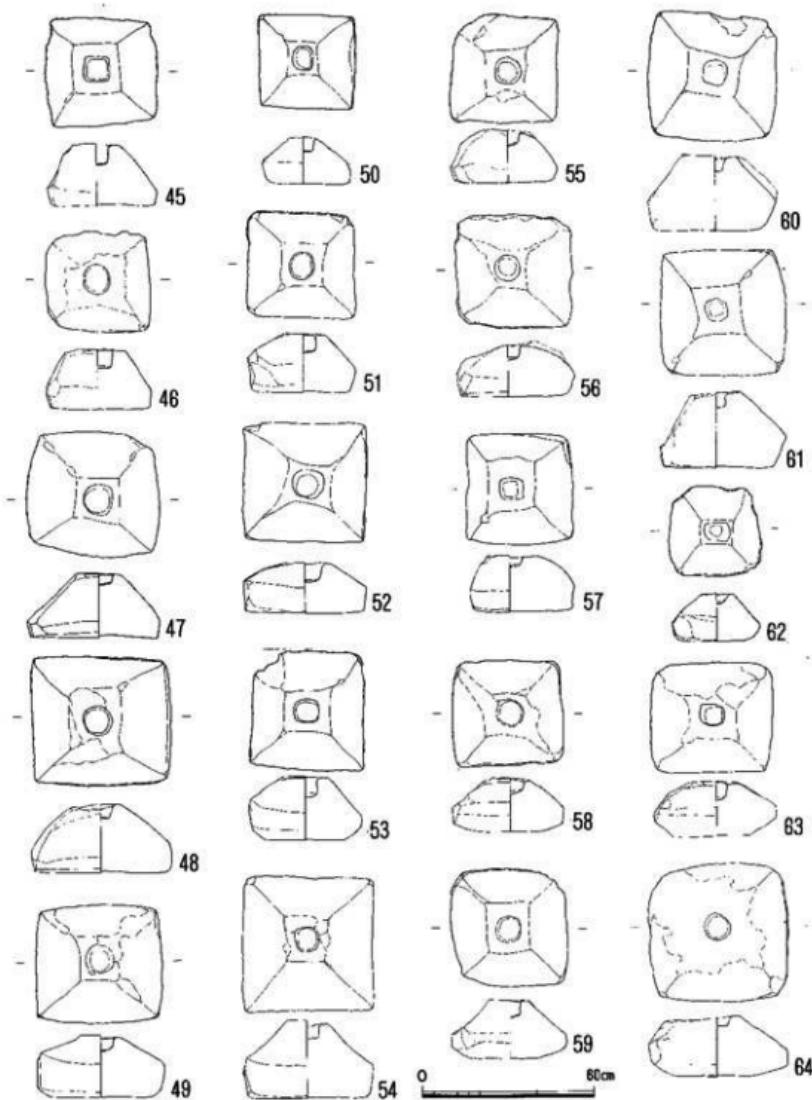


Fig40 II-1区火輪実測図② (1 / 20)

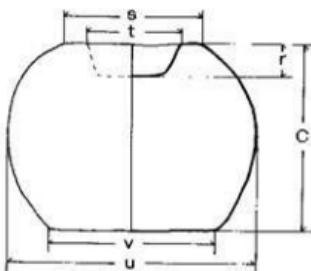
水 輪 (Fig 41)

水輪は出土総数が他部よりも少ない。出土した水輪には、納骨孔を有するものと無いものがありその割合は 6 : 4 である。

水輪はそのほとんどが胴部が球状に膨らむ中での変化であるが、まれに橢型（85など）や異型のもの（80・90など）、超大のもの（95）、一部磨痕が見られるもの（76）がある。

納骨孔は89のような変型もあるが、ほぼ丸型で占められる。

また、墨書き等は見られない。



水輪法量表凡例

Tab 3 III-1 区五輪塔 水輪法量表

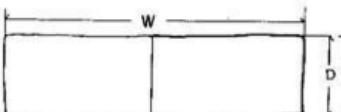
No.	Fig. No.	Pl. No.	C	r	s	t	u	v	納骨孔	備考
71	71	71	21.0	—	26.5	—	36.1	21.5		
72	72	72	15.2	—	20.2	—	29.1	21.6		
73	73	73	16.5	—	20.8	—	33.3	19.2		
74	74	74	17.0	—	28	—	37.1	31.0		
75	75	75	19.8	—	—	—	35.7	24		
76	76	76	23.8	—	20	—	35.4	24.1		
77	77	77	23.9	—	23.0	—	38.1	26.1		
78	78	78	23.4	—	23.2	—	37.4	22.8		
79	79	79	22.5	—	23.5	—	36.0	—		
80	80	80	26.2	—	—	—	34.2	22.8		
81	81	81	16.7	1.2	23.5	5.5	31.2	19.2	角	
82	82	82	16.6	—	22.1	—	31.1	23.9	丸	
83	83	83	18.4	1.0	21.0	5.8	30.4	—	角	
84	84	84	18.7	3.2	32.5	7.3	34.2	31	角(圓丸)	
85	85	85	29.0	—	25	—	34.1	23		
86	86	86	23	—	24	—	36.7	23.8		
87	87	—	22.1	4.5	3.4	7.0	37.3	27.3		
88	88	88	28.4	2.4	29.2	7.5	42.0	27.2	角(圓丸)	
89	89	—	23	1.1	25.6	4	34.4	25.4		
90	90	90	24.0	2.9	24.6	12.3	32.7	27.0	円	
91	91	91	28.6	4.6	20.8	8.0	—	—	丸	
92	92	92	23.9	—	24.5	—	31.5	21.8	丸	
93	93	93	32.2	4.6	—	13.2	38.8	26.6	丸	
94	—	94	33.2	—	24.0	—	38.1	28.5	丸	
95	—	95	42.6	6.0	—	20.2 (0.0)	42.6	24.8	角	
96	—	96	17.6	—	26.8	—	35.2	26.0		
97	—	97	25.3	1.2	21.7	—	30.9	28.4		
98	—	98	31.5	8.2	—	11.5	38.0	23.6	丸	

地 輪

笠下遺跡の地輪には受部が認められない。しかし、119のように段がつくものがある。

平面観が正方形に近いものよりも、多少変形したものが多い。このことは断面形にも言えることである。

また、地輪の幾つかに、工具痕が残る。工具には、幅 2 ~ 3 cm と 4 ~ 5 cm の 2 種類があるようである。



地輪法量表凡例

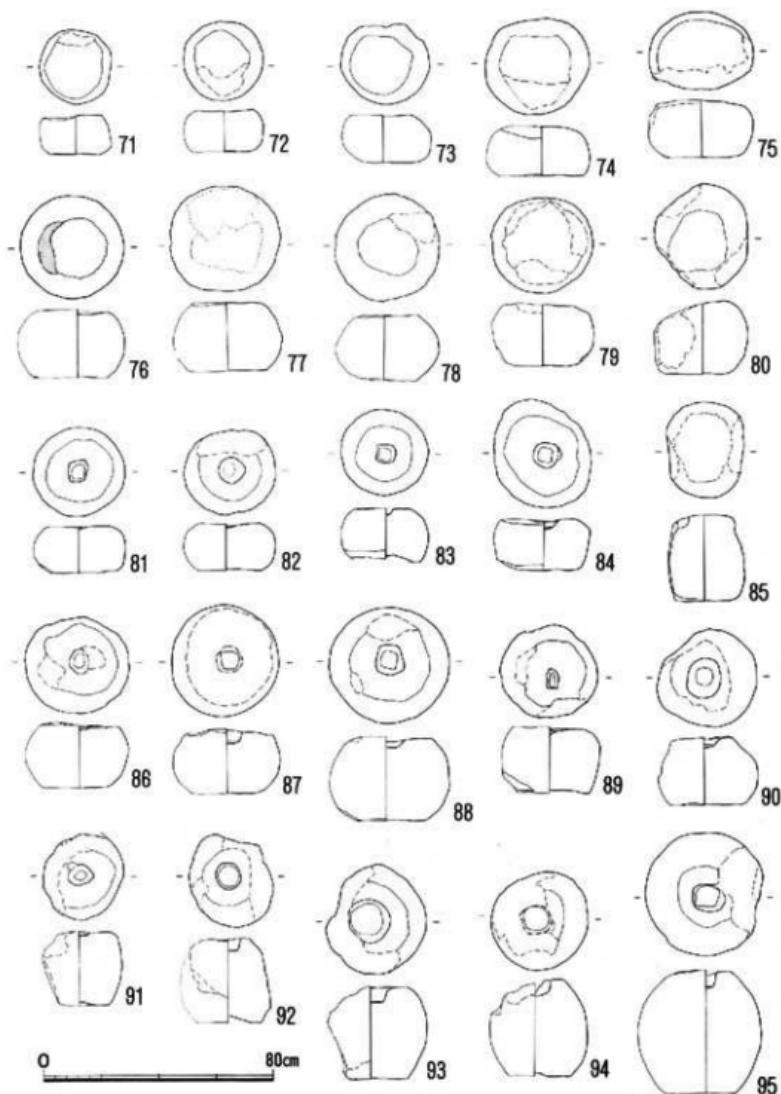


Fig41 III-1区水輪実測図 (1 / 20)

Tab 4 III-1区五輪塔 地輪法量表 (W'は短辺)

No	Fig No	PL No	D	w	w'	備考	No	FigNo	PLNo	D	w	w'	備考
99	99	99	11.3	41.8	41.7		114	114	114	13.9	52.9	42.0	ノミ痕有り
100	100	100	14.3	45.2	41.9		115	115	115	14.6	56.2	47.1	
101	101		10.2	39.3	31.2		116	116	116	12.6	54.0	45.6	
102	102	102	11.6	37.7	36.8		117	117	117	15.0	50.0	40.9	ノミ痕有り
103	103	103	11.6	52.7	47.2		118	118	118	12.5	49.7	10.7	ノミ痕有り
104	104	104	11.6	42.3	39.3		119	119	119	13.5	52.8	44.7	段つき
105	105	105	14.1	36.8	32.5		120	-	120	18.5	45.1	44.6	
106	106	106	14.7	50.5	43.3	ノミ痕有り	121	-	121	17.4	47.0	44.2	ノミ痕有り
107	107	107	12.6	48.0	45.1		122	-	122	13.1	56.9	52.7	
108	108	108	13.8	40.1	39.4		123	-	123				
109	109		11.1	36.4	35.2	ノミ痕有り	124	-	124	17.2	46.4	44.2	
110	110	110	11.9	53.1	48.7	ノミ痕有り	125	-	125	11.8	48.9	46.6	
111	111	111	13.2	45.4	40.8		126	-	126				
112	112	112	15.0	43.0	39.3		127	-	127				
113	113	113	11.8	39.8	34.5	ノミ痕有り	128	-	128	10.0	40.5	35.6	

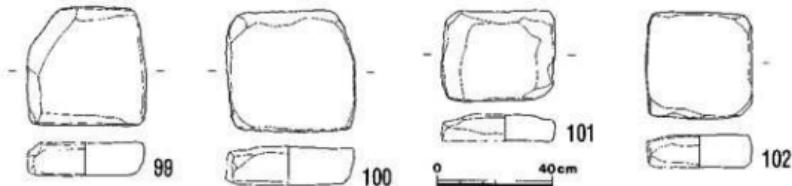


Fig 42 III-1区地輪実測図① (1 / 20)

その他の石塔 (Fig 44)

129~132は角塔婆と思われる。129の塔身の総高は41.4cm、基部は15.8cm×18.2cm、刻目は0.6cm~0.8cmの幅で深さ0.3cm~0.5cm、刻目の間隔は1.4~1.6cmを計る。側面に若干工具痕を残す。基礎は、高さ21cm、上底19.6cm×24.6cm、下底26.3cm×32.2cmを計る。上面がやや傾く。

130は頭部が欠損しており、刻目が3条になるのかどうかは不明。現高35cm、基部は17cm×16cm、刻目は0.5cm~0.8cm、深さ0.3cm、刻目間1.8cmを計る。基礎は16.6cm、上底15cm×19.8cm、下底29.6cm×36.8cmを計る。131は、全体を荒く加工するに止めている。高さ48.2cm、基部は11.6cm×21.2cmの長方形を呈す。基礎は不明である。132は全体の3分の2が欠損しており、基部は22cm×25cmを計る。

133は不明石塔である。頭部は両方から丸く仕上げ、頂部に稜がつく。上下2ヶ所に方形の浅い穴を開ける。上穴は一辺8cm、下穴は一辺10cmを計る。総高66cm、側面最大幅90cm、正面最大幅190cm、基部166cm×98cmを計る。墨書等は不明。

134は板碑である。頭部は低い山形で二条刻目があり、同様に月輪も刻目で描き出す。月輪は外径11.6cm、内径10.2cmを計る。板碑の刻目は幅0.6~1cm、深さ0.1~0.3cm程度である。額部下線は見られず、工具によってわずかに段をつけて代用している。総高82cm、側面最大幅13cm、正面最大幅27cmを計る。

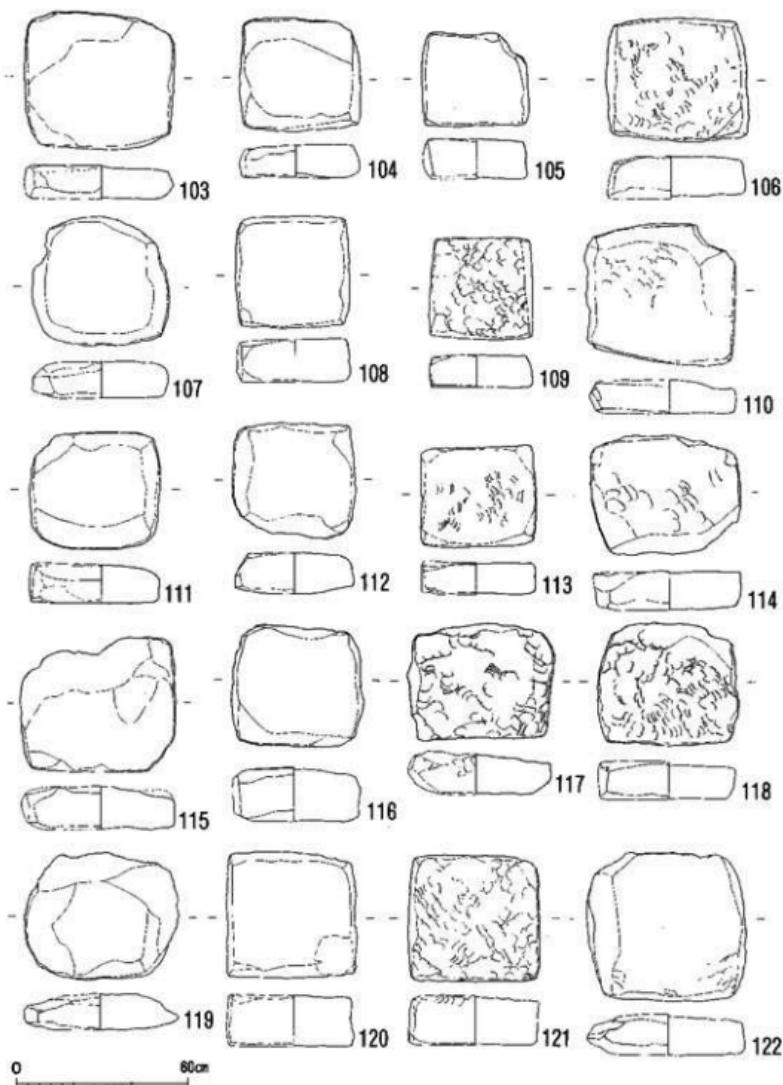


Fig43 II-1区地輪実測図② (1 / 20)

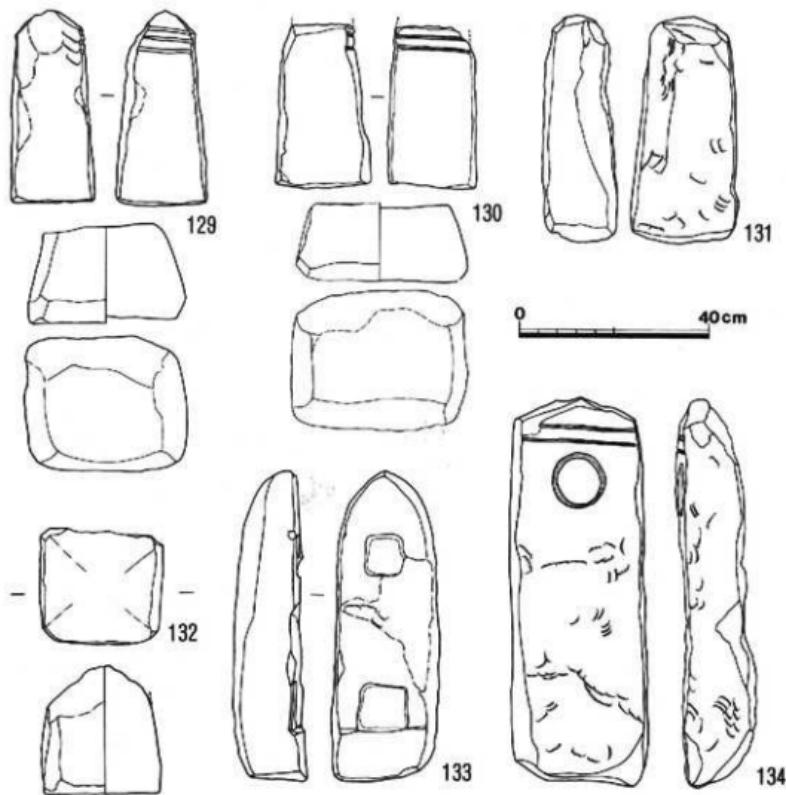
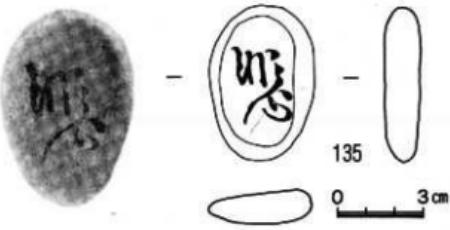


Fig. 44 III-1区その他の石塔実測図 (1 / 12)

一字一石遺構 (PL19・20、Fig 45・46)

一字一石遺構は調査区の北端で検出した。半裁の結果、径 2 ~ 3 cm の小砂利が厚さ 10 cm 程地輪の上に堆積しており、掘り込みはなかった。135は一字一字一石遺構の北端より出土した。墨書で「悲」と書かかれている。焼けた為か赤褐色を呈す。



PL18 一字一石「悲」 Fig. 45 III-1区一字一石「悲」実測図 (135) (1 / 2)

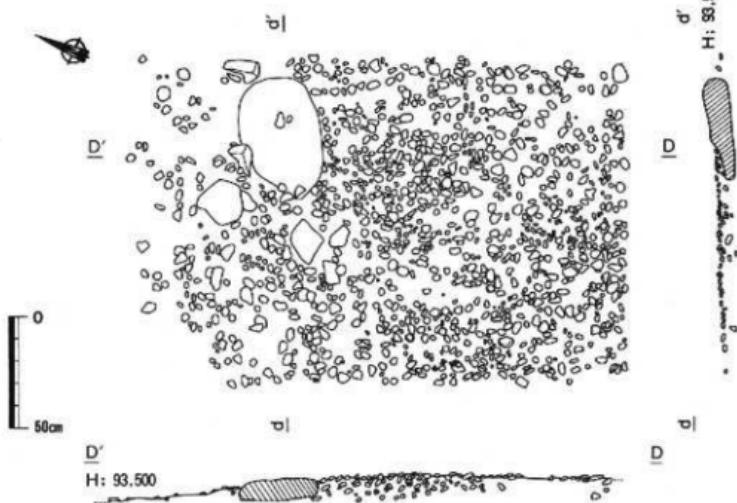


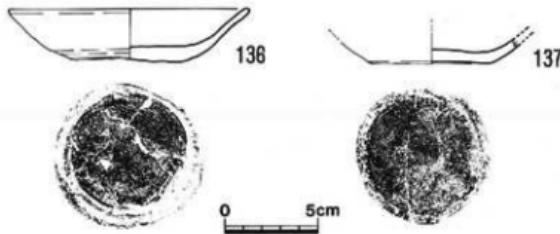
Fig 46 III-1区一字一石遺構実測図 (1 / 25)

祭祀遺構 (Fig 47・48)

祭祀遺構は、調査区西端の火輪の下より検出した。(Fig 35 参照) 径2~3cmの小砂利を約50cm×70cm程敷き詰めており、約90cm×80cm×30cm(長軸×短軸×深さ)の掘り込みを有す。出土遺物は糸切り底の土師皿2点と元宝通寶1点である。



PL20 D-D'断面



PL21 元宝通寶

Fig 47 III-1区祭祀遺構出土遺物実測図 (1 / 3)

その他の出土遺物 (Fig 49)

139は調査区西端に散在する五輪塔群の表土除去作業中に出土した土師皿の口縁部片である。

140は調査区東側斜面に円形に転がっている柱状の石の間から出土した糸切り底の土師皿片である。

141は半分欠損しているが、洪武通宝と思われる。表探資料である。

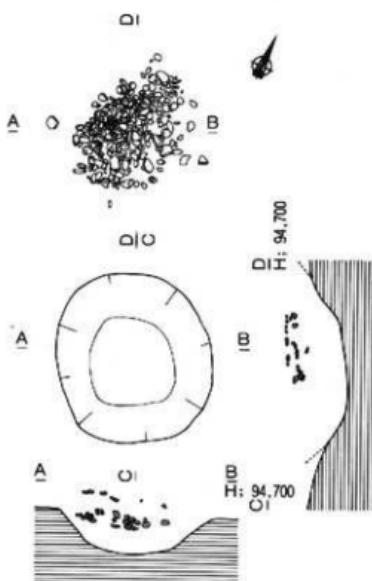


Fig48 III-1区祭祀構造 (1 / 30)

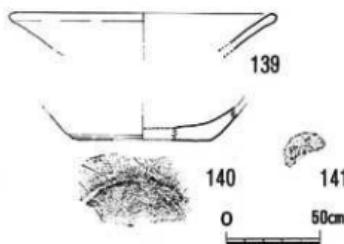


Fig49 III-1区出土遺物実測図 (1 / 3)

2. III-2区の調査

IV区との境・III区の登り口で、焼石および剝片が採集されたため、平坦部を中心に拡張して調査を行った。

調査の結果・集石遺構5基および焼石集中部を2ヶ所検出した。(Fig50)

検出遺構 (Fig52)

1号集石は焼石が疎の状態で敷石は見られない。これと反対に焼石が密の状態で敷石が浅い皿状を呈するものが5号集石である。2号集石はほぼ敷石のみの検出である。敷石は平らで、

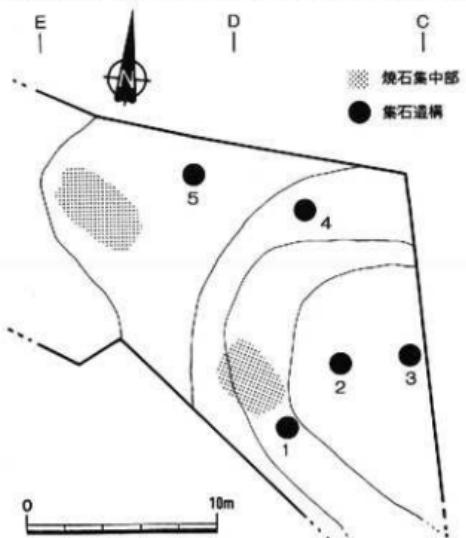


Fig. 50 III-1 area distribution plan (1/300)

掘り込みより浮いた状態で検出された。2号・3号集石は掘り込み上場の直径が1mを超えない小型のものである。

焼石集中部は掘り込みももたず、焼石がやや集中する程度のものである。集石遺構の予備礫もしくは廃棄礫とも考えられる。出土遺物はない。

出土遺物 (Fig51)

III-2区では集石遺構内より若干土器片が出土した以外に出土遺物はない。

—7 141～143は山形押型文土器の脇部片である。3号集石内出土。144は梢円押型文土器の脇部片で、表面にススが付着する。

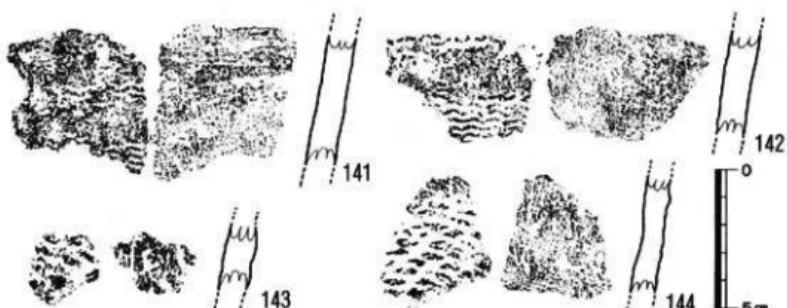


Fig. 51 III-1 area excavated artifacts (1/2)

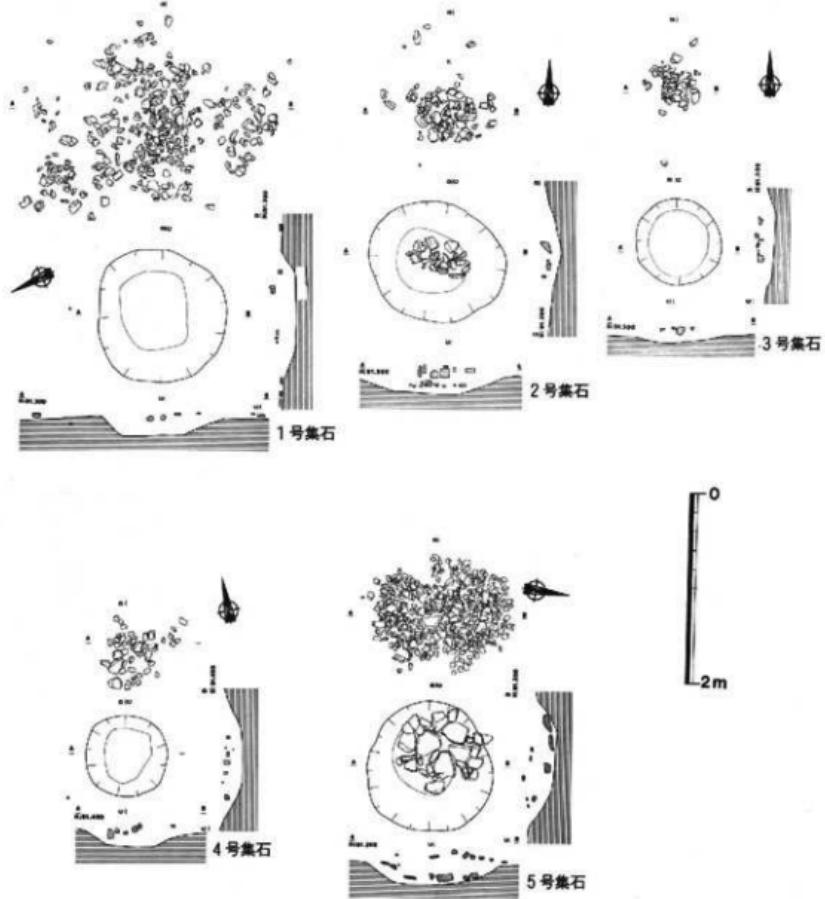
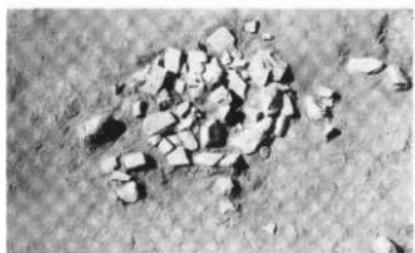


Fig52 III-2区集石造構実測図 (1 / 60)



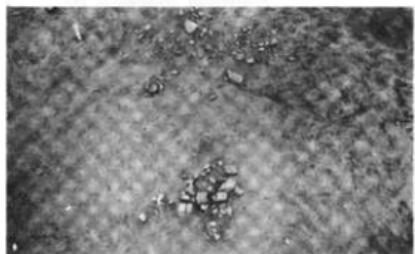
(1) III-2 検出状況（南より）



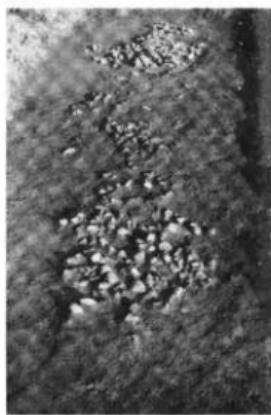
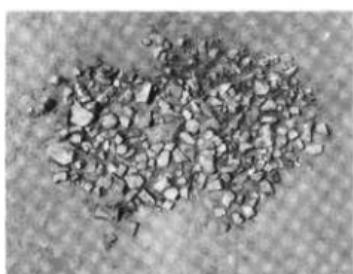
(3) 2号集石（東より）



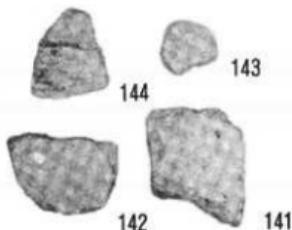
(4) 3号集石（南より）



(5) 4号集石、手前（東より）

(2) 1号集石（奥）検出状況（西より）
手前は焼石集中部

(6) 5号集石（東より）



(7) III区出土遺物

(4) IV区の調査

1. 調査の概要

IV区は笠下字神の下に所在する。分布調査で使用痕のある剝片が採集され、試掘調査で、集石造構・祭祀造構が確認された。10,000m²近い平坦部があるため、まず40ヶ所以上のトレンチを入れて造構の分布状況を把握し、工事関係者と打ち合わせを行い、特に造構の密集する地域を集中して調査を行った。(Fig 53)

調査の結果、集石造構約50基・住居跡1基・掘立柱建物約10基・溝状造構14基・祭祀造構3ヶ所および多数の土塙・ピット群を検出した。

出土遺物は剝片先頭器・縄文土器・石鏡・スクレイパー・環状石斧・蔽石・磨石・石皿・礫器・土師器・陶磁器・古錢・石臼・土錐・砥石・炭化種子・獸骨等である。

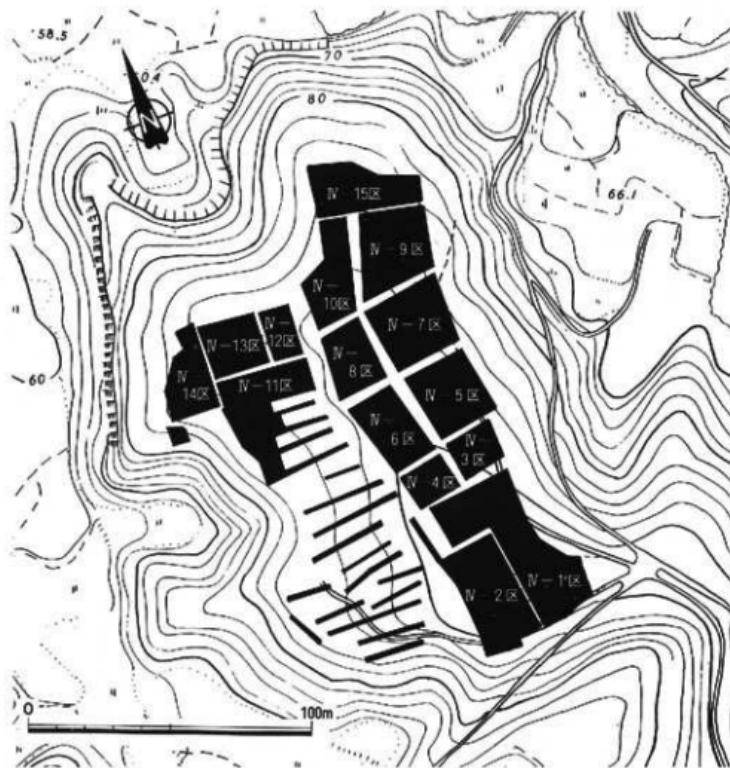


Fig53 IV区トレンチおよび測査区位置図 (1 / 2,000)

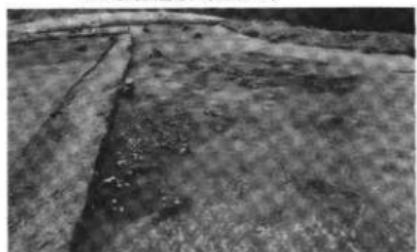
PL23



(1) IV区遠景（北より）



(5) IV-4区検出状況（西より）



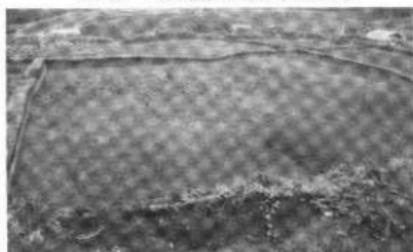
(2) VI-1区検出状況（南より）



(6) IV-5区検出状況（南より）



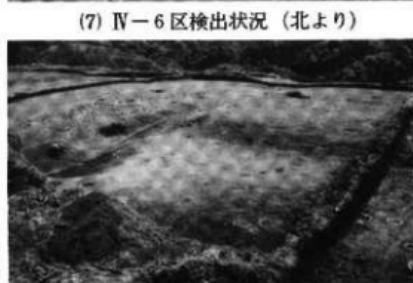
(3) IV-2区検出状況（北より）



(7) IV-6区検出状況（北より）

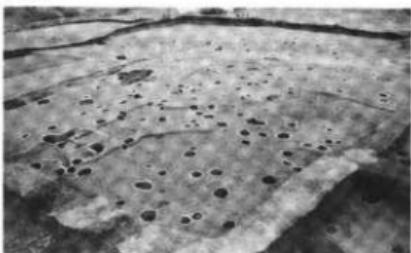


(4) IV-3区検出状況（南より）

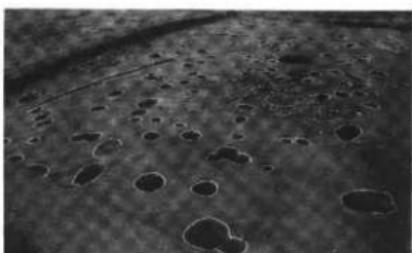


(8) IV-7区検出状況（東より）

PL24



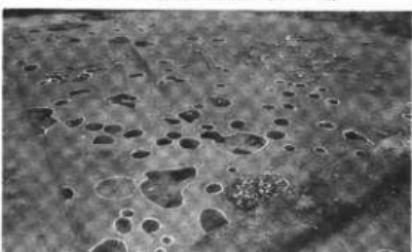
(1) IV-8区検出状況（北より）



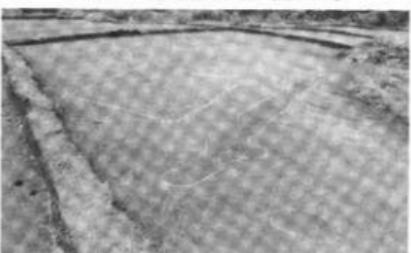
(5) IV-12区検出状況（南より）



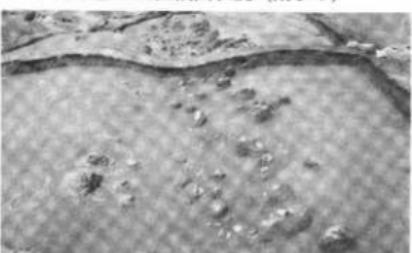
(2) IV-9区検出状況（南より）



(6) IV-13区検出状況（南より）



(3) IV-10区検出状況（東より）



(7) IV-14区検出状況（南より）



(4) IV-11区検出状況（東より）



(8) IV-15区検出状況（北より）

- ★ —— 押型文土器 (No.)
- —— 集石遺構
- —— 開器 (No.)
- SA —— 壁穴住居跡
- SB —— 振立柱建物
- SC —— 土塙
- —— 祭祀遺構
- SD —— 潟状遺構
- P —— 柱穴
- —— 写真方向 (遺構用)
- —— 写真方向 (調査区用)
- ◆ —— 写真方向 (土層用)

0 40m

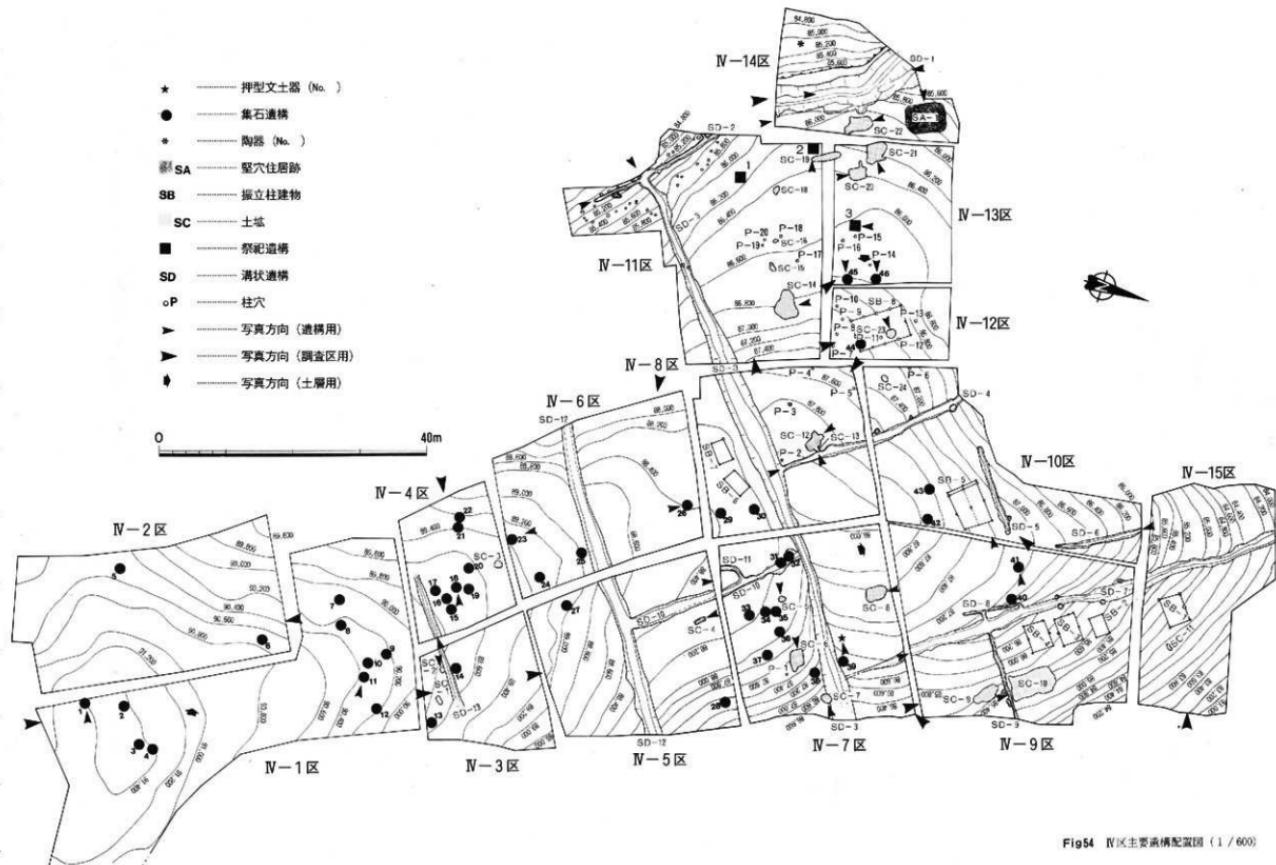
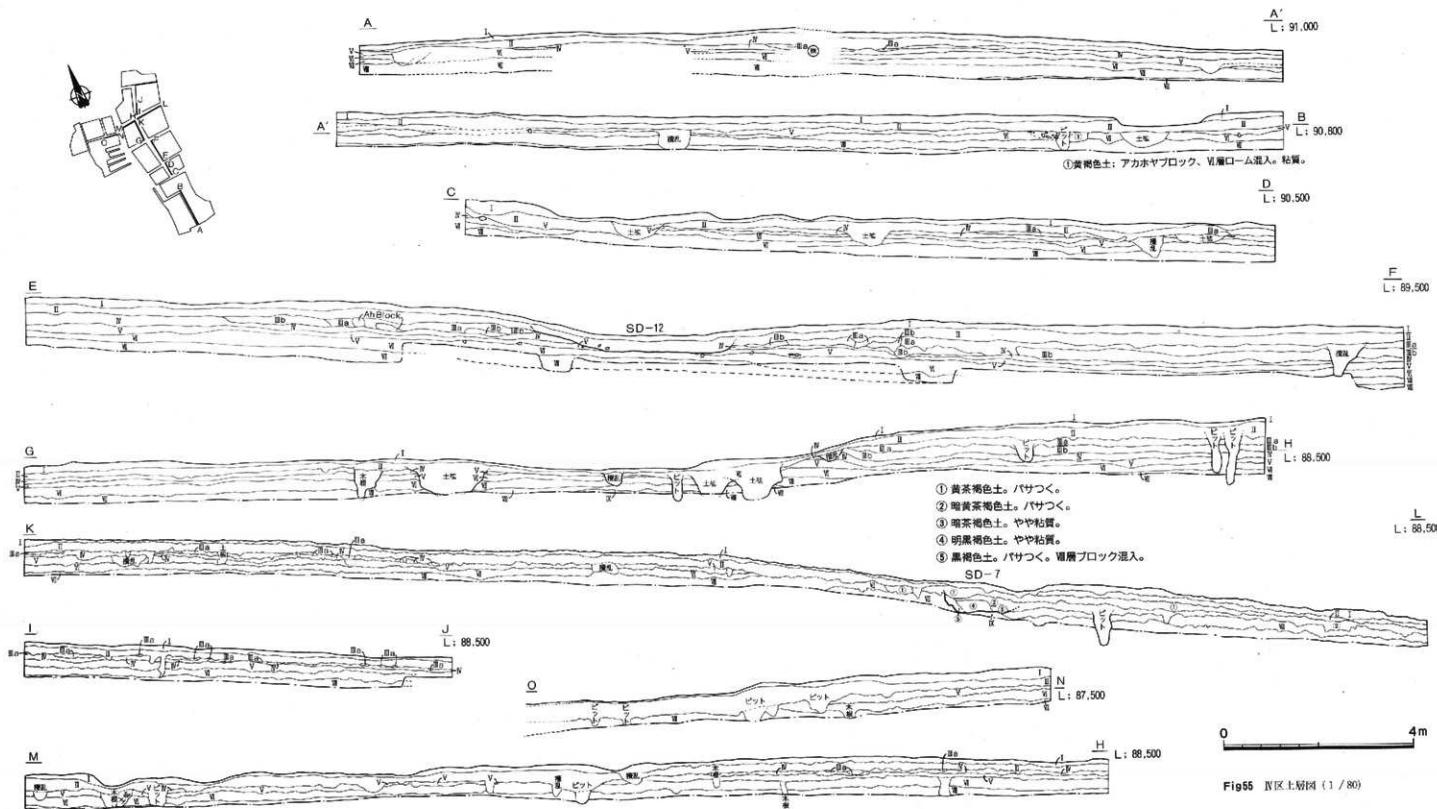


Fig54 IV区主要遺構配置図 (1 / 600)



2. 層序

IV区の層序は、各ヶ所とも基本点に相違は認められない。台地北より西側にかけてピット群等の集中する部分ではⅢa層からV層の一部が削平されている。また、台地の南側（Ⅲ区との境）では表土下30cmで埴層が出る。

I層（表土層）：黒色を呈する腐蝕土と火山灰で形成された表土層であり、約10cm程度堆積している。I層内には、若干の縄文遺物を包含するが、他区の状況からみて、弥生時代以降の堆積層と推察される。

II層：色調は赤みのある茶褐色を呈する。10～20cm。

IIIa層：明茶褐色土層。II層とアカホヤの混じった層である。場所によっては堆積が認められない。5～10cm。

IIIb層：明褐色土層（アカホヤ層）。10～20cm。II層より住居跡などが掘り込まれる。

IV層：暗茶褐色土層。約10cm。縄文時代早期の遺物・焼け石などが出土している。

V層：暗褐色土層。約10cm。旧石器時代の包含層と思われるが、文化層として把握できなかった。粘質を帯びる。

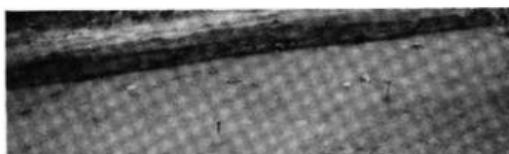
VI層：砂礫混じりの粘質の黄茶褐色土。20～40cm。

VII層：砂礫混じりの粘質の黄褐色土。約20cm。

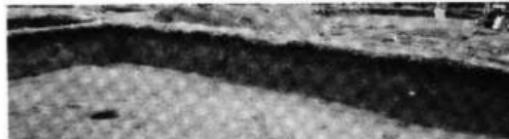
VIII層：黒褐色土層。3～5cmのブロック状。

IX層：黄褐色土。粘性を持つ。

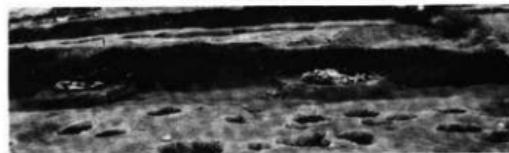
PL-25 IV区層序



① IV-1 区土層堆積状況（東より）



② IV-5 区土層堆積状況（南より）



③ IV-13 区土層堆積状況（西より）

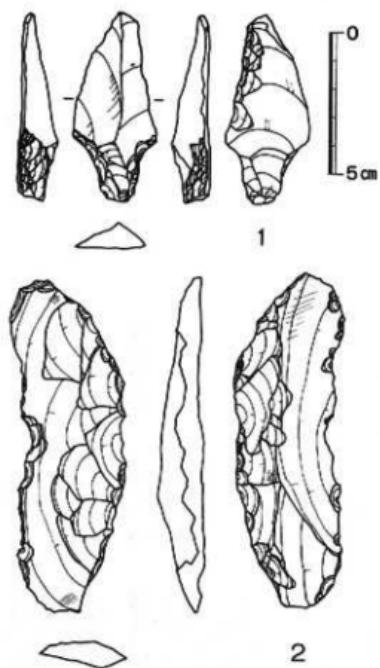


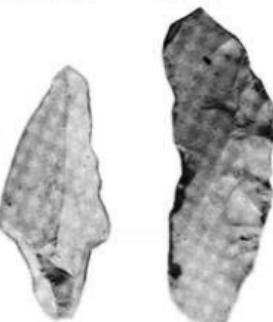
Fig 56 IV区出土石器① 刺片尖頭器・スクレイバー
(1 / 2)

3. 遺構と遺物

a. 旧石器時代 (Fig 56・PL26)

II区では旧石器時代の遺物として、流紋岩製の剥片尖頭器とスクレイバーが出土した。いずれも焼石にまじって出土し、出土層位は明確でない。

1は縦長の剥片の基部にプランティング加工を施し、一側刃を調整して尖頭状を作り出している。尖端部欠損、打面を有す。全長6.6cm、全幅3cm、最大厚1.4cmを計る。2は、弓状の幅広の剥片を利用し、外側の厚い部分を両方から荒い加工を施している。内湾する中央部に若干の加工痕が、両側に細かい剥離痕が観察される。棒状のものを加工するのに使用されたと思われる。全長12cm、最大幅3.7cm、最大厚1.4cmを計る。



PL-26 IV区出土旧石器時代遺物

b. 繩文時代

①集石遺構 (Tab 5、PL27、Fig 57・58)

IV区では中・近世において大幅な削平を受けており、集石遺構は南～中央部にかけてのアカホヤ層が残っている部分を中心に46基検出した。整理上、次の8タイプに分け、それぞれ代表的なものを取り上げた。

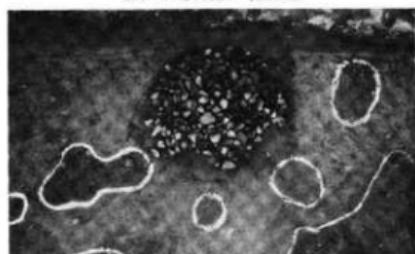
- A 1：敷石を持ち、掘り込み面が円形を呈し上場が1.5mを超えるもの。
- A 2：敷石を持ち、掘り込み面が円形を呈し、上場が1m前後のもの。
- A 3：敷石を持ち、不定形の土括を有するもの。
- B 1：敷石を持たず、掘り込み面が円形を呈し、上場が1.5mを超えるもの。
- B 2：敷石を持たず、掘り込み面が円形を呈し、上場が1m前後のもの。
- B 3：敷石を持たず、不定形の土括を有するもの。
- C：近接するもの。
- D：その他。



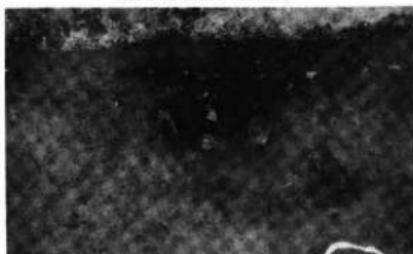
(1) 1号集石 (検出)



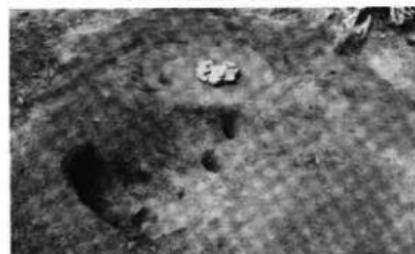
(5) 26号集石 (敷石)



(2) 45号集石 (検出)



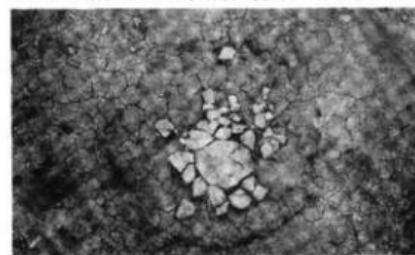
(6) 46号集石 (敷石)



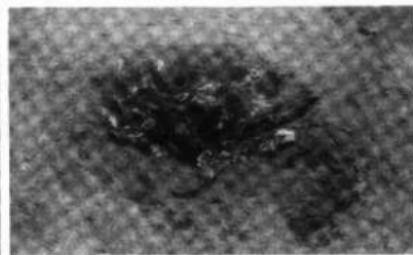
(3) 10・11号集石 (敷石・完掘)



(7) 23号集石 (敷石)



(4) 18号集石 (敷石)



(8) 41号集石 (完掘)

Tab. 5 IV区出土集石遺構計測表

山 --- 山形押型文
清 --- 情凹押型文
ch --- ㄔㄕ一卜

No.	タイプ	検出器幅 長軸×短軸 (cm)	縦・密	数石の状態	振り込み		標 記文	其 他	出 土 通 物	備 考
					上 場 長軸×短軸 (cm)	下 場 長軸×短軸 (cm)				
1 A 2	220×110	密	高	手の扁平確、深い皿状	135×130	82×73	30		石片、敲石	
2 A 1	185×135	密	厚	手の扁平確	151×136	115×72	35			
3 A 2	—	—	*	—	135×120	70×50	13			
4 A 2	—	—	薄	手の扁平確、深い皿状	100×82	57×35	8			
5 B 2	85×65	疏	—	—	88×78	53×50	11		石跡 (ch)	
6 A 3	95×50	疏	薄	手の扁平確、深い皿状	135×100	95×70	22			振り込みは長削円。
7 A 1	270×125	疏	—	—	185×170	130×125	22			
8 A 2	—	—	薄	手の扁平確、深い皿状	90×88	47×42	13			
9 B 1	192×145	密	—	—	215×200	170×145	35			中世ピットが振り込まれる。
10 C	140×110	密	浅	手の扁平確、深い皿状	195×190	125×120	15	慣		
11 C	130×120	密	—	—	140×125	75×75	25	慣		
12 B 2	110×80	疏	—	—	120×95	68×65	15			振り込み上場や削円。
13 A 2	130×90	疏	厚	手の扁平確、深い皿状	115×105	50×40	31			
14 A 2	96×65	疏	—	—	105×95	50×45	15			
15 B 2	140×110	密	—	—	115×95	57×55	18			
16	215×155	密	—	—	158×135	27×19	45			
17 B 2	105×65	疏	—	—	97×87	42×33	17			特殊な振り込み。途中段あり。
18 A 2	162×115	密	高	手の扁平確、深い皿状	132×115	80×62	22	骨山○		
19 A 2	188×105	密	薄	手の扁平確、深い皿状	137×130	65×58	33			一部削平をうける。
20 A 1	208×155	密	薄	手の扁平確、深い皿状	190×162	132×110	28			
21 C	113×90	密	—	—	102×80	53×31	23			裏石は同じじる。
22 C	190×95	密	—	—	106×95	66×51	24	山		*
23 A 1	145×130	密	扁平確使用、やや深い皿状	153×142	60×40	30			石跡 (ch)	
24 B 1	265×245	疏	—	—	233×225	187×176	24			
25 B 2	135×100	密	—	—	140×133	75×56	30	山		唐の影響をうける。
26 A 2	130×105	密	入筋大の丸座を数く	105×104	47×42	36	山・慣		石跡 (ch)	
27 A 2	95×58	疏	厚	手の扁平確、深い皿状	108×86	55×27	36	山		手向山式
28 A 2	172×82	疏	厚	手の扁平確、深い皿状	150×108	60×48	33	慣		半分割平される。
29 B 1	80×70	疏	—	—	160×148	115×93	7			
30 B 1	170×170	—	—	—	190×150	130×80	30			
31 B 3	240×130	密	厚手の扁平確、深い皿状	190×148	140×80	18				中世ピットが振り込まれる。
32 H 2	180×130	少	—	—	86×80	48×47	34	○		
33 B 2	—	密	人頭大的縁を配す	115×110	44×30	25				振り込みは長削円。
34 A 2	80×78	密	厚手の扁平確、深い皿状	126×112	78×47	32				
35 B 2	120×160	疏	—	—	124×104	60×58	25			中世ピットが振り込まれる。
36 B 2	110×100	疏	厚手の扁平確、深い皿状	155×155	60×42	22				*
37 B 3	120×110	疏	—	—	84×73	36×32	32	山・慣	磨石 2 点	振り込みは花弁続。
38 D	135×130	少	—	—	137×136	16×10	26			特殊な脈の込み。途中段あり。
39 B 1	120×115	疏	—	(164×160)	185×180	153×152				半分割平される。
40 B 2	66×45	密	—	—	105×104	86×77	12			*
41 B 3	120×80	密	—	—	118×80	45×45	24			振り込みは上場長削円形。
42 A 1	—	疏	厚手の扁平確使用、深い皿状	178×140	121×96	12	○			
43 B 3	200×100	—	—	—	151×116	80×76	20	山 ○		振り込みは上場長削円形。
44 B 1	150×120	疏	—	—						中世ピットが振り込まれる。
45 B 3	105×100	密	不	規	114×109	65×44	22			*
46 A 3	—	—	人頭大的縁を配む	100×75	50×24	20				*